74-22

東京都立中央図書館蔵

米國アーサー、エチ、スミス著
日本羽化渋江保譯

支那人氣質 全

東京 博文館藏版

明治

小引

本書は、合衆國人アーサー、エチ、スミス氏(Arthur H. Smith)の近著『支那人氣質』(Chinese Characteristics)(一千八百九十四年明治二十七年フレミング、エチ、リーヴェル商會發兌)を譯述したるものなり。スミス氏、傳道の爲め支那に在留し、二十二年の間、力を國民の氣質を觀察することに盡したりといへば、其の觀察の詳密にして大過あかるべきは、吾人の信して疑はざる所あり。

我が國、從來近世支那の事情を錄するものなきにあらず、然れども多くは一時の見聞を記すに過ぎざるを以て、叙事概ね皮相に止まり、簡略に失し、人をして隔靴の憾あらしむ。又横文の書にては、ウヰリアムスの『中華』(Williams' Middle Kingdom)の如き、詳密は則ち詳密なりといへども、稍、浩瀚に過ぐるの感なしと爲さず。スミスの『支那人氣質』は、往々東洋人の通習を以て支那人の氣質と爲し、東西風俗の異なるより、吾人の目に奇ならざるものを取りて其の奇を喋々するの類、吾人の心に慊たらざる所なきにあらざれど、要するに彼の國に於ける社會及び家庭の光面、暗面を描きて其

の眞相を穿ち、簡に失せず、繁に過ぎざるは、此の書を以て最とすべきに似たり。是れ生が此の書を譯述する所以なり。

書中難解の處は、註釋を加へて了解に便にす、故に割り註、及び一字下げの註は凡て譯者の挿入したるものと知るべし。

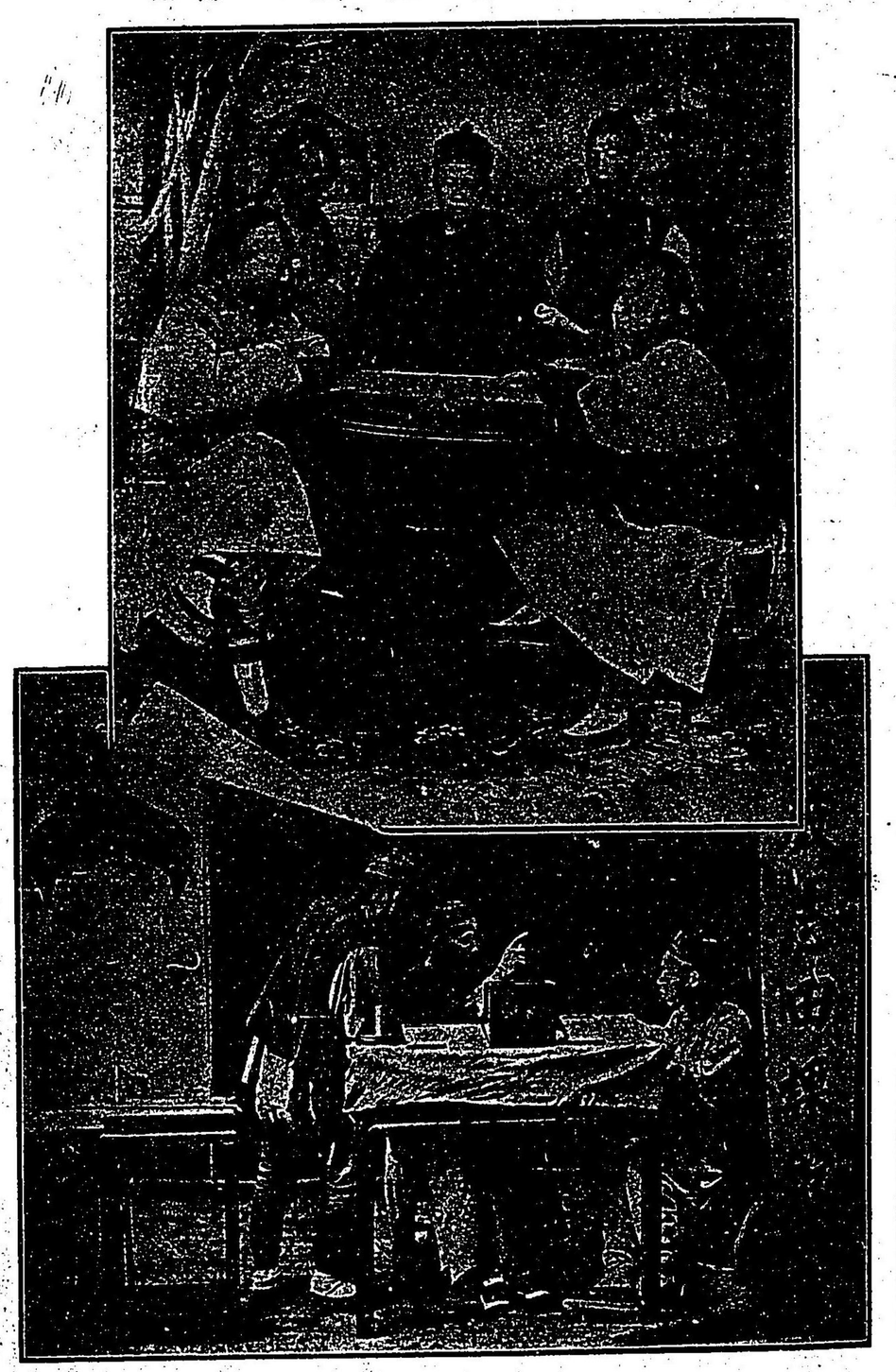
明治二十九年十二月

羽化生しるす

支那人氣質目次

緒言……一
第一章　體面……一〇
第二章　節儉……一四
第三章　力行……二五
第四章　禮儀……三五
第五章　時間に頓着なきこと……四二
第六章　不精確に頓着なきこと……五〇
第七章　誤解の才……六六
第八章　暗示の才……七六
第九章　柔軟的强硬……八九
第十章　愚蒙（直譯語、智力的混濁）……一〇一
第十一章　無神經……一一三
第十二章　外人を輕蔑すること……一二三
第十三章　公共心の缺乏……一三五
第十四章　保守主義……一四六
第十五章　安樂利便を度外視すること……一五九

支那風俗（圖巻）



扉　ト

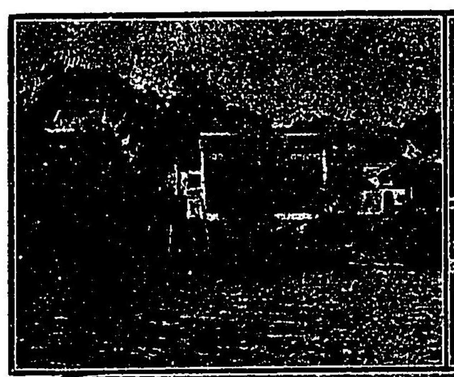
支那人氣質目次

畢

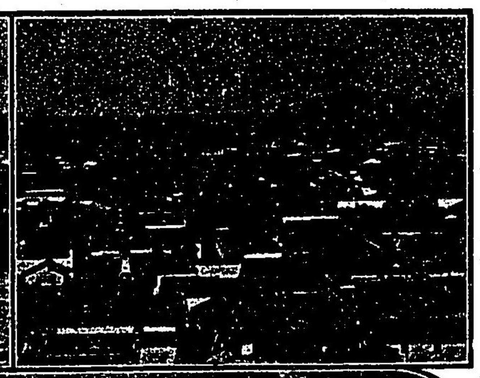
第十六章　活力の强壯なること……一八七
第十七章　堅忍不拔……一九八
第十八章　瀟然自逸……二一三
第十九章　孝心……二二四
第二十章　仁惠……二五〇
第二十一章　同情の欠乏……二六二
第二十二章　社會的颶風……二九六
第二十三章　互相の責任、幷に法律を遵奉すること……三〇九
第二十四章　互相の猜疑……三三七
第二十五章　信實の欠乏……三七〇
第二十六章　多神教、萬有教、無神論……四一八
第二十七章　支那の實狀、幷に現時の必要……四二七

清國西湖勝景

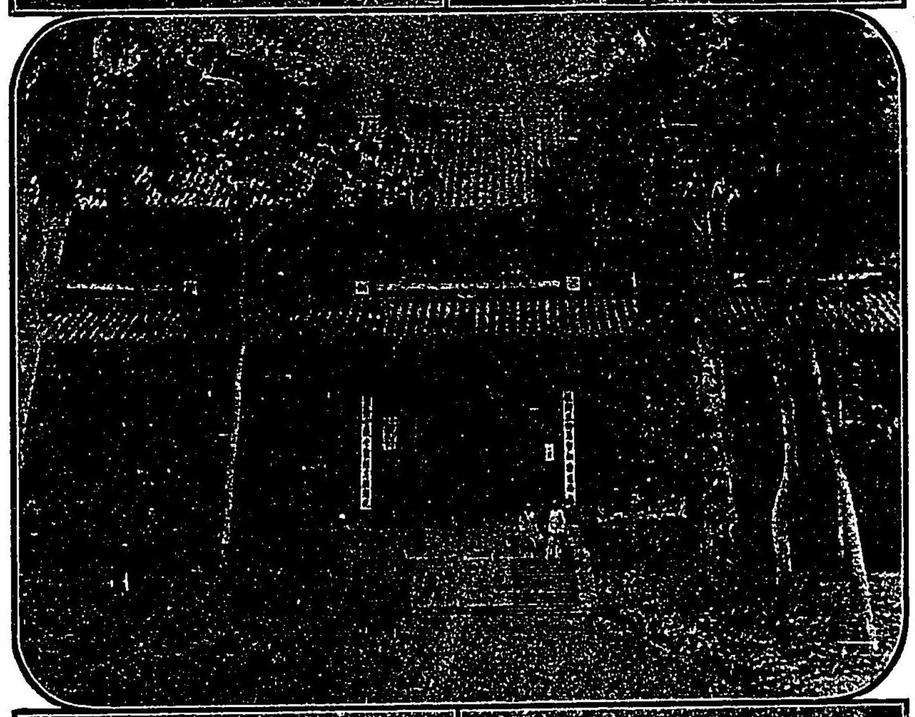
崇文書院前



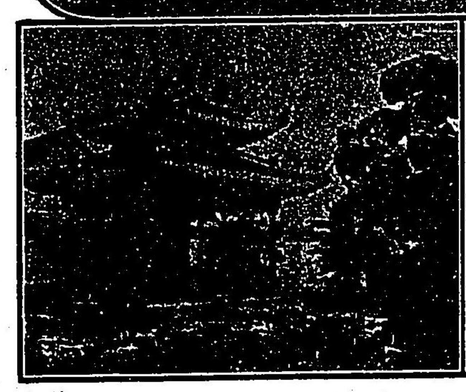
杭州市街



靈隱寺

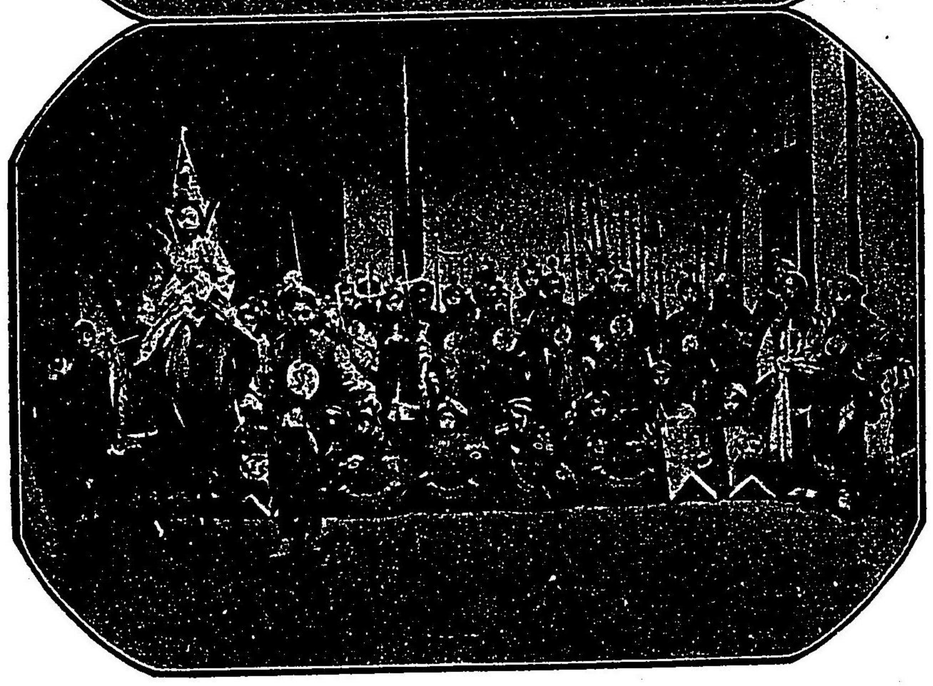


孤山島離宮庭前



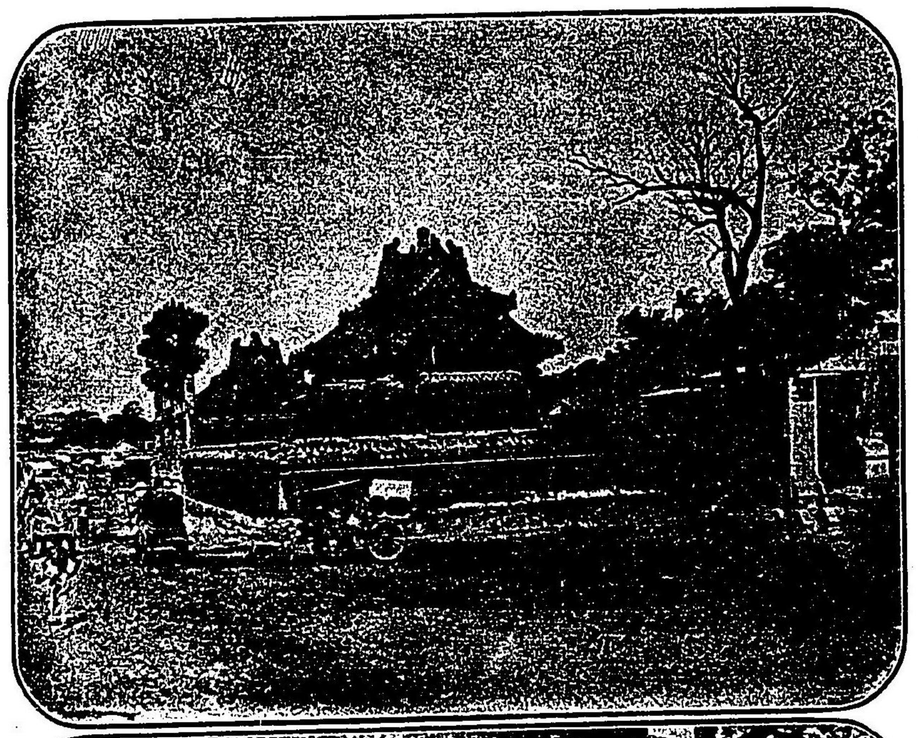
靈隱寺前冷泉亭

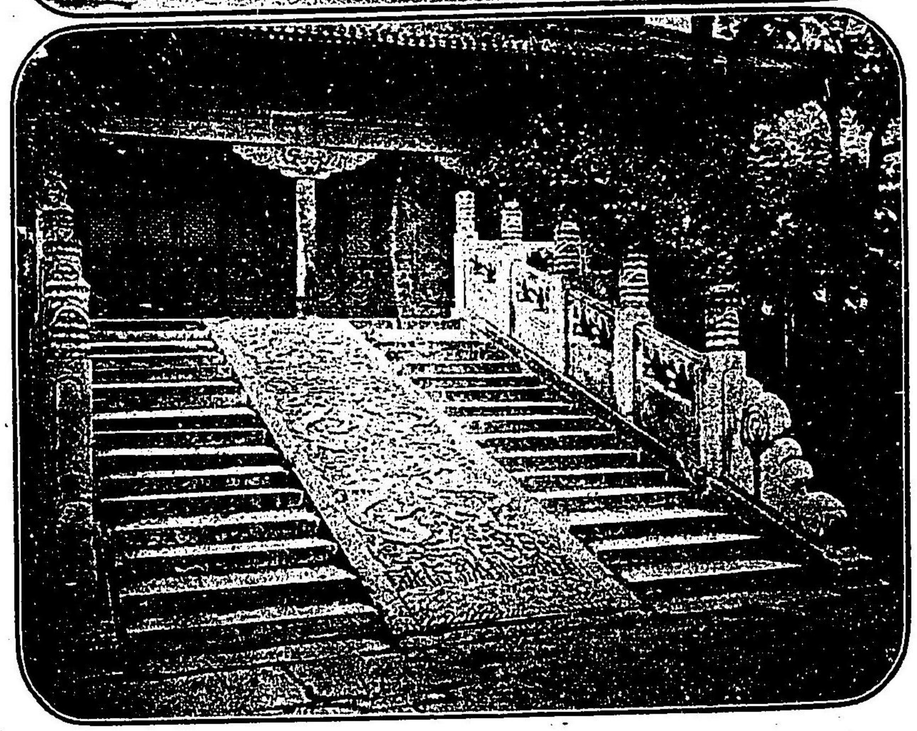
清國上海市中公園音樂堂



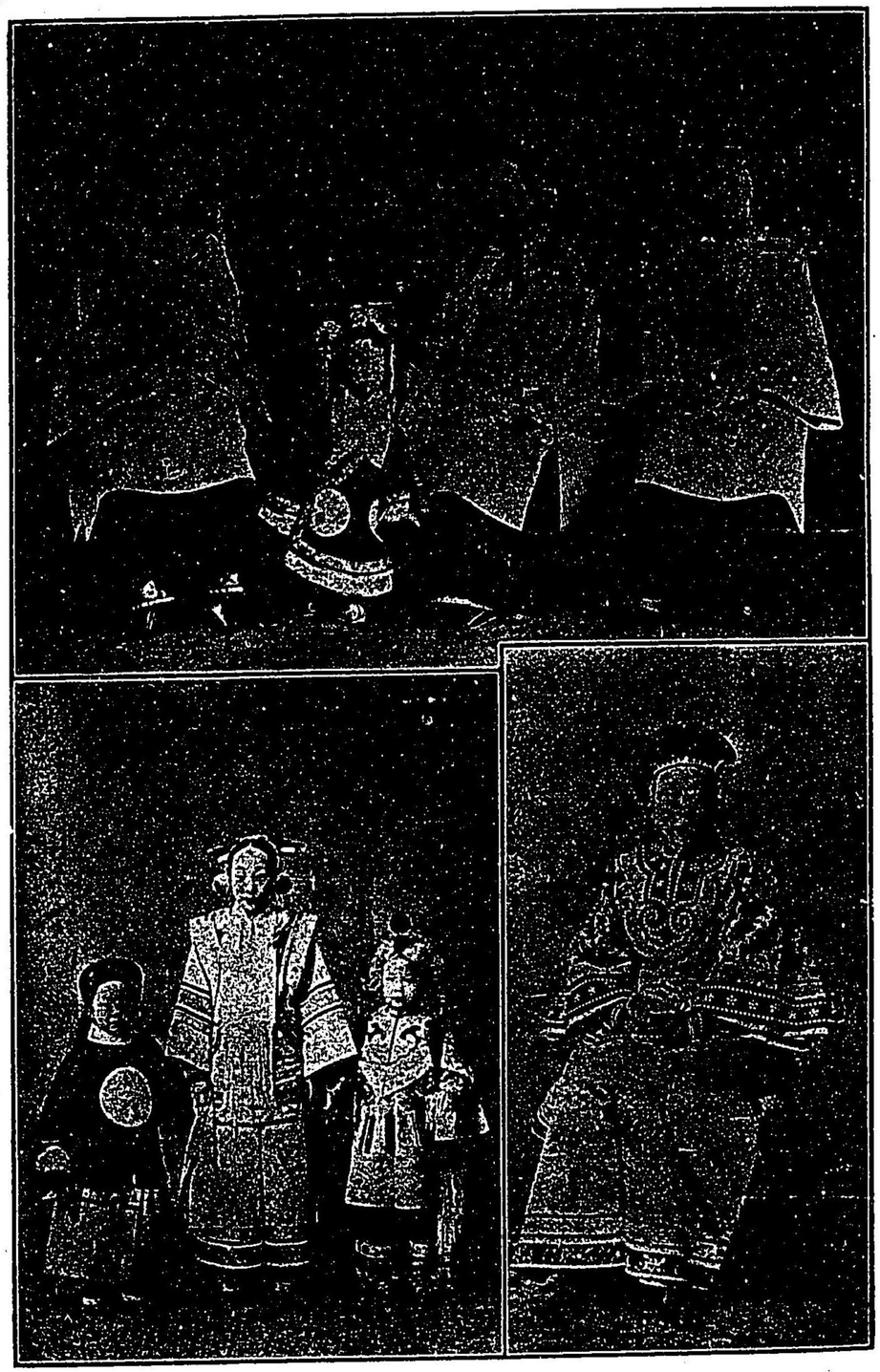
上海開港五十年祭

清國北京內朝





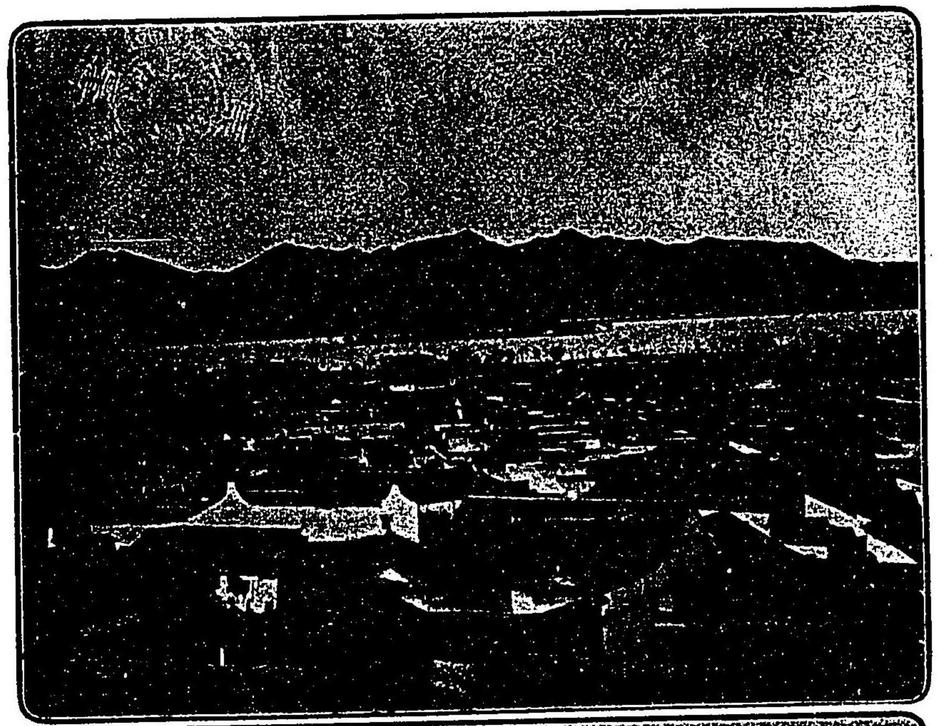
北京宮殿の前階

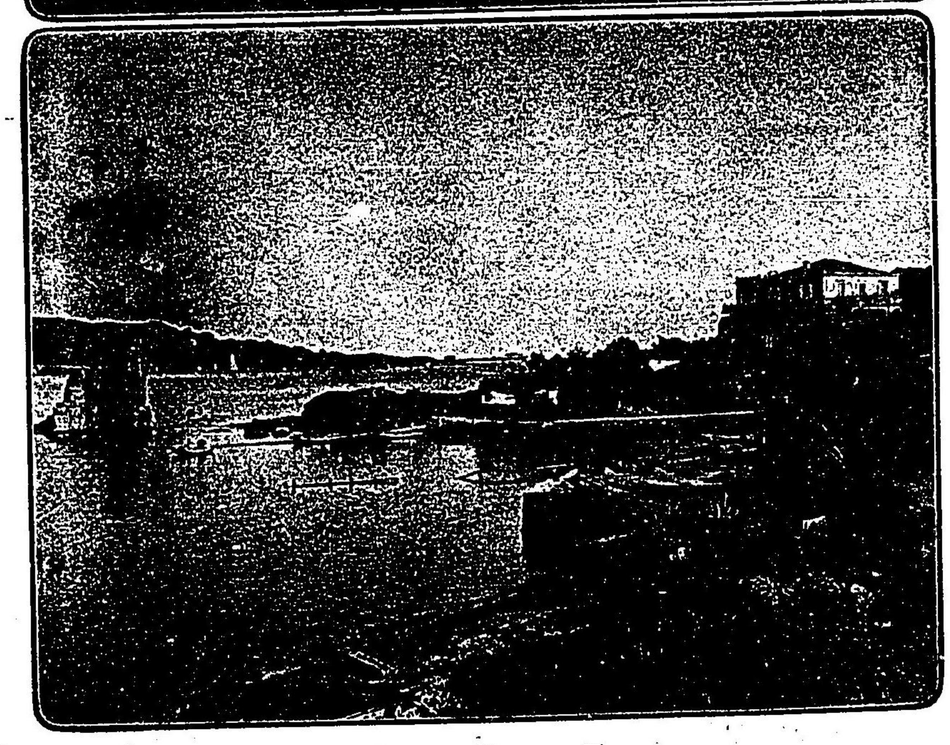


滿州旗人の少女

滿州旗人の兒女

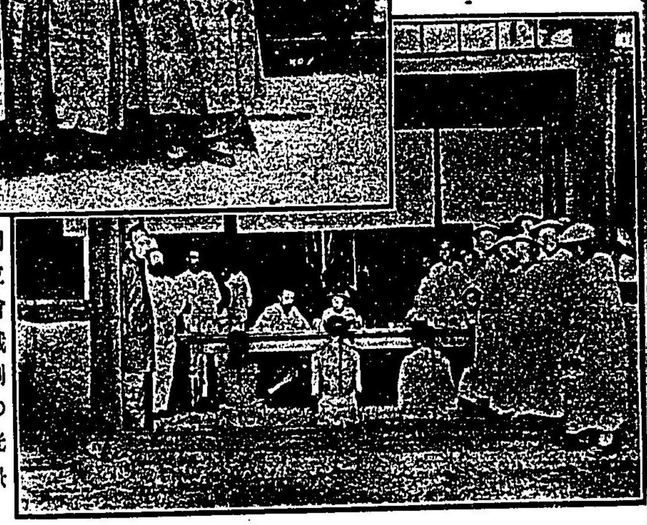
支那鎮江市街





厦門港

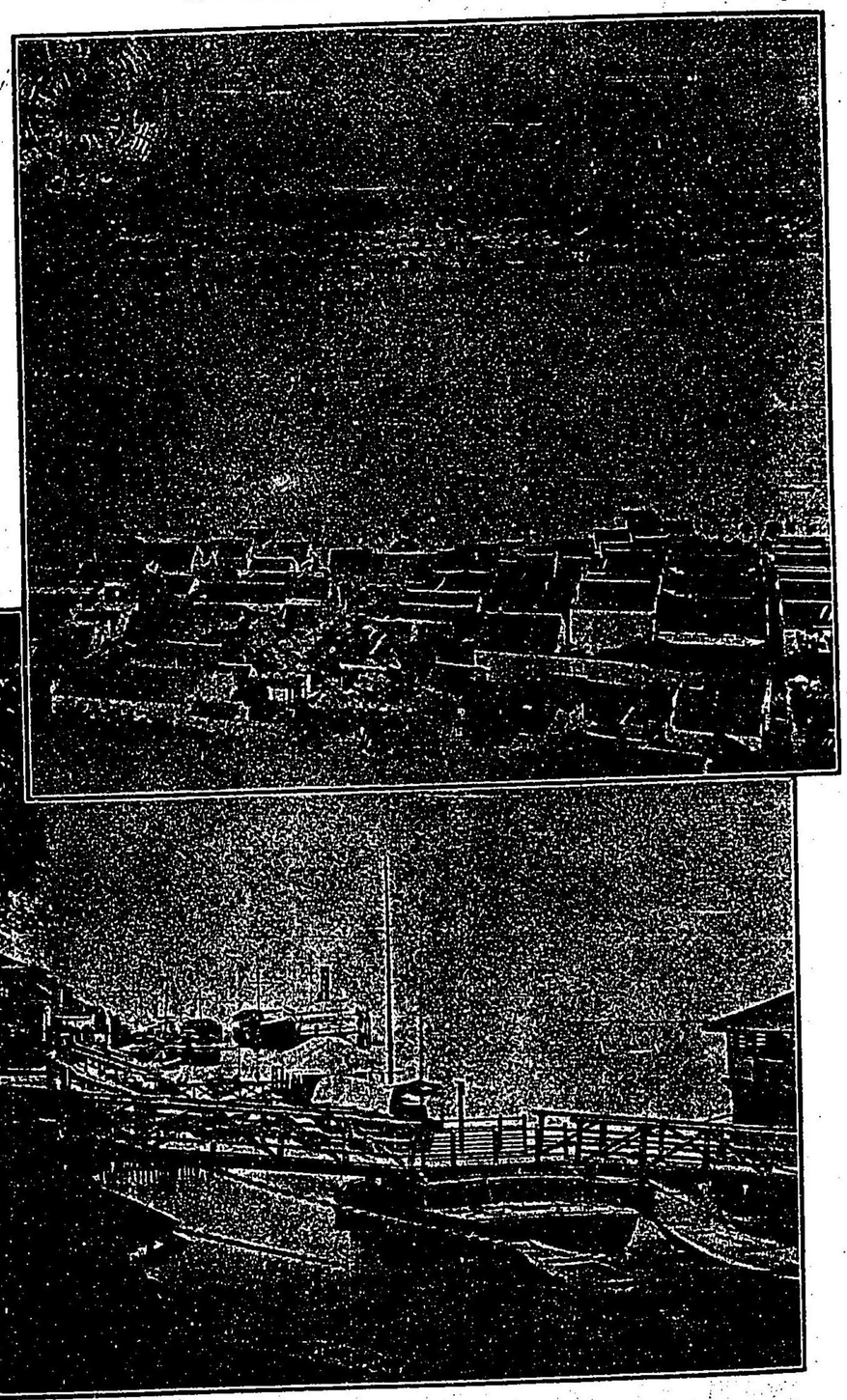
清國罪人首枷



同立會裁判の光景

同罪人笞刑

清國武昌漢陽兩府相子江對岸の景



漢江居留地の沿岸

支那人氣質

米國　アーサー、エチ、スミス　著
日本　羽化澁　江　保譯

緒言

本書に述べんとする三項の攻撃

夫れ證人の法廷に出るや、人は必らず期すべし、彼れは眞實を述ぶるならん、落ちなく眞實を述ぶるならんと。支那人の證人、即ち從來支那の事情を探り得て之を筆にしたる人々も亦世人の此の期望を屬する所、而して能く其の期望を容ふせずして眞實を述べ得たるもの多し。然れども只眞實のみを述べ得たるものに至りては甚稀なり。況んや、落ちなく眞實を述べ得たるものをや。斯の如きものは、未だ嘗て有らざるべし。何となれば、たとひ同國の事情に精通する人といへども、細大悉く之に通するは、爲し得べからざるの事なればなり。

故に予（著者スミス氏みづからを稱するなり。以下同之）は信ず、本書の如きも、三項の攻撃を免かれ能はざるべしと。今左に序を逐ふて、此の起り得べき攻撃を擧げん。

(第一)或は言はん。支那人氣質の眞相を描きて、之を他人に傳へんと企つるは、難きを望む者なれば、到底勞多くして功少なからん。一千八百五十七八年(安政四年丁巳に當り、翌五八年は我が安政五年戊午に當る。)の間、倫敦タイムスの支那通信員たりしジョージ、ウヰングロー、ク、ック(George Wingrove Cooke)氏は、各異の境遇の下に支那人を觀察するの好機會を得、且つ正だしく彼れ等を理會せしむるに足るべき人々の助を假りたれば、當時支那事情を記せし者多しといへども、其の便益を得たるの点に於て、何人も氏の右に出ること能はず。左るも氏は猶其の世に公にしたる手簡集の序文に於て、觀察の誤れるを辨解して曰く。

本集手簡集は、支那人の氣質を叙するの点に於て、必らず遺漏多からん。蓋し世に論題多しといへども、支那人の氣質といへる論題よりも人を誘惑するものはなかるべく、之よりも巧に想像を筆にし、人意に投すべき臆說を恣にするに辨なるものはなかるべし。顧ふに彼の小批評家輩は、予がかゝる利便を得ざるがために、之を利用せざりしを笑ふならん。有り體に言へば、予は屢〻想像上より支那種族全體の通有する諸種の氣質を細叙せんとしたりしことあり。然れども不幸にして、手に筆

を執ると同時に、目に其の人を見るを以て、百たび想像を形成(かたちつく)るも百たび瓦解せり。而して眞實を損はざらんが爲めに、想像より成りたる手簡を燒き棄てたること少なからず。

予は屢〻俊秀公正なる支那通の人に逢ひて、語次此の事に及ぼしたることあり。彼れ等亦常に予と同感の旨を述べ、予と同しく、全體より支那人氣質に就て概念を形成ることの出來能はざるを論せり。然り而して實際に支那人を知る人は、此の困難を感すれども、實際に知らざる人は、かゝる困難の横はれるを察せずして易々たる問題の如くに思ひ做し、彼の怜悧なる記者輩の如きは、却て咄嗟の間に此の難題を解析して、讀者をして首肯せしむることを得べし。然れども如何せん、議論秀妙なるも、肝腎の眞實を欠くを。蓋し吾人が支那人の氣質を知悉するの日は早晩來るべし。現在に於ては、單に其の最も著しきものゝみを叙述するを以て足れりとせざるべからず。

輓近三十年來、支那人の各地に出でゝ事務の表面に立つもの多し。而かも其の氣質を充分に理會するは、外人の能くする所にあらず。然れども吾人が支那人と相識に

爲りてより茲に數百年。吾人豈漸く其の氣質を詳かにし能はざるの理あらんや。

(第二)本書に對して特に起るべき駁論は、著者が著者たるの資格を具へずといふに在り。蓋し二十二年の間、支那に在留したるの一事を以て、支那人の氣質を叙述するに適するの證とし能はざるは、猶二十二年の間、銀鑛の中に潛匿したるの一事を以て、冶金術に關する書を著はし、又は複本位論を草するに適そるの証とし能はざるが如し。夫れ支那は、大國なり。纔かに其の二州に住し、半國を巡遊したる人、焉んぞ全國に渉れる事項を概括するを得ん。本書は、もと上海發行『北清日報』(North-china Daily News)の爲めに草したるものにして、普ねく大方の觀覽に供へんと期したるにあらず。然るに獨り支那に於て一般の注意を惹き起せしのみならず、英米及ひ加拿陀に於て、最も好評を博せしかば、終に看客の望に應じて一冊子に編纂し、世に公にすることゝは爲りたるなり。

『支那人氣質』の初版は、一千八百九十年(我か明治二十三年)上海に於て始めて發兌せしに、發兌するや否や、支那、及ひ東洋各國に持て囃され、數年前既に賣切れとなりたり。

(第三)或は、本書を駁して言はん。書中に載せたる意見の或る部分、殊に支那人の德性

今や再版に際し大に訂正を加ふ

に關する部分は誤謬を極めりと。

然れども、本書は、固より大體を描くに止まるを以て、彼の統計學の細事に渉れるが如くあらず。寧ろ寫眞畫に似たり。仮りに今甲乙二枚の寫眞畫を執りて之を對照せんに、二者全く相同じきと能はず。左れど眞相を顯はすの点に於ては一なり。只其の異ある所以は、寫す所の面の異なると、寫眞師寫眞鏡の同じからざるとに在るなり。』

久しく支那に住し、著者よりも更に一層同國の事情に精通する人々の中には、或は著者の意見を贊成するあり、又は、或る部分の着色を薄くし、一色畫たるの實を全ふすべしと忠告するあり。乙評の正當なることは疑ひの容るべきなきが故に、予は再閲に際して、常に此の批評を腦裏に存し、充分に訂正を加へ、偶再版の期來りたれば、曩きに叙述したる氣質の三分の一を刪りて、其の最も緊要なるものゝみを存し、『然自逸』の章(第十八章)の如きは、全く面目を新にしたり。

支那人の諸德を公平に叙述す

蓋し支那人の心に存し、身に行ふ所の諸德を默過して、之を頌讃せざるは、不正之より甚しきはなし。然れども之と同時に又理論上より考察を下し、其の德義を喋々するとの實際に過ぐるは、其の害決して前者に讓らざるあり。聞く。サカレー(Thackeray)

一八一一年(我が文化八年辛未)生れ、同六三年(我が文久三年癸亥)死す。英國の小說家なり。曾て或る人に問はれしことあり。足下の小說に於ては、善人常に遲鈍に、惡人常に怜悧なるは何故かと。時にサカレー答へて曰く。予は眼上に腦を有せすと。世に柏樹を畫ける木板圖あり。其の外線内に傘破崙(Napoleon)がセント、ヘレナ島(St. Helena)に在りて、首を傾け、手を拱く狀を畫き、覽るものをして、之を發見すべからしむ。左るに往々之を熟視しつゝ、之傘破崙の圖に心付かず、却て心付きたる人を誤まれりとするものあり。然れども一たび指摘せられたる後は、歴然網膜に映し、爾來此の畫を見る毎に、傘破崙を見ざらんと欲するも能はざるべし。之と同一事にて、支那に於ける事物にも、一見、目に入らざるもの多し。然れとも一たび之を目擊する以上は、決して忘るゝこと能はざるなり。

上文既に叙述したる如く、本書は、全國民の氣質を概括したるにあらず、外人の實驗を網羅して之を抽象したるにあらず、單に一個の觀察者が目睫に映する所を輯錄したるに過ぎざれば、支那人民の肖像といはんよりも、寧ろ一觀察者の目に觸れたる支那人民の略畫といふを穩當とす。之を譬ふれば、本書は一條の光線の如し。其の無數を集めて然る後始めて日光の全體を組織することを得るなり。『本書は、又歸納

的に攻究せしものなれば、條々悉く著者の實驗のみを擧げたるにはあらずして、數多の人々が種々の時節に實驗したる所を擧げたるなり。書中の題目多く例を引きて証せるは、之が爲めなり。

支那、及支那人の事を吾人に告げたる著者中の最も哲學的なるミーダウス氏(Meadows)曰く。外人の天才に關する正しき觀念を他人の心に傳ふべき最良法は、一口話を編纂するに在り。此の一口話は他人の注意を惹き起したる逸話、殊に珍奇なる逸話を云ふ。人民の珍奇なる性質の解くに際し、之を纂錄するを善しとすと。一般の原理は、斯る一口話を集めて、其の中より之を推度するを得るものなり。但し其の推度の方法は、往々世人の爲めに誤まれるにあらざるかと疑はれ、又は全く拒否せらるゝこともあるべし。然れども逸話、即ち一口話)に至りては、苟くも虛說にあらざる限りは、決して棄却せらるゝことなし。是を以て予は今支那人氣質を說くに際し、或る理論を說くに逸話の價値あるを信し、之を挿入したり。本書に實例の多きは之が爲めなり。

吾人アングロ、サクソン人の眼を以て支那人を觀察するときは、其の氣質が果して

東洋人一般の通癖なりやを識別すること甚だ難し。

支那人特殊の氣質なりや、將た東洋人一般の通癖なりやを識別すること甚だ難し。是れ實際に當りたる人々の能く知る所なり。故に本書の如きも、亦支那人の『氣質』として記せしものの中に、往々東洋人の通癖たるものあらん、讀者各自の經驗に由りて識別せられよ。

支那の社會を觀るの五法

予嘗て支那人に對する現時の交通の段階にては、其の社會的生活の狀況を知るには三樣の法あり。(第一)其の小說の研究、(第二)小曲の研究、(第三)演劇の研究是なり。さて此の三法、各自の價値を有するとは疑の容るべきなし。然れども(第四)以上の三者を合したるよりも更に一層の價値ある法、即ち從來支那、及ひ支那人の事を書きたる人々の未た探り得ざる源あり、家庭の研究是なり。蓋し一地方の風土記を作らんと欲せば、其地方の都會を視察するよりも、寧ろ村落を視察するを優れりとす。人民の氣質も亦然り。外人若し支那人の內面的生活を詳かにせんと欲せば、十年の間、都會の地に住するよりも、寧ろ一年の歲月を村落に費すを優れりとす。(第五)家庭の研究に次で、支那人社會的生活の單位とすべきは村落なり。是を以て予は、村落を根據地として本書を草せり。予は勿論傳道者たるの眼を以て之を草せず。可及的公平なる

支那問題は緊急問題なり

エルギン卿の金言

觀察者、即ち單に其の目擊せし所を報導する觀察者たるの眼を以て之を草せり。故に如何なる氣質が基督敎に由りて變化せらるべきかを記さず。又支那人の間に基督敎の必要なることを述べず。然れども若し支那人の性行に大なる欠点ありと爲すときは、其の欠点は、如何なる方法を用ゐて改むるを得べきかは、一大問題たらざるを得ざるなり。

今や支那問題は、啻に一國問題たるに止まらずして、國際問題たり。而して二十世紀に至らば、更に一層緊急問題と爲るべし。蓋し支那の如き人口夥多の國を改良すべき手段を講ずるは、苟くも人類改良を希望する人の忽かにせざる所ならん。吾人の論定する所若し妥當ならば、從來世人の等閑に附したる論線に由りて支へらるべく、論定を欠く所若し妥當を欠くならば、如何に支へらるゝも、遂に自滅すべし。

回顧すれば、エルギン卿(Lord Elgin)一八一一年(我か文化八年辛未)生れ、同六三年(我か文久三年癸亥)死す。英國の政治家なり。曾て支那駐劄公使たり。安政五年戊午日本に來りて通商條約を結びしことあり。曾て上海商人に向て述べて曰く。

貴國若し障壁を除きて內地の通行を自由にせらるゝならば、西洋の基督敎的文明は、東洋の舊文明と相對するの時あるべし。(東洋の舊文明は、數多の点に於て溝

覇且つ不完全なれども、吾人の同情と尊敬とを受くべき價値なきにあらず。而して二者相競爭する其の間に、基督教的文明は、公私の二德に於て舊文明に優るの証を明にし、貴國人民の間に行はるゝに至らん。

噫、卿が此の言の如きは、今猶適切にして、寸毫の間然とすべきなき。

第一章　體面(Face)

(註)註は譯者羽化生の挿入する所なり。以下皆然り。

本書の著者スミス氏は、獨り支那(及ひ我か日本)に所謂面(面部)の字をFaceと英譯せしのみか、體面の二字をも併せて亦Faceと英譯したるより、二義混同して遂に疑を生し、さては本文に述ぶる如く、西洋にてFaceと言へば、頭の前面のみに限れども、支那にては、單に之のみをいふに止まらずして、其の意味頗る廣く、吾人之を筆にすること能はず、否、理會そることすらも能はずなどゝ稱するに至れるあり。讀者其のこゝろして讀まれんことを乞ふ。『左れば本章は、西洋人より見れば珍ら

支那人の所謂『面』(體面)は其の意味頗る廣し

支那人の演劇的天性

しけれども、吾人日本人より見れば一向に珍らしからず。然れども本譯書は、小引にも述べし如く、全然原書を飜譯するを旨としたるに依り、此の一章を省かば、その旨趣に背くの恐れあり。殊に本章の中にも猶支那人氣質の一班を窺ふべきものあるを以て、悉皆之を譯載することゝ爲せり。讀者請ふ諒せられよ。

面(Face)は、何人も之を有せざるはなし。然るに今萬人の共に有するものを執り來りて、之を支那人氣質の一に加ふるは、一見甚だ謂はれなきに似たり。然れども支那人の所謂Face(體面)なるものは、單に頭の前面(顏)のみをいふにあらず、其の意味頗る廣くして、吾人之を筆にすること能はず、否、恐らくは、悉く理會することすら能はざらん。故に茲に一章を設けて之を說くなり。

今不充分ながらも、支那人の所謂Face(體面)なる語の意味を理會せしめんが爲めに先つ支那人が非常に演劇的天性を有することを述べん。支那に於ては、演劇は、殆んど唯一の遊戯と稱するを得べく、支那人の之を嗜むことは、英人の角力を嗜み、西班牙人の鬪牛を嗜むに同じ、輙もすれば、みづから俳優を氣取りて、身振を爲し聲色(こわいろ)を造ひ、俯伏頓首するなど、西洋人より見れば、皆に不必要と稱すべきのみならず、寧ろ

『顏』の原理

笑ふべきこと多し。又臺詞を工夫し、二三人の前に辯解するに、宛ながら衆人の前に辯解するが如き語法を用ゆ。彼れ曰く、「予は、茲に居合はさるゝ貴君、貴君、貴君の前に明言すと。彼れ若し困難に勝ち得るときは、首尾能く舞臺より引込み得たり」と唱へ、若し困難に勝ち得ざるときは、「舞臺より引込むべき路を發見し得ず」と稱ふ。凡て此の類の詞は、事實を有りの儘に述ぶるにあらずして、只形容に止まるのみ。左れば適當なる時節に、適當なる方法を以て、話を綺麗に述べんと思はゞ、演劇風に述べざるべからず。日常複雜の關係に於て、此の事を巧みにするは則ちFace(體面)を有つものにして、之を知らず、若くは之に拙なるは則ち『Face』を失ふ(體面を失ふ)なり。

故に一たび『Face』(體面)なる語を正だしく理會するときは、則ち支那人最も緊要なる氣質の大半を理會することを得べし。何となれば、その管鑰なればなり。

『Face』(體面)を支配する原理、並に『Face』(體面)を得るの方法は、西洋人の全く通曉し能はざる所なり。何となれば、西洋人は、間斷なく演劇的元素を忘れて、岐路に迷ふべければなり。支那人の所謂『Face』(體面)なるものは、西洋人より見れば、漠然として捕ふべからず。故に此の点より言へば、支那人と西洋人とは全く其趣を異にし、決して同

贈遺は『顏』を立つるなり

『顏』を汚さゞるの法

一の光を以て同一の物を視ること能はず。今若し村内に紛爭起りたりとせんに、調停の勞を執るものは、勉めて『Face』(體面)の平均を旨とせざるべからざると、双方の顏を立つるの意宛かも歐洲の政治家が國勢の平均を旨とせざるべからざるが如し。かゝる場合に於ては、調停の目的は、公平にあらずして、關係者各自の『Face』(顏)を相當に立つるに在り。訴訟の場合にも、亦多く此の主義行はれ、其の大半は預持(勝敗なし)と爲して局を結ぶなり。

人に立派なる進物を贈るは、其の人の『顏』を立つるが爲めなり、左れど其の進物若し一個人より到來するときは、辭して只一部を受納す。決して全く拒絶することなし。左に猶二三の例を擧げて、支那人が『顏』を保つを熱望することを說かん。

過失を非難せらるゝは、『顏』(面目)を失ふなり。故に顏を保たんと思はゞ、如何に証迹の顯著なるにも拘はらず、其の過失を宛とせざるべからず。例へば一箇の打毬紛失し、擔夫が之を拾ひ取りたるの証迹顯著なりとせんに、擔夫は怫然として、飽く迄も之を拾ひ取らずと主張し、打毬の紛失したる場處に行きて、竊かに懷中より之を投棄し、叫びて曰く、「足下の失ひたりと稱する打毬は茲に在り」と。又一侍婢あり。主家に

節儉の三法

在りて客人の筆刀（ペンナイフ）を隠せしが、既にして卓被の下より之を顯はし、茲に在り々々々と叫べり。かゝる場合に於ては、凡て『顔』（面目。體面）を保つことを得るなり。從僕あり。不注意より主家の一物品を失ふ。此の物品は、貴重の物品にして、必らず之を發見するか、否らざれは給金の内より之を償はざるを得ざるを知りければ、其の後備を解かるゝに臨みて高聲に述ぶらく、「彼の銀匙の代金は、予之を要せず」と。かくて『顔』（面目。體面）を全ふせり。

吾人西洋人より見れば、人の『顔』を立てゝその生命を失はしむるは、甚だ望ましからぬことなり。然れども支那の一地方長官曾て『顔』を全ふするが爲めに、官服着用の儀、斬に處せらるゝを免されたることあり。亦一奇事といふべし。

第二章　節儉（Economy）

『エコノミー』（節儉）（下文皆節儉と譯す）なる語は、家政を整理するの義にして、殊に出納を整理するをいふ。節儉は、三樣の法に由りて之を行ふことを得べし。（第一）需要の數を減すること、（第二）浪費を省くこと、（第三）少許を利用して多量を代表せしむること是れなり。

支那人の粗食

支那人は料理の献立に妙を得たり

支那人は此の三法の孰れより言ふも非常に節儉なるが如し。

凡そ外人の支那に入りて先つ感覺を起すは、食物の非常に質素なるにあり。多數の人民は、只米、稷、種々に調理したる蠶豆、野菜、魚類等の如き僅々數種の食品に由りて生命を繋ぎ、四億に餘れる人民の常食此の外に出でず。只祭日、又は特別なる時機に於て一片の肉を添ふるのみ。

今や歐米諸國に於ては、可成的滋養品の價を廉にし、貧民の口に入るべからしめんと企つるの際なれば、支那に於て、今現に此の法の實際に行はるゝを知るも亦裨補なきにあらざるべし。さて支那に於ては、平年には、大人一日に二仙（セント）以内を費せば、多量の滋養品を食するを得べし。凶年といへども、政府より一人に付き、毎日一仙半以内を給して、數月間の生命を維持せしめたることあり。全國到る處、食物の献立に妙を得るにあらずんば、焉んぞ能く斯の如きことを得んや。或は言はん、支那人の食物は、概ね少なくして粗に、外人の口には、『まずく』して、往々厭ふべきものなきにあらずと。實に然り。然れども料理の点より見るも、節用の点より見るも、支那人は料理法の

支那人の食物は貴重なる部分甚少なし

達人といはざるべからず。ウヰングローブ、クック氏(Wingrove Cooke)は、此の点より、支那人を佛人の下、英人の上に位せしめたり。(米人の上にも位せしめて可なり。)氏の既果して當を得たりや否やは、吾人之を斷言すること能はず。然れども支那人が是れ等國民の或るものに優れることは疑ふべくもあらざるなり。又生理學者の眼より觀察を下すも、支那人が(前に記せし僅々數種の食品に於て)常食の擇び方に妙を得たることは明かなり。而して其の献立の完備なる、將た毎次膳の上に登るべき僅々數種の食品を利用して種々雑多の料理を爲せる、是れ等が支那人の長處なることは、苟くも支那料理に着目する人の能く知る所なり。

非常に顕著なる他の事實は、支那料理に於て、費ゆる部分の少なきに在り。苟くも利用し得らるゝだけの限りは、悉く之を利用するに在り。通常の家に就て、其の一度の食事を終へたる跡の殘物を見るに、餘し棄つる所は、實價の一零片に過ぎず。此の事實を証せんと思はゞ、試に彼の國に於ける犬猫の身體を見よ。ソモ犬猫なるものは、不幸にして人類の殘滓に生命を維持するものなり。故に人若し餘す所多ければ、犬猫おのづから澤々とし、餘す所少なければ、おのづから累々たるべきは論を待たず。

猫に踏れたる獣類の肉を厭はず

左れば支那に於ける犬猫の累々たるを見て、國人が殘滓の少なきを知るべし。夫れ新國の人民は、兎角浪費の弊あり、合衆國の如き生活の容易なる土地に於て日々投棄する廢物は用ゐて以て支那六千萬の人民を稍〻奢侈に生活せしむることを得べし。然れども六千萬の支那人が充分に食し、又その殘餘を奴婢、若くは兒童が食したる後の殘餘は、以て幾何の人類を肥すことを得べきや。是れ吾人の知らんと欲する所なり。支那に於ては、茶碗に殘れる茶といへども再び土瓶に投して之を温むることは、豈驚くべきの至にあらずや。

支那人が有害なる食物を厭忌する神經の未だ歐米人の如く發達せざるは、知らざらんと欲するも能はざるの事實なり。さて支那人は魚類を常食とし、北部に至れば、普ねく馬、騾、牛、驢馬等の肉を食す。往々駱駝の肉を食する場處あり。而して是れ等獣類の死するや、其の死因の怪我たり、老病たり、將た其疾病たるを問はずして悉く之を食し、たとひ肺、肋膜炎(ブリユーロ、ニユーモニア)の如き傳染病に罹りて斃れたるものといへども、之を膳に上せて毫も怪まざるが如し。彼れ等の節儉亦甚しきに失するにあらずや。但し同國人といへども、傳染病の爲めに斃れたる獣肉の衛生上に害あるを認めざるにあら

鍋底甚薄し

也。論より証據は、其價の甚だ廉なるに由りて知るべし。左れぞ猶之を販賣するに、悉く買はれ、悉く食せらるゝなり。人多く此死肉の爲めに身體の或る部分に或る害を生したるを知れり。而かも價の廉なるに誘はれて之を食し、其の結果の如何を度外に置き、公言して曰く、病は只一時の事なりと。又死狗、死猫の肉を食す。吾人は屢、村人が番木鼈の爲めに死したる犬の肉を食するを見たり。一日或る一人其の結果の如何を慮りて洋醫に謀りしことあり。然れども早既に鍋に入れたるが故に、節儉の上より、生者を以て之に代ふるに忍びず、遂に斷然之を食せり。而して別に害を覺えざりしといへり。

食物の調理に關する支那人が節儉の他例は、鍋類の底を薄くして、煮物に適當せしむるに在り。元來支那に於ては、薪材甚だ乏しく、且つ不廉にして、容易に得べからず。故に概ね木葉、柴、又は米麥類の根を以て薪材に代ふることあるが、此の類のものは、忽ち燃え盡きて永く存することゝ能はざるに依り、鍋釜の底を薄くして之に適應せしめ、注意に注意を累ねて速に沸騰すべからしむ。是れ此の場合に於ける節儉の第一例なり。又木葉等諸の薪材は、他に未だ何事をも爲し得ざる幼兒に命じて之を拾

ひ集めしむるが故に、秋冬に至れば、是れ等の幼き樵夫は、群を爲して各地を巡り、苟くも把手に羅り得べきものは、悉く取り去りて、一本の雜草をだも遺さず。亦棒を手にして秋葉を打ち落す。其の熱心の狀は、栗にても打ち落すかと思はるゝばかりなり。又藁といへども、忽ち取り去らるゝを以て、風位如何を示すべき暇を有せず。

(註)英國の俚諺に「羽は風の方向を示し、藁は流の方向を示す」といふことあり。(羽化生編纂『國民錦囊』第六百九十七頁參看)顧ふに此の類の俚諺をいふならん。

○　○　○　○　○　○

苟くも支那の細君たるものは、少許の材料より多量の物品を作るの法を知らざるはなし。今彼の女が服裝を製する法を見るに、材料といひ、裁縫といひ、歐米諸國の細君の如く浪費せず。凡て時間と、力と、材料との三者を節用するを旨とせり。支那人は常に外國布の最小片を歡迎し、之を利用して美しき服裝を製す。其の工夫に至ては、彼の『家政書』なるものを世に公にせる婦人著述家輩の夢にだも視る能はざる所ならん。即ち西洋の不用品は、一變して支那の實用品と爲り、斜に截たれし一小片といへども、猶靴紐とせられて、毫厘の欠点を見ざるなり。夫れ倫敦、又は新約克に住する蕊

賀詞を送るる時の節儉的注意

支那人の節儉は小賣商に徹して明かなり

反古もて窓を貼る

節儉の極必須の食物を省く

善家は、我か不用と認むる布帛を貧民に給與し、而して貧民をして依頼心を生せしむるの害を悟らせ。今若し此の布帛を支那人に與へたらんには、たとひ衣服の材料製法は、東西全くその趣を異にするも、悉く之を利用して、一小部分をも空しく棄てざるべし。是れ吾人の信して疑はざる所なり。

支那人は、往々賀詞を紙上に書し、絹に貼り附けて友人に送りけるが、之を貼るに糊を用ゐず、生漆を用ゐて剝がし易からしむ。是れ受領者何時にても之を剝ぎて絹を利用し得られんが爲めなりとぞ。

支那人の節儉なることは、小賣商人の毫厘を爭ふに於て証するを得べし。例へば奇零商人が諸種の箱に各若干數の引火奴を投し、一箱毎に獲る所の毫厘の利潤を精算するの類是れなり。

支那人其の勘定帳の不用と爲りたる後は、解きて窓を貼り、又は提燈箱に用ゆ。

支那人は、節儉の極、常に必須の食物を省くの傾向あり。而かもみづから不條理の事と思考せず、當然の事と思考す。ピー、ジー、ヘンリー博士(Dr. B. C. Henry)が其の『十字及び龍』(The Cross and Dragon)と題する書中に載する所は、此の適例なり。同書に據る

小兒は多く全裸體なり

に、ヘンリー曾て輿に乘じ、三名の擔夫を備ひて、五時間に凡そ二十三哩の道を行きしことあり。此の擔夫は、それより廣東に歸りて始めて朝餐を喫するものなりと語れり。噫、彼れ等が朝餐前に、四十六哩の道を歩み、而かも其の片道は、重荷を肩にするは、何の爲めぞ。畢竟只五仙の錢を得んが爲めなり。節儉も茲に至りて亦極まれりといふべし。

ヘンリー又た他の一例を載せて曰く。二人の擔夫あり。一箇の轎を昇きて三十五哩の道を行き、一塊の食をも携へずして、舟に乘りて歸る。時に午前六時。二大碗三仙の飯あれども、頑として顧みず。舟は淺瀬を航するが故に、軋りて急に進まず。翌日午後二時に至りて始めて廣東に歸ることを得たり。然るに彼の兩夫は、かく重荷を負ひて三十五哩の道を行き、二十七時の間、口に一塊の食を執らざれども猶廣東まで十五哩の間、ヘンリー博士の行李を運ばんと望めりと。

支那人が節儉の結果には、歐米人の感服せざる所多し。然れども節儉の精神に至りては、吾人之を頌讃せざるを得ざるなり。此の國の各地方、殊に北部(北部に多きは是れ亦一奇事)に於ては、一年數月の間、男女兒、エデンの園の服裝(全裸體を云ふ)を爲して遊戯

入浴せず

洗濯の法甚粗なり

するもの多し。而して今日に至りては、此の服裝上同を以て、却て愉快と爲せども、其の本源に溯りて之を尋ぬれば、畢竟節儉より起れるものなり。『支那無數の弧輪車は、軋々として耳を煩はす。是れ數滴の油を惜み、寧ろ喧騒を忍ぶに由りて然るなり。』日本人若し支那人に倣はれて同國に住するときは、其の契約書の中に、日々數ガロンの湯を給せらるべきを明記し、我が入浴好きの國風に從て入浴す。是れ支那人は入浴せずと聞きて、己れが入浴の快を奪はれんことを恐れてなり。但し支那にも亦浴室なきにあらず。然れども人民概ね之に入らず。甚だしきは、生涯浴場を見しことなきもの多し。西洋の一婦人曾て支那の母が其の子に滿杓の砂を擲ち、然る後一本の古箒を以て之を掃ふを見て、問ふて曰く、『卿には、毎日子息を入浴せしめらるゝや。』彼の母は、怫然として答へて曰く、『何、毎日入浴とや。我が子は、誕生の後、今に一回も入浴せしめたることなきものを』と。

聞く、伊太利人は、英人を『石鹸水』と名くと。支那人が一般外國人に對する感情も、正さしく斯の如くなるべし。勿論支那にても、自他の爲めに衣服を洗濯するものなきにあらず。然れども其の洗濯たるや、甚だ『ぞんざい』にして、歐米人の清潔と稱するも

出來合ひの道具なし

燈火甚暗し

のに比すれば、殆んと洗濯せざるに同じ。願ふに支那人とても不潔を厭はざるにあらず。而かも洗濯に用ゆべき材料を儉約するより然るならん。論より証據は、支那人の中にも、清潔を好むことの歐米人に讓らざるもの多く、而して往々潔癖家の標本とすべき人あればなり。

支那にては、概ね出來合ひの道具を買ふこと能はず。是れ節儉の天性より起れる結果といはざるべからず。ソモ未製品を買ひ求めて、みづから之を製するときは、其の價稍廉に、既製品を買ひ求むるときは、其の價稍不廉なり。支那人多く此の意見よりみづから之を製す。是れ出來合ひの道具なき所以なり。

支那人が材料を節約することは、上文既に叙述したり。今通常の家々に就て視察するに、燈火は甚だ暗くして、大に油費を省き、而かも壁間に穿てる孔中に置きて、朦朧たる暗光を二室に及ぼすべからしむ。又織物、陶器、金屬、象牙等の製造所を見よ。支那人の節儉を証する、豈之に超ゆるものあらんや。但し其勞動の法を歐米風に改むるは爲し得べし。然れども材料を節儉するの一事に至りては、此の上の良法を發見することと能はざるあり。支那人は、恰かも無より有を生するの民にして、其の生産は、單

貫米運搬に『人手』を省く

烟草栽培に費用を省く

苦裝みづ

複に論なく、一として其の徴候を呈はさゞるはなし。

支那人は、右の如く、可及的少許の材料を以て、可及的多量の事業を營むといへども、殊に其の最も著しきは、納租の法ならん。此の國に於て、各地より無數の穀物を北京に貢納するに、先つ船積みとして、天津より白河に溯り登州に於て陸揚することなるが、茲に穀物貿易商といへども、一驚を喫せしむるは、此の山積せる米と稷とを船より卸し、之を量り、之を運搬するに、只多衆の擔夫と、截圓柱狀の桝と、無數の蘆蓆とのみを使用し、其の他何物をも使用せざるに在り。其の法、蘆蓆を地上に擴げて、其の上に穀物を『あけ』、再ひ升目を量りて、俵に詰め、然る後之を運搬するなり。

米國に於ては、烟草栽培に要する大なる費用の一つを乾燥用に供すべき長き堅牢なる小屋の建築とす。然るに支那に於ては此の費用を要せず。小屋は之を茅葺と爲し、既に不用に屬すれば、焚物に供するに、新しきものと更に相違を見ず。又烟草を摘み畢れば、其の堅牢なる莖は、其の儘に置き、此の莖に藁繩を張りて、烟葉を乾かし、夜に至れば、葉、繩共に取り去るなり。顧ふに簡便此の右に出るものはなかるべし。

夫れ苟くも支那に滯留し、同國の事情を視察するものは、支那人の節儉に就ても、猶

から墓地の近傍に移りて死を待つて

力行は德行の第一なり

力行は長廣厚の三者より成る

餘多の類例を加ふることを得べし。然れども、恐らくは支那老婆に關する一例より著しきものはなかるべし。予曾て途に支那老婆の遲々として行くに逢ひしことあり。其の狀眞に憫むべし。之を問ふに、みづから死期の近きに迫れるを察し、遠路棺を荷ふの費用多きを厭ひて、埋葬地近傍なる親戚の家に移るなりき。

第三章　力行 (Industry)

『インダストリー』(力行)なる語は、間斷なく或る職業に勉むるの義——確然事務に注意するの義なり。十九世紀の今日に於ては、(力行勉强)は德行の上流に位し、尊崇すべきものたるなり。

人民の力行(以下又勉强とも略す)は、大要長廣厚の三者より成れりと稱するを得べし。辭を換へて言へば、外張(エクステンション)の二性と、內張(インテンション)の一性とを有すと稱するを得べし。長さとは、勉强する時間の長さをいひ、廣さとは、勉强する人の數をいひ、內張とは、職業に費す氣力をいふ。其の得る所の總結果は則ち三者の成蹟ならん。蓋し突然其の國に來れる

支那人の勉強は外人の感ずる所なり

外人と、舊來其の地に住する人とは、其の耳目に觸るゝ所に就て感する所おのづから同じからず。然ども支那人を勉強家なりと感するの一事に至りては、二者恰かも符節を合するが如くなるべし、夫れ新に支那に來るものは、先つ人民の事務に汲々たるを見て、彼のウヨンウエスリー(John Wesley)一七〇三年(我か元祿十六年英未)生れ、同九一年(我か寛政三年辛亥)死す。英國の宗教家、メソヂスト教祖なり。が教會の爲めに成功の秘訣と定めたる金言、即ち一に茲に於てし、常に茲に於てせよ[All at it, and always at it] 孔子流に言へば、道次にも必らず茲に於てし、顚沛にも必らず茲に於てす。といへる金言を想起せざるを得ざらん。支那に於ては、空手坐食するものあるも、世に目立たず。恰かも萬人悉く職業に從事しつゝあるの觀あり。勿論富豪も亦多くありて(たとひ全國の人口に比すれば固より瑣少なるも、)中には、徒に奢侈の生涯を送れるものもあれども、社會の表面に現はれざるを以て、外人の目に映せざるなり。支那人概ね富むといへども、事務を樂つることなく、其の孜々屹々として勉勵する狀は、貧困の昔に異ならず。

支那にては、人民を士農工商の四階級に區別す。今各自に就て觀察を下し、其の勉强を叙せん。

士農工商

教育制度

官吏登庸の狀況

(第一)士　支那の教育制度は、歐米人の同感を懷くを難んする所なり。而して其の欠点の大なるものに至りては、昭々として火を睹るが如しと雖ども、就中最も顯著にして、常に吾人の注意を喚起するは、勞多くして得る所少なきに在り。ソモ支那政府は、富者の爲めに後門を開き、金を出すものに官職を賣るの迹あるを以て、學生の鋭氣を折くに似たりといへども、其の實は決して然らず。ソモ同國にては地方到る處、不平の聲常に嗷々として斷ゆることなし。是れ塡補すべき官職の少なくして、拔擢すべき候補者の遙かに多きに在り。夫れ斯の如く受驗者の數非常に多きを以て、最下等の試驗室より、最高等の試驗室に至るまで、常に群集せざるはなく、一人の縣令(ナレフェク)補欠員を要するに、志願者凡そ一萬人以上に達したるの例少なからず。今若し支那書生が獵官の難きを知りつゝ之を獵らんと欲して心を勞するを考ふるときは、明かに支那人が智力的力行の概念を形づくることを得べし。彼の口碑に傳はり、三字經(宋の王應麟著)の中に載せたる標本的英雄が螢火に由りて學び、又は牛角に書を結びて、耕しつゝ之を讀みたるの實例(晉の車胤、螢を囊にして書を讀み、隋の李密、書を牛角に掛けて讀めり。)は、今尙之に倣ふものの數千人の多きあり。但し初回の成功に忽ち此の勉强力を失ふものも少なしと爲

九十歳の受驗者

さず。然れども支那人は、斯る人々を決して學生と思考せず。百折撓まず、遂に能く最後の目的を遂げたるものにして、始めて學生なる美稱を冠せらるゝことを得るなり。蓋し父子、孫、相携へて同一の試驗を受け、同一の官を競ふの例は、支那を捨てゝ、他にあるべからず。支那に於ては、老功と、不屈不撓の忍耐力とに依り、八十歳に至りて、始めて宿望を達するものあるなり。

一千八百八十九年（我が明治二十二年）の春、北京ガゼット記者は、老候補者の試驗に關する諸種の珍話を吾人に報導したり。今其の報導に據るに、福州總督は、秋期試驗の成蹟を報して曰く、八十歳以上の候補者九名、九十歳以上の候補者二名あり。規定の試驗を受け、論文を草したるに、文章流麗にして、筆勢亦勁健。毫も衰兆を呈せず。總督又附記して曰く、老候補者は、初度の受驗以來既に六十年の星霜を經過し、輓近高等試驗を受くること三回。今や第四回の高等試驗を受くるなれば、たとひ不幸にして、及第すること能はざるも、猶名譽の官職を與ふべきなりと。河南總督も亦同樣の筆法を以て報告して曰く、八十歳以上の候補者十三名、九十歳以上の候補者一名あり。皆全九日間の試驗を通過し、作文の如きも、論旨精確、議論周到。毫も老耄の徴候なしと。左れど安

農夫の力行

勞働社會の狀況

徽省の報告に至りては、更に一層驚くべし。其の報告に云く、候補者の中、三十五人は八十歳以上にして、十八人は九十歳以上なりと。噫、世界廣しといへども、萬國多しといへども、焉んぞ他にかゝる奇事あらんや。

（第二）農　支那にて學生の生涯は、右の如く、間斷なき勉強の生涯なれども、農夫の生涯も亦其の勉強、決して之に讓らざるなり。農夫の事業は、恰かも戸主の事業と同じくして、盡期あることなく、北部到る處、仲冬を除くの外、本業の他に何事をも爲すべき餘暇あることなし。尤も農夫の粒々辛苦は、地球何處の際涯も然らざるはなからん。然れども支那農夫の勉強に至りては、他に比類なきなり。

（第三）工　農既に辛苦なりとするときは、他の勞働社會は、更に數層辛苦といはざるべからず。蓋し農の如きは、辛苦は則ち辛苦なるも、生計に餘裕あれど、他の勞働者に至りては、一年三百六十五日、身を粉に碎きて勞働するも、出入相償はずして、常に飢寒に迫られ、債主に窘められ焦心るも、闕躁くも、到底浮む瀨あるべからず。彼の農夫

季節に依りて職業を異にす

が、甘藍の一葉、一葉だも極微虫の害を被むらざらしめんと欲して、驅除に心力を疲らすが如く、勞働者も亦已れと已れの家族とを餓死より免かれしめんと欲して、鵜の目、鷹の目、瑣々たる事業をも引き受けんと勉むるあり。『支那に於ては、旅客若し車道を通行するときは、習慣に從て、夜半に旅舍を出でざるを得ず。然るに何時に旅するとも、若干名の賤夫が鉄把を携へ、籃を荷ひて各處を徘徊するに逢はざるはなし。是れは、聊かにても肥料に供すべきものあらんかと尋ね求むるにて、苟くも他に緊急の事業なき際には、みな此の無盡藏の資本探拾に從事するなり。

季節に依り、交互に兩箇の職業に從事し、以て活路を求むるものあり。例へば、天津の舟子は、河水氷結の候に至れば、職業を轉して雪舟夫と爲るの類是れなり。之と同一事にて、或る地方の村人、農業少しく暇あれば、或は帽を作り、又は織物に從事す。此織物は、目今主要の輸出品たり。支那の婦人は、概ね常に靴底を手にして之を縫ひ、入口に在りて雑話を爲す間といへども、之を休まず。彼れ等は、如何なる場合たりとも、徒に光陰を費さゞるなり。

商家の手代

商家の夙興晩寐

官吏の繁忙

(第四)商　商人及び傭人が汲々として事務に黽勉する狀も亦前者に異ならず。ソモ商家手代の職たるや、歐米にても、決して之を閑職と稱することを得ず。然れども支那の手代に比すれば、閑の字を下すも不可なきに似たり。何となれば、支那手代の事業は際限なければなり。彼れの休暇は極めて少なく、其の業務は繁忙といふも愚かなり、只時々『息を吐く間』あるのみ、

支那の商家は、毎朝夙に店を開きて、遲く之を閉ぢ、帳簿は、一種の複記式を用ゐて、詳細に記入するが故に、毎夜の帳合、輙もすれば深更に及ぶことあり。既に帳合を終はれば、青銅貨の内より、品の稀に、價の貴きものを撰り出すを業とす。

茲に驚くべきは、支那人種の最も羨望し、同國功名家が熱望の目的たる官吏社會の最も繁忙なる事にぞある。支那上下の官吏は、其の負擔する所の事務甚だ多く、種類も亦様々にして、啻に理論上に於て責任を有するのみならず、實際上に於ても亦責任を有するなり。我か合衆國の勞働組合(レーボーア、ユニオンス)は、自今勞働の時間を八時以内に制限せしめんと勉むれども、若し左の一話を聽くならば、如何なる感覺を起すべきや。

支那有名なる一政治家が在北京某外國公使館の譯官に語りし所なりといふを聞くに曰く、予は曾て或る內閣大臣に面會せしことあり。時に內閣大臣は、繁忙其の度に過ぎて、心身を疲勞するを呟き、且つ言へらく。本官、每朝二時に家を出でゝ三時より六時まで宮廷に勤め、六時より九時までは內閣に在り。時辰九時を報すれば、陸軍大臣として同省に出でゝ十一時に及び、十二時より二時までは、刑事局員の一人として其の席に列り、二時より五六時までは、外務大臣の一人として事務を執れり。是れ本官の日課なり。左れぞ之に加へて又特別事務を負擔し、若くは委員の任を囑せらるゝが故に、七八時以前に家に歸るは甚稀なりと。

此の大臣は、此の談話を爲せし後、六箇月、過勞疲憊の爲めに死したりといふ。左もあるべき事なり。蓋し支那官吏の中には、同樣の過勞より、空しく有用の才を懷きて、夭壽を夭折せらるゝもの少なからざるべし。

上來叙述したる所は、主として勉强の分量に在り。今や勉强の時間に就て聊か述ぶる所あらんとす。

雞鳴に起きて業に就く

支那の晝は、未明より始まる。往々夜半より始まることあり。支那帝は、歐洲各國の宮廷が猶モルフエアス(Morpheus,夢の神。希臘神代紀に在り。時々人の前に夢を送る神なりに包まれつゝある時刻白川夜舟といふの意)より、既に朝見を給ふ。歐米人の眼より見れば、實に不思議に堪えざれども、習慣の然らしむる所、支那人は毫も之を怪まずして當然の事と思考す。而して全國の臣民多少精細に天子の行爲に則るを以て、廣東の銅匠、福州の錫箔匠、寧波の木版師、上海の賣春(コメツキ)、北部の清綿者、蹈磨者等に至るまで、凡て鷄鳴より夜半までも、孜々として職業に從事し、其の聲四隣に聞ゆ。賣菜夫(うり)の如きは、鷄鳴に數哩の道を旅し、東天未だ白まざるに、早既に歸着(うりば)点に在りて、日光の照らすを待つ。左れば歐米人の朝餐前に、支那の市場は、殆んど將に終らんとするなり。今若し夏日の朝五時に、上海の重もなる市街を散步するならば、必らず數種の著しき反對を見るべし。彼の海岸に莊麗なる家屋を搆へて、商を營む所の豪奢なる歐米人は、常に空囊を以て知らるれぞも、支那商は之に反して、外觀の質素なるに拘はらず、常に即金拂を爲すこと數年の久しきに及べり。

サー、ヂヨン、デヴサス(Sir John Davis)は、支那人の業を樂びを評して、政府が能く人民

支那人とアングロサクソン人との差

支那人の將來

をして各、其の有樣に滿足せしめ得たるの証と爲す。實に然り。其の勞働の性質は則ち其の最も著しき氣質の一たり。而して之を理會せんと欲せば、永く之を視察し、能く之を酌量せざるべからず。

支那人が勉强の內張(氣力)に就て猶一言せん。彼れ等は、固より亞細亞人種にして、吾人と人種を異にし、亞細亞人種として勞働をるものなれば、强て吾人の模型內に移さんとするは、固より徒爾といはざるべからず。吾人より之を見れば、吾人の最も尊重する所の誠實を欠けるが如し。抑もアングロ、サクソン人は、之に向て、何事にまれ誠實に之を爲すべきの必要を說くを要せず。然れども支那人は、宗敎哲學共に力を毀せて誠實おらしめんと勉むるも能はず。

黃白兩人種が激しく競爭するの時期は、早晩來らざるを得ざらん。其の曉に臨まば、孰れが勝を制し、孰れが軍門に降るべきや。

若しソロモン(Solomon イスラエルの王なり。舊約全書に詳なり。)の我が節儉に關する金言、即ち勉强の手は富を作るといへる金言を以て正當と爲すときは、支那人は、確かに世界人民中最も昌ふるものゝ一と爲るべし。支那人若し今日の如く、口に德義を唱へつゝ、身に之を

支那人の禮儀はアングロサクソン人の感嘆措かざる所なり

履まざるの弊を矯めたらんには、必らず昌へざるを得ざるべし。

第四章　禮儀 (Politeness)

支那人、及ひ一般東洋人の禮には、彼此全く異なりたる兩箇の觀相あり。一感服(アップレシエーション)の觀相、及ひ批評(クリチシスム)の觀相是れ也。吾人の喜で注意するが如く、アングロ、サクソン人には確かに多くの德あり。而して其の多きが中に、事に臨で屹然動かざるの德は、大半を占むれども、然れども平素、擧止進退溫和に、事に臨で勇敢なるの德は、甚だ少なし。故に吾人偶〻東洋に到りて、大國支那無數の人民が、人と人との交際上に必らず起るべき稜角を磨滑するの術に於て、遙かに吾人に長するを見るときは、吾人の之に感するや、宛ながら某事を爲すこと能はざる人が、之を巧にする人を見て感するに似たり。支那人に對して最も苛刻の評を下す人といへども、一たび其の禮儀の度の斯く西洋人の夢にだも視る能はざる迄に進みたるを見る時は、感服せざるを得ざるなり。

支那の禮儀は一種の藝術なり

支那の古經に據れば、禮儀三百威儀三千とあり。斯る重荷は、人類の永く堪ゆべきにあらざれど、支那人は教育の力に由り、此の儀式を以て、得(アックアイアメント)識よりも寧ろ天(インスチ)性たらしめんと企てたりき。此の人民は、其の天稟より、歐米人が一束して只だ宮廷又は外交の用にのみ備ふる儀式を以て、互相の間に於ける日常交際用の一部に供せり。豈驚くべきにあらずや。勿論支那人といへども、毎日必らず三百の禮儀、三千の威儀を守るにはあらず。然れども是れ等は恰かも公服(ヒレイ)の如し。用ゆべき機會の來る毎に必らず用ゐざるはなし。而して其の機會は、支那人能く之を認めて決して誤まらず。支那人にして、若し機會に臨みて何事を爲すべきやを知らざるときは、社會の爲めに擯斥せらるゝこと、宛ながら歐洲の教育ある社會に於て、九は何の九倍なるやを知らざるが如し。

西洋人が支那の禮儀を推測(アプレシエーション)するとの難き所以は、禮儀は、深切に言ひ顯はせる眞正の深切なり」といふことを肯定する所の定義の中に含まるべき觀念を心に有するに由りてあり。蓋し一人の幸福は則ち理論上に於て萬人の幸福なりと思考せる文明人の意見に於ては、然かく思ふを當然とす。然るに支那に於ては、禮儀は決して

斯る種類のものにあらず。支那に於ける禮儀は、一種の藝術にして、誠心より出るにあらざるなり。支那人の欵待(ヒセツ)、即ち西洋人より見れば、たとひ人を狂せしむるといはざるも、確かに人を迷はしむべき欵待(ヒセツ)は、社會の秩序を保つに必要と思考せらるゝ階級等差の制を常に人目の前に置くの功ありと稱す。又互相の交際を圓滑ならしむる所の油とも稱すべきものなり。抑も前(アンテシデント)あれば、必らず後(コンシクエンツ)あり、後あれば必らず前あり二者各其の所を得るときは、百事宜しきに稱ふ。例へば象棋を差す時の如し。甲は曰く、「予は寡王の歩を一小間動かす。」(I move my insignificant King's pawn two squares.)乙は答へて曰く、「予は同しく、賤王の歩を一小間動かす。」(I move my humble Kings pwn in the same manner.)甲又曰く、「予は寡王の勳爵士を僧正の賤しき第三位に進めて、貴王の歩を攻擊す。(I attack your honourable King's own with my contemptible King's knight to his King's bishop's mean third.)」と。首尾常に斯の如し。夫れ遊棋の勝敗は、固より形容詞を用ゆると否とに關せず。然れども差手若し次回の運動を報するの法を理會せずして、強て之を報せんと企つるときは、輕蔑を免かれざらん。之と同一事にて、支那人若し人より禮遇を蒙むりて、我れより又適當な

禮儀は都鄙に由りて其の度を異にす

外人は禮儀に嫻はざるを以て蠻夷視せらる

る禮遇を酬ゆる能はざるときは、世の胡盧（ものわらひ）と爲るを免かれざるべし。何となれば、支那人の場合に於ては、形容詞は、取りも直さず遊棋（象棋に譬へて言へば）其の者にして、之を知らざるは則ち毫も遊棋を知らざるものなればなり。

支那人が禮儀を重んずるとは前陳の如し。左れど之と同時に又彼の禮儀を最も緊要とする中心の地（都會の地）を距るに從て、漸く變更そることを知らざるべからず。村落に至りては、たとひ禮儀を必要と推測するの点は、都會に異ならざるも、決して都人士の如く、事々物々悉く禮儀を以てせざるなり。

然れども、之と同時に又支那人は、概ね場合相應の禮儀を知らざるものなし。外人の如きは最も教育あるものといへども、此の点を以て支那人に比すれば、襁褓の中に在る小兒に異ならず。故に外人の支那に至るものは、禮儀の初歩を習ふに猶幾多の星霜を費し、而して其の間常に粗忽の擧動を爲し、禮儀に嫻はざるの証を顯はさんことを竊かに恐れつゝ光陰を經過するなり。支那人が公然外人を『蠻夷』(Barbarians)と稱し、蠻夷禮儀を知らずと稱して之を賤む所以のものは、顧ふに是れ等の事あるに由りてなり。

禮儀は客人の獸ふを憚からず

東西、風を異にするの一例

禮儀は恰かも空氣枕の如し。中に一物を有せず。然れども其の動搖を自在にすることは實に驚くべし。蓋し支那人が外人に對する禮儀は、（國人相互に對する禮儀と同じく）客人を喜ばしめんとの希望より之を行ふにあらずして、寧ろ作法に明かなるを示さんが爲めに之を行ふものなり。即ち旅館の主人は西客の厭へる一杯の茶を煎んが爲めに彼れの要せざる火を起さんと主張し、斯くて烟を以て西客の目を煩はし、煎薬的の苦味を以て其の喉を煩はす。然れども、此の一事に由りて、接客の法を知れるを示し、而して客人の迷惑するが如きは措て問はざるなり。又之と同一事にて、村落の旅館の主人は客人を宿泊せしむべき如何はしき室内を洒掃裝飾そるを已れの義務と思考し、而かも客人の來るを待ちて始めて之に着手し、客人の之を止むるものあるも裏として充耳の如く、多年堆積せる塵埃を以て其の目を惱ますも、恬として顧慮せず。按するに、禮記の中に、必らず室内洒掃の事を記し、旅客の迷惑を、問はざるべきを論せるならん。（サカそんな事記してなし）飲食に於けるも亦然り。熱心なる主人は、旨くもなき物を皿、丼に積み累ねて旅客に薦むれども、吾人西洋人の如きは、其の一片をも食すると能はず、一滴だも吸ふこと

能はず。蓋し主人の意を察するに、客人或は口に適ふまじ、左れど予は確かに旅舍主人たるの職務を盡すなり。我れに於て聊かの落度なきなりと思ふものゝ如し。是れ東西、風俗を異にするの致す所にして、西客の決して咎むべきにあらざるなり。

更に東西風俗を異にするの一例を擧げん。或る時、支那の一新婦。一外國婦人接待の任に當りしことあり。故さらに客人の方に背を向けて、或る他の方位に敬意を表しければ、客人の驚きは一と方ならざりき。別かれて後、外國婦人は、百方その理由を熟考それども、詳かにすること能はず。既にして其の理由を或る有職家に質せしに、彼の新婦は、北方、即ち宮城所在の方位に敬禮を表することに汲々とし、偶〻客人は、室の南方に座を占めたるを以て、之を顧みるに暇なかりしなりといへり。然れば客人が座を占むべき位置を知らざりしの過にて、新婦の過にはあらざりしおり。呵々。

遺物を禮儀とす

支那人は、また進物を贈るを以て禮儀と爲す。此の進物を受くるものは、則ち『面目』を得るなり、さて此の進物の禮儀には、往々印刷的に定まれるあり。支那人と廣く交際するものは、常にかゝる儀式的の進物を受けざるを得ざることあり。その進物たるや、美しき赤紙に包みたる膩（おはぢきり）菓（くわし）の折詰にして、吾人西洋人は之を口に入るゝことすら能はず。樣々に謝絶するも聞き入れざれば、困じ果てゝ、ありやうは他の支那人にても悉く與ふるの外、致し方なしと斷はるも、猶飽く迄も交付せんと言ひ張り、遂に我れをして領收せざるを得ざらしむるなり。

外人、婚席に臨む

或る外人一日婚禮の席に招待せられしことあり。席に菓子麵包の澤山に器に盛りたるあり。宴酣なるに及びて、纔かに二三の菓子麵包を入れたる鉢を出し、此の麵包は、甚た熱ければ、一つ召し上がりては如何といひつゝ、當日名譽の客人として、先づ彼の外人に薦む。外人は何氣なく之を謝絶したりしが、思ひきや、一座俄かにしらけ、鉢は何人にも薦められずして其の儘引き込ませられたり。當時外人は、其の何故かを詳かにせず、不審晴れ遣らざりしが、其の後、同家に再ひ婚禮ありて招待せられし時、儀式係の長に問ひて始めて之を明かにするを得たり。ソモ支那に於ては、婚醮に招かれたる客人各〻一定の金を醵して、當日の費用の幾分を負擔するを慣例とす。彼の家族の住する地方にては、來客猶宴席に在る間に、醵金を集むるの習慣あり。左れど支那人の天性として、出金を求むるを以て敬禮を失ふの嫌ありと爲すが故に、名を菓子麵包を薦むるに仮りて、默々の間に之を求むれば、來客も亦その意を諒して

西洋にては時間は金錢なり

支那人とアングロ

若干の金を投ずるなり。然るに彼の外人獨り此の儀式に不案内なるより、心にもなく此の要求を謝絶せしかば、遂に他の人々をして之を出すに由なからしめたり。

第五章　時間に頓着なきこと (The Disregard of Time)

「時間は金錢なり」(Time is money) とは、現時文明世界の金言(マクシム)なり。抑も晩近人生の事、日々に複雜の度を加へ、時間を省略するの要、月に迫れるを以て、事務家が數時の間に執り了する事務の數と量とは、之を百年以前に比するに、數日、又は數月の間に執り了したるものに異ならず。蒸氣、電氣の二者は、實に此の變化を遂げしめたり。而して此の變化は、アングロ、サクソン種族の天性より生したる結果といはざるべからず。我か祖先が飲食戰鬪の外、殆んど一事の爲すべきなかりし往時の習慣は如何なりしにもせよ、我か鋭進の氣力に富みたるアングロ、サクソン種族が曾て一事を遂ぐるも他事を爲さんと進まざりし時期ありたりとは、想像し能はざるなり。

支那人とアングロ、サクソン人とは、挨拶の仕方に著しき相違あり。支那人偶然知人

サクソン人と挨拶ぶりの相違　支那の刻限

時刻の曖昧

に逢へば、「食事を終はりしや否や」と問ひ、アングロ、サクソン人偶然知人に逢へば、「昨今何事を爲すや」(How do you do) と問ふ。即ち事業は、アングロ、サクソン人の常態にして、食事は、支那人の常態なり。ソモ時間は金錢なりといへる感情は、吾人西洋人の間に、既に第二天性に進み、更に進んで第一天性に迫らんとしつゝあるに、支那人は、多くの東洋人と同じく、全く此の感情を有せず。支那に於ては、一晝夜を以て、僅に十二時に區分し、我か日本の舊時の如きなり。現時の日本は、西洋と同じく、一晝夜を二十四時間に區分せるこゝは、今更ら言ふまでもなきことなり。而して時の名一時、二時、三時といふの類は、我か歐米諸國日本も然り の如く、甲時より乙時に移るの点例へば、一時五十九分五十九秒と、二時零一秒との間の点を二時と稱ふるの類なり。只此の一点のみを指すなり のみを表するにあらずして、一晝夜を十二分したる其の一部の全體を表す。例へば正午より正未の刻に至るまでを午の刻といふの類 此の例を以て推すが故に、西洋に於て、最も一定不變の語たる『正午』(Noon) 即ち午前十一時五十九分五十九秒と零時零分一秒との間なる語も、支那に於ては、午前十一時より午後一時に至るまでの間を概稱するなり。

『日出』及ひ『日沒』なる語は、支那に於ても亦精確なれど、『夜半』なる語は『正午』なる語と同じく、決して精細にあらず。又時計に由りて時間を區分するの法は、我か歐米

前世界の人類、及ひ後世界の人類

の如く一定不變にあらずして、晝夜の長短に由りて變更す。都會の地といへども、時間甚だ曖昧にして、偶之を問ふものあるも、甲乙丙丁各其の答ふる所を異にし、孰れに憑據すべきやを判するに苦しむ。概して言へば、支那人民は、吾人が兎に角『時計』(Watch)の名を下すべき時計なるものを知らず。偶時計を所持する者あるも、其の國の習慣に從て時を合はするを以て、また精密なる時間を報することなし。否らざるもその時計は、いつが世にも磨かざるを以て狂ひを生するか、或は數年に一回磨くことあるも、更らに時を正だすことなく、進むまゝに抛擲するを以て、その報する時間は、決してあてにはならざるなり。普通人民は、概ね太陽の高低に由りて、時間を量り、曇天には猫眼の如何に由りて之を量る。而して聊かも不便を感せざるが如し。

シドニー、スミス(Sydney Smith)一七七一年(我か明和八年辛卯)生れ、一八四五年(我か弘化二年乙巳)死す。英國の神學者にして論文家。頓智家なり。の說に從へば、此の世界は、二種の人類に區別するを得べし。前世界(大洪水以前)の人類、及ひ後世界(大洪水以後)の人類是れなり。後世界の人類は、人類の時代の千福年に達せざる前、數百年にして終るべきを發見せり。故に壓搾を感し、環象に適合すれども、前世界の人類は、之に反して、メッサレー(Methusuleh)の日の經過したるを知らず、依

支那人は前世界の人類なり

然人生は猶族長的組織にてありしかの如く動作すと。

(註)千福年(Millennium)の說は、ジャスチン、マーター(Justin-Martyr)等が紀元後一二世紀に唱へ出したる說なり。其の說に據れば、此の世界は、開闢の後、七千年を經て滅亡すべく、最後の千年間は、惡魔全く降服して神の世と爲り、基督及ひ尊者等再ひ出でゝ世を治むといふ。千福年とは、この最後の千年を指すなり。

支那人は、前世界人類の中に算ふべきものなり。支那の茶店に傭はれて顧客を引くべき任に當れる、辨才者は、吾人をして圖らずもテニソン(Tennyson)一八〇九年(我か文化七年庚午)生れ、同九二年(我か明治二十五年壬辰)死す。英國有名の詩人なり。の『澗水』(Brook)の詩を想起せしむ。千客來往すれども、彼れは依然たり。支那の演劇も亦かくの如し。支那の演劇は實に數日の間興行するなり。(邏羅の演劇は二箇月連續したることあり。此れに比ぶれば支那演劇の日限は固より短かけれども、)

(註)日本の演劇は、維新前、一と興行の日限を四十二日とし、今日は三十日とす。左れど大入の節は往々非常に日延を爲すことあり。安政四年丁巳の春鼠小紋東君新形に、名人市川小團次米丹が鼠小僧を演したる折なぞは、百五十日間興行したりと聞

魔術師の長問答

宴會長くして際限なし

學校の時間は終日に亦る

く。生が知りてより後も、七八十日間興行したるは珍らしからぬ事なりき。

支那魔術師の巧なるものは、頗る巧にして面白し。然れども不幸にして一大欠点あり。仲間同士の無駄問題の甚だ長きと是れなり。日本てづまの親方と『ナヤー』との問答の如きものをいふならん左れば演藝猶半ばなるに、外客は、既に厭倦に堪えず。』支那宴會の長くして際限なきは外人の更に數層厭倦する所なり。會するもの殆んど無數にして、その種類人物また千差萬別なれば、たとひ支那人は、愉快を感し、時の遷るの知らざるも、外人の迷惑は、言はん方なし。

支那人は、夙に幼時より、前世界的模型に由りて百事を行ふの習慣を養成せらるゝなり。初め學校に入るや、概ね暗きに日課を始めて暗きに之を終へ、終日乾々として、一回、若くは二回の食事時間の外、毫も休息せず。學位試驗の如きは、嚴を究め、密を極めて、數晝夜の多きに渉り、受驗者の不便少なからずといへども、當局者猶舊習に戀々として之を改むること能はず。』

かゝる教育の下に人と爲りたる人々の心裏に其の教育の臭氣を存するは、固より理の當然にして更に怪むべきにあらず。左れば其心裏より出でし産物の一つたる

支那人が時間を等閑視する他の一証

大工の實例

支那語は依然たる前世界の趣きを存し、之を一變するは、到底出來得べきの事に非ず。支那歴史も亦た依然として前世界然たり。故に比較的に時間多き種族（支那人）は姑らく置き、其の他の種族は、決して此の類の歴史を編纂するものなく、之を讀むものなきのみならず、支那人にあらざれば、之を『腹中』に記憶するものすらなかるべし。（夫れ然り、豈夫れ然らんや。）

支那人が時間を等閑視することは、既に記載したる如く、其の勉强の情態、內張の性質のアングロ、サクソン人と甚だ異なれるを以て証するを得べし。（第三章參看）

外人の支那に家屋を建築するもの、一たび同國の大工、職人を傭ふときは、決して再び傭はんと思ふものなかるべし。彼れ大工、職人等は、遲く來りて早く去り、三重に揚げず喫茶の爲めに休み、石灰を要する毎に、小さき布袋（ぬのぶくろ）を携へて、屢〻遠隔の灰坑に往復し、たとひ土車を用ゆれば、一人にして能く三人の用を辨し得るを知るも一切之を用ゐず。彼れ等は、又聊か雨ふれば忽ち事業を中止す。左れば、徒に日子を費すも、事業は盤桓として進まず。而して若干名一日の勞力能く幾何を遂げ得べきかを詳か

鴉烟の爲めに約束を破る

支那人は

にすること能はざるなり。吾人が知る所の一外人曾て大工が條板を打つことの緩慢なるに不快を感し、彼れが昼食の間にみづから之を打ちしに、彼れ等四人が半日を費すべき事業を、一人にして數十分の間に遂げ得たりといふ。

吾人、廣東に在りて支那の工事受負人と約束を結ぶに、その約束は、彼れの金錢と同じく悉く、鴉烟の妨ぐる所と爲りて、正だしく履踐せらるゝことなし。鴉烟の爲めに金を散じて窮迫するより、遂に最初の約束よりも疎米なる材料を用ゆるやうになるといふ。左れば流石寛仁を旨とせる外人も、堪忍の袋茲に裂けて、攻擊策に着手し、受負人の失錯を列擧して曰く、「曩さに予は、足下に玻璃戸に嵌むべきの大さを話したるにあらずや、足下は三たび窓の寸法を取りたるにあらずや。然るに玻璃といひ、窓といひ、悉く齟齬せるは何事ぞや。予は、足下に戸を堅牢にせよと命じたるにあらずや。然るに此の戸の膠に乏しくして容易く離るゝとは何事ぞや。將た此の地板の短かく、且つ少なくして、節穴だらけなるは何事ぞや。問ふ、足下は何故にかく約束を守らざるや」と。左れど支那人は、飽く迄も温厚の態度を裝ひて哀求して曰く、「主公よ。『いんがう』を言ひ給ひそ。請ふ少しく御察しあれ」と。

支那人は、アングロ、サクソン人固有の性急なるを見て疑訝に堪えざるのみならず、

英人の性急を怪む

支那人は敏捷果斷の緊要なる悟ること能はず

外人、宴會の長きに苦む

實に之を不道理とするなり。今その狀況を譬へて言はゞ、支那人がアングロ、サクソン人の此の性質を見るは、恰かもアングロ、サクソン人が支那人の誠意に乏しきを見ると一般なり。

支那人をして敏捷果斷の緊要を悟らしむるは、一大難事といはざるべからず。吾人は、曾て甲府より十二哩を距りたる乙府に宛てたる一束の外國郵便物が、數日の間、中間に停滯したるを知れり。當時その理由を糺せしに、送達夫は答へて曰く、「驢馬病めり。之を休息せしめざるべからず」と。噫、人事繁多の今日、猶かゝる事あり。豈一驚を喫せざるべけんや。電信の如きも、往々道化芝居に類するとなきにあらざるなり。

支那人が光陰を徒に費して敢て意とせざるは上來述ふるが如し。而して外人の之が爲めに最も迷惑を極むるは、宴席へ招待せられたる時に在り。ソモ西洋に於ては、かゝる場合に於ても、時間に限りあり、其の度を超えざれども、支那に於ては決して然らず。苟くも主人の酒食を供せざる間は、如何に更長くるも辞し去ると能はず。厭倦に堪えざるも、猶座に在りて談話に時を遷しつゝあらざるを得ず。外人を招待

支那人の長坐

到る處言語を異にす

するに當りても、亦此の主義を行ひ、彼れ等に貴重なる光陰を費さしむるを悟らざるが如し。有名なる牧師曾て言へることあり。曰く、「予に面せんと望む人は則ち予も亦面せんと望む人なり」と。然れども天若し彼れに數年を仮して、若干の歳月を支那に過ごさしめしならば、彼れは必らず此の定言を變更したりしならん。彼れ若し前記の迷惑を經驗するならば、爾來他の多忙なる僧侶の例に倣ひて、書齋の前に「神は汝の去るを讃美し給ふ」(The Lord bless Thy goings out)なる聖書の題目を歴然掲けしならん。故人マッケンジー博士(Dr. Mackengie)は、支那客の間斷なきが爲めに、「來る一方にして、決して歸り去らざる」朋友の多きが爲めに、時間を空費するに困み、常に彼れ等に謂て曰く、「坐せよ、歸り支度を爲せよ。予は緊要の事務あり。請ふ恕せよ」と。

第六章　不精確に頓着なきこと (The Disregard of Accuracy)

凡そ外人の支那に入りて先つ感覚を起すは、萬人一樣なるに在り。支那人は、すべて相貌を同じふし、着服の色を同じふし、その相似たることは、同莢の豆の如く、甲乙を

到る處風俗を異にす

度量權衡を異にす

計算の粗漏

牛の體位に骨を失念す

區別するに難からしむ。然れども之と同時に又外人の耳に著しく、如何に不注意なる人も注意せざるを得ざらしむるものは、言語の甚だ異なるに在り。左れば支那人自身といへども、また吾人に向て「我が文字は、全國一樣なるも、我が言語は、到る處異なり」と自白せり。

支那の諺に云く、十里の中といへども風俗を同じふせずと。げに支那人の風俗の數里を距つる毎に異なるは、また吾人の知らざらんと欲するも能はざる所なり。

度量權衡の如きも亦所に由りて同じからず。ソモ我が西洋に於ては、度量權衡の一定は、人生の幸福に欠くべからざるものとして、殊に意を之の点に注げるに、支那に於ては、その一定せざること彼れが如し。豈一奇事にあらずや。曾に一定せざるのみならず、支那人は、此の一定せざるを以て、當然の事と爲して毫も怪まざるなり。

支那人は、かくの如く、各自の間に、一定の度量權衡なきを意とせざるの人民なれば、百事に就けて、おのづから精密の思想に乏し。例へば肉麺(ミートヌードルズ)を賣る人あり。或る人之に向て、毎日幾何を製するやと問ふに、答へて曰く。凡そ百斤(支那の斤量)の粉を用ゆと。而して幾箇を製すといはず。即ち粉の量と、麺の數との關係は、問ふ者の推量に

距離の中に往復の里數を計算す

通貨の計算法一定せず

住かすなり。又舞夫あり。或る人、一牛を指して、重量幾何と問へば、若干と答ふ。その答ふる所、輕きに過ぐるの疑ひあり。更らに之を問へば、笑ひながらに答へて曰く。然り。思はずも、骨の目方を計算することを失念したりと。僕あり。汝の身長如何と問ひしに、答ふる所また低きに過ぐるの疑ひあり。餘りに低くゝはなきやと詰れば、姑らく熟考の後、膝を擊つて曰く。イヤ、肩より上を取り遺したりと。何故に肩より上を取り遺したりやと問ひしに、此の人は、曾て兵卒たりしことあり。然るに同國の兵卒は、負擔の爲めに鉄盆骨に至るまでの高さを要し、徵兵の際、その身長を檢するに、全身の長さを檢せずして、鉄盆骨に至る迄の長さを檢するが故に、爾來習慣と爲りて、肝腎の首を計算の外に置きたるなり。又一田舍漢あり。都會より幾何里の地に住するやと問ひしに、九十里支那里程なりを隔つる地に住すに答ふ。餘り遠きに過ぐるが如し、今少しく近くはなきやと、嚴密に詰りしに、小首を傾けつゝ然りと答ふ。猶委しく吟味せしに、彼れは、往復の里程を合算したるにて、其の實は只四十五里なりしとぞ。

支那に於ては、斯の如く、何物の計算も不定にして精密を欠けども、就中其の最も著しきは、帝國唯一の通貨たる青銅貨計算法の一定せざる是れなり。ツモ支那貨幣の

制は、全國悉く十分數の制なれば、貨幣制度中の最も簡便なる者なり。然れども到る處、價値を異にするを以て、先つ之を問ひたる後にあらざれば、幾何を以て一百と爲すかを知ることを能はず。旅客若し此の不定を實驗せんと思はゞ、必らずしも十八省直隸。山東。山西。陝西。甘粛。江蘇。安徽。河南。湖北。湖南。江西。浙江。福建。廣東。廣西。四州。貴州。雲南。の大部を歷遊するを要せず。例へば成規の如く、一百を價する處あり、九十九、又は九十八を價する處あり。山西省の首府の如きは、八十三を價す。直隸省の東部に至れば、降て三十三を價し、處に依りては、更に一層低きあり。銀の價格に至りては、その不定更に青銅貨よりも甚しく、或る價に對する重量は、偶合を除くの外、二所決して同じからず。他鄉人は、爲めに非常の不便を感じ、銀商以外の人は、凡て若干の損失を蒙むり、正直なる人(支那にも猶正直なる人あり)は、實に迷惑を極む。

然らば何故に斯く永久に混亂を生せしめしや。其理由は明白なれど、今故さらに之を省き、本書に於ては、實際の狀況のみを叙せん。

度量秤衡の類の各地皆異なるとも亦かくの如し。甲地の一ブッシェル英米にては言へは、

乙地の一ブッシェルに同からず。而して當局者は、此不定を奇貨として、常に穀納の租税を収歛す。故に支那人の如き順良の民にあらざりしせば、斷えず竹槍蓆旗の禍を免かれざるべし。合衆國の俚諺に云く。「一パイントは、到る處一封(ポンド)なり」と。然るに支那に於ては、一パイント(英米にて言へば)一パイントにあらず、一封(同上)亦一封にあらず。實際に就て言ふに、鹽の如き類は、擅に十二パイント(支那にて言へば十二兩)を以て一封(一斤)と定るか故に、(支那にては、元來十六兩を以て一斤(一ヶッチー)と定めあるなり)買客は十六パイント(十六兩)の價を拂ひて十二パイント(十二兩)の實物を領収せざるを得ず。外人より之を觀れば甚だ怪むべきに似たれども、同國に於ては、固より公然の事にして、其の地方の商人一般に之を行ひ、決して詐欺にあらず。故に人民は、只「舊來の慣習(オールド、タイム、ガストム)」と思考し、敢て意に介する者なし。土地區劃の不定なるも亦之に同じ。甲地の一「エークル」(英米にては)は、乙地の半「エークル」に當るが故に、兩地の境に住するものは、二樣の測量器を有せざるを得ず。

支那漫遊家(西洋人)輩もすれば、某地の穀價若くは綿價一斤に付き若干と記せども、先づ其の地に所謂一斤なるものゝ如何を詳にせざれば、決して眞正の價を知ることを能はず。毎「エークル」の收穫額の如きも亦然り。只輕々に統計表を擧げて足れりと

すれども、其實は「エークル」の一定辞たらざるを知ざるの論なり。距離を言ひ顯はす語(例へば「里」)の不定なることは、支那旅客(支那人)の各〻能く知る所なり。左れば內地旅行の際、距離を問ひて「何里」と答へたらば、其の里は「大」なりや否やを確むるを必要とす。勿論地方々々に距離測定の或る標準あることは、吾人之を拒否せず。吾人の拒否せる所は此の測定の精確、一樣に在り。吾人の經驗に由りて知る限りに於ては、官道を出つるや否や、「里」は忽ち「長く」なるを常とす。例へば天氣清朗の日、官道に於ては、一日に百二十里を旅するを得れども、田舍道に出れば、百里以上を旅すること能はず。山道に至れば、八十里に止まるの類是れなり。

其の他、測算の法も亦往々絶對的距離に基かずして、行路の難易に基くことあり。例へば或る山道の距離を稱ふるに、登り道の「九十里」は、その實、四十五里にも足らざるの類の如し。畢竟山道の四十五里弱を旅するは、その艱難、平地の九十里を行くに均しといへる理由に基くなり。又一奇事あり。即ち甲より乙に至る迄の距離必らずしも乙より甲に至る迄の距離と同じからざるの一事是れなり。ユークリッド(Euclid)紀元前三百年の頃世に在り。希臘の幾何學者なり。の定(ポスチュレート)則に云く。「甲量、丙量と均しく、乙量亦丙量と均しけれ

バーベル著『西支那漫遊記』に此の事を載す

ば、甲乙二量互に相同じ」と。支那人をして此定則を聽かしめば、必らず一言の下に『否』なる斷定を下さん。又一例を擧けて之を証せんに、支那最も緊要なる一官道の一部は、北より南に至るまで長さ百八十三里。然るに南より北に至るの距離は百九十里あり。是れも、つとも確實なる實驗談なり。

（原註、此の一節を草し畢りし後、偶〻バーベル氏（Mr Barber）の『西支那漫遊記』（Travels in Western China）を見て益〻此の說の確實なるを証することを得たり。同書に云く。『支那人に向て、甲乙間の距離を問へば、彼れが甲より乙に至るの距離に答ふる所と、乙より甲に至るの距離に答ふる所と異なり。而して萬口一轍。符節を合するが如し。例へば甲より乙に至るの距離を問へば、異口同音に一里と答ふれども、乙より甲に至るの距離を問へば、亦異口同音に三里と答ふるの類是れなり。今其の理由を事理を辨へたる土人に糾すに曰く、車馬は、一里若干金の割合を以て賃錢を拂へども、人足の賃錢は、行路の難易に從て高低せざるべからざるは睹易きの道理なり。然れども難易の多少に由りて賃錢の階級を定むるは、煩累に堪え難し。寧ろ里程を伸縮して、艱路の一里を二里、又は三里と仮定するの便なるに如かず。是

全部は其の諸部の和に等しからず

れ甲より乙に至るの距離は一里なるも、乙より甲に至るの距離は三里なる所以ありと。予は此の答辨に由りて宿疑を解くことを得たり。左れども予は、此の規定に服せざれば、彼れに向て述べて曰く。『果して然らば、雨天には晴天よりも道路を伸し、白晝は夜間よりも道路を縮めざるべからず。』彼れ曰く。『實に然り。然れども、かゝる場合に於ては、少許の增錢を與へて、稍〻前規の欠を補へり』と。さて此の規定は、土人の爲めに、或は便利なるべし。然れども旅客の爲めには、常に煩累いふばかりなし。また此の伸縮の段階を聞くに大略左の如し。平地に於ては、成法の一里を二里と名け、甚峻嶮ならざる通常の山路に於ては、之を五里と名け、最も峻嶮なる山路に於ては、之を十五里と名く。……田舍道に於ては、甚峻嶮なる場處の外、概ね一里を以て五里と名くるなり。

又一奇事あり。支那に於ては『全部は其の諸部の和に等しき』にあらざること是れなり。航河に於ては殊に然り。試に前面の一点を指して幾何里ありやと問ふに『四十里』と答ふ。更に詳に之を解析するに、奚そ圖らん『此の四十里』は、二十里の距離を兩箇相

各自隨意に度目を定む

合したるにあらずして、『十八里』の距離を兩箇相合したるものならんとは。而かも彼れ等は論ずらく。四九四十と爲るにあらずや」と。吾人豈呆然たらざるを得んや。之と同一事にて、『十八の三倍』は『六十』と爲り、『十八の四倍』は『八十』と爲る。以下同之。聞く一日、勅使、某距離の地に行きて豫定の日限を誤る。依りて其の理由を詰問せられしに、辯解して曰く。「此の『六十里』は『大里』なり。故に豫定の日限に往復することを得ざりき」と。辯解頗る明瞭なりしかば、官吏に命じて、詳に其の距離を測らしめしに、彼の勅使が申立てたる如く大里にて、其の實『八十三里』ありき。左れど猶今日に至るまで、依然として六十里と唱ふるとぞ。

都會の周圍に散在せる村々は、近きは一里より、遠きは六里に至るまで種々あれども、凡て之を『三里村』と稱す。又若し凡そ一里と測算すべき距離にても、道路の両傍に家屋櫛比するときは、之を五里と名く。而かも村内の人々は、濟ましかへりて、眞に五里ありと吾人に保証するぞおかしき。

かゝる事情なれば、秤量の如きは各自隨意に之を定むるも敢て怪むべきにあらず。

年齢の不精密

例へば、提秤師は、未だ度目を表せざる提秤を携へて市街を賣り歩き、買客の望に從て之に度目を表すれば、買客は、少なくとも二樣の提秤を備へて、一は購買用に供し、又一は販賣用に供す。故に偶出來合ひの提秤を買はんと欲するも、古物の外之を得ること能はず。何となれば賣買の約定まりて然後度目を表すればなり。

年齢を精密に語らざるも亦支那人の特性なり。ソモ彼の國に於ては十二支（原文を直譯すれば動物（アニマル）なり。左れど今意味を執りて十二支と譯す。）なるものあり。故に其の人の何の歳（例へば子の歳丑の歳寅の歳の類）なるかを明かにするときは、其の幾歳なるかを知ることを得べし。然るに支那人は、故さらに此の精密を避くるが如く、或る老人の齢を稱して『七八十歳』といひ、只一年以前に七十歳たりしことを知るも、之を度外に置きて恰かも知らざるが如し。今其の理由を聞くに、支那に於ては、七十歳を超ゆれば、直ちに『八十歳』と爲るが故に、かく大數を擧ぐるなり。加之のみならず、支那人は、精密に年齢を告ぐる時といへども、猶ほ次回の元旦――元旦は、支那の國民的誕辰（ナショナル、バースデー）なり。――以後の年齢を告ぐることあり。支那に於ては、一位を以て物を算へずして、十位を以て算ふるの習慣深く根底に徹し、一、二、三、

金錢計算の不精密

四、又は十一、十二、十三、十四等と稱へずして、十、二十、三十、四十、若くは數十と稱ふ。是れその物數の緻密を欠く所以なり。又百以上の數を算ふるには、數百、數千、又は數萬と稱へ、詳細の數を稱ふること甚だ少なし。

著者の一知人（支那人）曾て或る人と觀劇せしことあり。著者に語りて曰く、「予は兩人にて二百串を費したり。」又語を次で曰く、「費す所百七十三串なり。即ち二百串と同ときにあらずや」と。

同年の老媼に贈る

我か合衆國の一紳士あり。夫人と共に數年の間、支那に滯留せしが、歸國に臨みて、支那の朋友等は、兩人（紳士夫婦）の老母（紳士の母、及び夫人の母）に二た卷の美しき卷物を贈れり。此の老母は孰れも未亡人にして、偶〻同年なりき。さて此の卷物の一つには「幸福は海の如く大なり（福祿如大海(?)）」と書し、又一つには「老年は松の常に茂るが如し（眉壽如松(?)）」と書せり。但し乙には、領收者が「幸福なる七十年」に達したる意味の語を側に挿入しあれども、甲には「光榮ある六十年」に達したる意味の語を挿入しありて、年齢に六十と七十との相違あり。紳士夫妻の一人は、餘りの不思議さに、敢て贈主に向て質疑を起し、兩母の同年なることは諸君の知らるゝ所なるに、一は之を七十歳と書され、又一は之を六十歳

と書されたるは何故ぞと問ひけるに、贈主は答へて曰く、「別儀にあらず、兩箇の卷物共に七十と書さば、筆者の創意力に乏しきを表せんことを恐れてなり」と。奇答亦極まらずや。

「今は其の村に住せず」

支那人が事物を精密にすること能はざる理由の一つは、同國社會の組織の特別なる是れなり。或る人（支那人）著者に訴訟の助言を請ひたることあり。みづから某村に『住す』と稱す。左れど彼れが某都會の郭外に住宅を有することは、其の談話の中に明かなれば、予は怪みて之を糺せしに、答へて曰く、「僕目今は其の村に住せず。然れども曾て住せしことあり。」予は猶不審晴れやらずして之を問ひ返へせしに、再ひ答へて曰く、「實は十九代の祖先の時同地を去れり」と。予復た問ふて曰く、「然らば何故に足下は某都の住民と思考せずして、其の村の住民と思考するや。」彼れ濟ましかへりて答へて曰く、「然り。僕今彼の都會に住す。然れども彼の村に舊き根據を有す」と。

「予は三百年前に此の神社を建つ」

或る人、著者に向て、已れが鄉里の舊き神社の事を話し、且つ誇りて曰く、「僕、その神社を建築せり」と。予は此の一言を聽きて不審に堪えず。建築の年月を糺せしに、明朝の時、即ち今を距ること三百餘年の昔に在りといふ。然らば『僕』なる語は、只可成法にて

支那の學風と西洋の學風との差

書籍に文字の誤多し

ありしなり。

支那の學生は、類似(レセムブランス)敗缺なれば、凡そ何萬、凡そ何十萬といふの類を能く言ひ顯はし得るも同樣(アイデンチー)數缺なれば、何萬何千何百何十何といふの類を言ひ顯はすこと甚だ難し。是れ彼れ等が欠点の一なり。又モ支那人が初學者に記憶せしむる所は、西洋人の記憶せしむる所と頗る其の趣を異にするを以て、學生の記憶する所、また西洋人と甚だ異なり。例ば支那の教育ある人々に向て、足下の村に幾何の家族ありやと問はるゝも、之に答ふること能はず、又之を覺え知らんとも爲さず。之を知らんと勉むるは、彼れ等の心に於ては、(第一)難きを勉むるものにして、(第二)馬鹿らしきことゝ言はざるべからず。彼れ等は、數百、數千等の概數を記憶するを得べし。然れども何百何十何といふが如き精密の數は、之を記憶するを得ず。

支那人の特質たる精密の欠乏は、また書類、或は加之のみならず印刷物の中に誤字の多きを見て知るべし。左れは同國に於て發賣せる廉價の書籍にして、誤字の充滿せざるものは、殆んど見ること能はず。中には往々重複の箇處あり。畢竟勞を省かんと欲して、校正を粗漏にするより然るか。否々然らず。寧ろ精密を緊要ならずと爲す

書翰には誤字遠かに多し

書翰の宛名の誤

一人にして數多の名あり

より然るなり。

通常の書翰に誤字の多きことは、更に數層の上に出でたり。此の場合に於ては、往々本字を用ゐず、音通の他字を以て之に代ふることあり。かゝる誤謬は、一つには、之を不注意の咎に歸すべく、又一つには、之を無學の罪に歸すべし。

精密を欠くの例は、書翰の表書(うわがき)よりも著しきはなかるべし。即ち支那人の表書は、概ね『當て字』を用ゐて左の如くに記せり。

"My Father Great Man".

"Commassionate Mother Great Man."

"Ancestral Uncle Great Man"

"Virtuous Younger Brother Great Man."

右は、支那人が書翰の表書の一班を擧げたるものなり。他は推して知るべし。要するに、其の宛てたる"Great Man"(大人)の姓名を書さゞるを通常とするなり。

支那人は、實際に長けたる人民なり。此の實際に長けたる人民が自己の姓名に粗漏(不精確)なりといはゞ讀者甚だ疑ふべしといへども、事實なるを如何せん。さて彼の

國の人民は、概ね同じ姓名を書するも數樣の文字を用ゐ、今は一つの文字を書るすかと思へば、又或る時は他の文字を書し、交互に之を用ゐて、自他共に毫も怪まざるが如し。左れど不便は啻に之に止まらず。一人にして數箇の名を有し、姓あり、名あり、字あり、文學上にのみ用ゆべき『號』なるものあり。號の如きは、姓名と全く別なり。豈一奇事といはざるべけんや。

（註）一人にして名、字、並に數箇の號を有するの風習は、西人の頗る奇とする所ならん。左れど西人にも亦一人にして本名他の名とを兼ね有するものなきにあらず。例へば、長ケート（Elder Cato）（羅馬の奇人なり。羽化生著『ピユニツク戰史』第二百二十一頁以下に載せたり。）の如きは、別にマーカス、ポルシアス、プリスカス（Marcus Portius Priscus）なる姓名あり、モリエル（Molière）（佛國有名の戲曲家なり。羽化生著『佛國文學史』第二百二十一頁に載す。）の如きは、別にジヤーンヌ、バプチスト、ポクリンヌ（Jean Baktiste Poquelin）なる姓名あるの類是れなり。只支那人の別名は自稱にして、西人の別名は他稱に、支那人の別名は數箇ありて、西人の別名は只一箇に止まるの差あるのみ。

外人が往々一個の支那人を両三人と誤想するは、畢竟かく數多の名あるに由りて

村落にも亦前樣以上の弊あり

なり。

村落の名稱の確實を欠くことも亦前者に譲らず。何となれば、また二箇、或は加之のみならず三箇の名稱を有し、而かも孰れが本名たり、孰れが假名たるの別なければなり。又若し乙名は判然甲名の轉訛なるときは、猶交互に之を用ゐて怪まず。往々公文書にのみ甲名を用ゐて、通常の談話には乙名を用ゆることあり又は乙名を形容詞として、甲名と共に用ゆることあるなり。

支那人は化學的修養に乏し

世人の知る如く、化學の化合式なるものは、精密に精密を加ふべきものなり。支那人が此の種の精密を旨とすべき修養に乏しきは、彼れ等の爲めに不幸といはざる可らず。仮りに支那人を化學者たらしむるならば、恐らくは或る物の『數十グレーン』と、他の物の『數十グレーン』とを混和し、其の適量を失ひて意外の結果を來たさならん。ソモ支那人は、堅忍不拔の天性を有する人民なれば、精細を極むるの能力は、各國の人民に劣らざるのみか、寧ろ彼れ等よりも優れるならん。然れども現在に於ては、精密といへる点に意を注がず、精密の何者たるを理會せざるなり。果して然らば、茲に

支那人は理會の才に乏し

(其一例)

支那人に就て注意すべき二点あり。(第一)支那史を讀むに當りて注意すべき点(第二)支那の統計に就て注意すべき点是れなり。詳に言へば、吾人は、支那史を讀むに當りて、其の記載せる數量の精密ならざるを想ひて、欺かれざらんとに勉めざるべからず。支那統計の精密ならざるを想ひて、悉く之を信せざらんとに勉めざるべからず。

第七章　誤解の才 (The Talent for Misunderstanding)

(註)茲に所謂誤解の才は、二樣の意味を含む。(第一)巧僞詐譎、(第二)理會の才に乏しきを是れなり。(第一)巧僞詐譎は、則ち胡魔化そことの上手なるなり。(第二)理會の才に乏しきは、則ち意味を取り違ふるなり。本章は、此の二樣の氣質を擧ぐ。讀者そのこゝろして讀むべし。

外人若し支那語に熟練し、思想の機關として之を使用するを得るに至れば、茲に始めて支那人が誤解の才に富めることを知るを得べし。當時外人は、既に支那語に熟練せりと思ひの外、猶之を理會せざる、を發見しければ、且つ驚き、且つ傷みて再び倍

舊の勉強に從事し、數年の後、みづから信ずらく、今や公衆、又たは公衆中の或る個人の前に諸種の題目を演說し得べしと。是に於て復た支那語の談話を試む。然るに其の談話を聽く人若し一面識なく、殊に嘗て外人に出遇ひしことなきときは、演者は、例の如く、毫も已れの言ふ所を理會せしむること能はず。聽者は到底理會し能はざるものと爲して、少しも其の言ふ所に意を注かず。尙ほ次で語る所を聽かんとも爲さざるが如く、演する所を中止して曰く、「止めよ。足下の言語は吾人之を理會することと能はず」と。演者の拙劣を冷笑するの狀は、宛かも啞者の言語を發せんと勉めて能はざるを笑ふに似たり。而して其の心中を察すれば、恰かも「誰れが汝の言ふ所を理會し得んや。ツモ支那語を持つて生れざるは、汝の不運にして過失にあらず。みづから已れの不能を顧みて沈默せよ。徒に吾人を煩はすこと勿れ。何となれば汝の談する所は、到底吾人をして理會せしむること能はざればなり」と言ふが如し。(外人の驚き且つ傷むことは、更らに其の處女演說の時に讓らず。茲に至りて、外人は、また平然たること能はず。彼の聽者を睨一睨して曰く、「足下は、予が此の瞬時に言ひつゝある所を理會せざるや。」聽者答へて曰く、「否。予は足下を理會せず」と!

最も誤解を豫防すべきは金錢なり

支那人が誤解の力に富めるの他例は、言語は充分に了解しつゝ、細目（例へは名詞の單複、動詞の時限等の類）を捨てゝ顧みざるより、其の意味の曖昧（たとひ全く不分明といはざるも）なるに在り。蓋し外人の支那語を習ふものは、"On this condition"（此の要件付きにて）"Conditionally"（要件付きにて）"With this Understanding"（若し是れ々々の約條にそるならば）等の意味ある句を多く記憶するを要せず。是れ支那に於ては、歐米と異なりて、此の類の句なく、支那人また此の句の要用を感せざればなり。動詞の時限も亦然り。外人が必らず之に注意せざるを得ざるに反し、支那人は、毫も之に意を注がざるなり。支那に於て最も誤解を防がざるべからざるは、金錢に關する事項なり。外人若し金錢（支那人の眼より見れば、外人の重もなる職務は、金錢を拂ふに在るが如し。）を支那人に拂はんと思はゞ、汝若し事業を爲せしならば、汝は金錢を受取るべし」"When you shall have done your work, you will receive your money）といふが如くに、完全未來の時限を用ゆるを必要不可欠とす。然るに支那に於ては、完全未來の時限おく、猶一切動詞の時限なるものあることなし。左れば支那人は、單に「事業を爲せ、金錢を受取れ」"Do work, get money）といふに過ぎず。而して一方に於ては、金錢を領收せんと欲するの念

舟子、取者の手『酒』れだり

切に、又一方に於ては、時限の關係、その心裏になきが故に、外人の爲めに事業に就くや、『食そる』が爲めにとて直ちに金錢を領收せんと希望す。其の狀恰かも此の外人に事業を托せられずんば、最早食すること能はざるが如し。豈驚くべきの至りにあらずや。反復す、金錢に就ての誤解を防がんと欲せば、恒久に注意を密にせざるべからず。誰れ々々は之を領收すべからず、「如何なる時」「如何なる瞬時」「銀塊、又は青銅貨、」「若干量（銀塊ならば）」「若干數」等の諸点は、最も精密に之を確定して以て誤解を防がざるべからず。若しその契約の對手は、大工（コムプレーター）買辨（支那にて、諸賣物を司る人）の舟子ならば、契約を精密の上にも精密にして、誤解を防がざるべからず。

所謂「人の面を害ふが爲めに其の鼻を劓る」ことは、支那一般に行はるゝ實例にして、注意せざらんと欲するも能はざる所なり。例へば舟、又は車を傭はんに、舟子、又は馭者は、往々半途に約束を破りて、斷然歸着点まで行くことを拒絶することあり。此の折に於ける馭者の剛情は、その騾馬の行爲に由りて之を説明かすことを得べし。道にして偶、砂場に出づるや、騾馬は『ぐつとく』も砂上に臥して動かず。馭者、力を限りに之を鞭てども、其の痛痒の感なきの狀（ありさま）は、蠅の『ぶつかりたる』と殆んど同一なり。予は

支那人が誤解を利用するは北風の戶隙より侵入するに似たり

實際に此の狀況を目擊する毎にデ、クヰンシー(De Quincey)(一七八五年(我が天明五年乙巳)生れ、一八五九年(我が安政六年己未)死す。英國の文學者なり。)の痛罵を想起するとなきにあらず。彼れは曰く、「支那人種の剛情なるは、騾馬に髣髴たり」と。左れど、コハ惡口その度に過ぎたりといはざるべからず。支那人は騾馬の如く剛情にあらず。何となれば、騾馬は、飽く迄も片意地を立てとはせども、彼の旅行の半途に『酒手』(Wine-money)をねだりて備主を輕蔑せし馭者は、既に歸着點に達すれば、曩きの片意地とは、うつてかはりて先非を謝し、凡そ半日の間は、平身低頭して謝罪に汲々たればなり。凡そ支那の內地を旅行するものは、馭者、舟子等より契約書を納れしむべし。是れ煩累豫防の良法なり。且つ寸毫も誤解の生すべき餘地おからしむるを要す。苟くも小孔あれば、誤解は直ちに其の孔より侵入するなり。

先つ明白にせよ。然るときは後の爭起ることなし。是れ支那人の間に行はるゝ用心の俚諺なり。左れど如何に約束を明白にし、用心堅固にするも、猶誤解の起るべき機會あり。就中金錢上に於ては、支那在留の外人常に煩累を免かるゝこと能はず。而してその煩累は獨り無學文盲なる擔夫の類のみに止まらず、敎育ある人々といへど

支那人切實化して金を前取りす

も亦一なり。凡て支那人は、誤解を利用(濫用)すべき天才を具へ、その少許の虧隙より侵入する狀は、恰かも一月の朔風が戶の裂罅より侵入し、水が船の裂口より侵入するに異ならず。蓋しアングロ、サクソン人は、支那人をして此の天稟を發達せしむるに最も適せるが如し。何となれば、支那人は忽ちアングロ、サクソン人の正直にして、人に交はるに、公義を以てし、敵味方に由りて區別を立てざるを、宛かも昔の波斯人が長弓を引くことを、眞實を話すことゝ、人の眼に見て、英人の正直、公義を奇とするとは、猶タイタス(Titus)(四九年(我が人皇第十一代垂仁天皇の第七十八年己酉)生れ、八一年(我が人皇第一代神武天皇の第一年辛巳)崩す。羅馬帝なり。羽化生譯「モムセン羅馬史」の中に詳なり。)の麾下に屬する羅馬軍が猶太人の七日目毎に兵を休め、事切迫するも、此の常習を改めざる奇とするが如し。而して支那人が英人の此の特性に乘じて利をすることは、羅馬軍が猶太人の此の特習に乘じて利したるに異ならず。

一千八百六十年(我が萬延元年庚申)前の百年間に於ける外國、支那の交際史は、恰かも支那人が誤解の才を逞ふせし實例の記錄なりき。同年以後といへども、支那人は決して此の才を失はず。支那の外交史は、故さらに誤解したる諸事の說明史なり。而して是れ

等及び其の他の場合に於て、外人は、必らず約束を履踐すといへる確信は、深く支那人の心裏に其の根を固ふし、拔かんとして拔くこと能はず。却て其の枝葉を繁茂せしむ。外人が正だしき所業を爲すべしといへる信念も、亦一樣に支那人の心裏に根底す。實際に於ては公私の所業共に正しからざることも多けれども、支那人は此の二定點（外人は必らず約束を履踐す、外人は必らず正だしき所業を爲すといへる二信）を支柱として最も執拗なる外人をも動かさんと望めるが如し。今その外人を言ひくるめんと試むる口吻を擧れば、大要左の如し。

（支）貴君には、かやう〳〵に仰せられしにあらずや。

（外）否、拙者は、決して左樣には申さず。

（支）デモ私は左樣に仰せられたりと合点仕る。我れ〳〵は、一同に貴君が左樣に仰せられたりと合点仕る。情願（なさけ）我れ〳〵の愚昧を御察しあれ。情願貴君が仰せられし如く、金を御渡しあれ。

支那人と外人との問答の大意は、千篇一律、前陳の如し。而して百中、九十七の場合に於て、外人は、馬鹿にせらるゝと知りつゝも、嚴密に正しきと同時に、嚴密に信ありと

意味を取り違ふる他例

思はれんと欲し、態ざと彼れ等の笑坪に嵌まりて金を拂ふなり。左れど殘り三つの場合に於ては、外人たるもの、言ひ勝つべき方法を求めざるべからず。その方法果して妙なれば三つの二つは成功すべし。

○　○　○　○　○　○

支那人が日常百事に就て誤解したる例は、經驗ある讀者の心に續々浮び出づるならん。何となれば、その多き幾何あるを知らざるなればなり。外人或る勞働者を傭ひて庭上の草苅を命し、且つ曰く。今將に芽を萠さんとしつゝある一と葉の雑草（からくさ）は、之を遺し置くべし。予はその油々たるの狀（さま）を詠め樂まんと欲すと然るに彼の愚なる賤夫は、草器（くさもち）を執りて、悉く之を芟除し、滿庭一草を遺さゞりき。是れ全く傭主の意を誤解したるなり。『庖人あり。外人彼れを遣さゞりき。是れ全く傭主の意を誤解したるなり。』庖人あり。外人彼れを遣さゞる或る市場に遣はし、之に命して曰く。一尾の鯉と、一羽の若雞とを購ひ來れ。同市場にあらざれば、是れ等を購ふべき處なしと。然るに庖人は鯉を購はず、三羽の老鶩鳥を購ひ歸りて曰く。是れ主公の命じ給ふ所なりと。彼れも亦傭主の命する所を誤解したるなり。『外人書信受取時間の將に過ぎんとする頃、緊要なる書翰數通を一束して、之を從僕（支那人）に附し、且つ命して曰く。携へ

て佛國領事館に到るべしと。然るに從僕は悄々として之を携へ歸りて曰く、最早書信を受取らずと。備主怪みて、委しく其の理由を糾せしに、從僕は、佛國領事館に携へ行かずして、白耳義領事館に携へ行きたるありと。亦備主の言を理會せざりしなり。」

外人輩もすれば支那人の言ふ所を誤解し易く、將た誤解せられ易きことは、著者スミスが一友人の經驗に依りて明かなり。此の友人は、支那一銀行の株主等と懇親なりしが、一日銀行の近隣に火あり。友人、銀行員に面して、祝融の更に一層近隣にまで延燒せざりしを祝す。（類燒の災を免かれたるを祝するなり）然るに銀行員は、何思ひけん、不平の色を顯はせしが、忽ちにして怒りて叫びて曰く。「子の言ふ所何事ぞ。豈無禮の言にあらずや」と。友人は、其の何故に怒れるかを詳かにせず。既にして、事明白と爲れり。彼の銀行員の怒りたる所以は左の如し。曰く。外人の言ふが如く、祝融若し更に一層近隣にまで威を逞ふするならば、銀行家屋或は烏有に歸すべし。不祥奚ぞ之に加へんと。ひ賀詞といふと雖ども、此の類の語は須らく謹で避くべきにあらずやと。」又一外人あり、暫らく北京に駐在す。一日駱駝の群に逢ふ。中に一頭の駝兒あり。外人顧みて馭者に謂て曰く、「足下家に歸らば、我が末男に出でゝ此の小駱駝を見るべしと傳へよ。彼れは

未だ駝兒を見しことなければ、定めて喜ぶべし」と。然るに此の馭者は多年諸外人の家に傭はれて、充分に外國語に習熟しあるべきに拘はらず、稍躊躇したるの末、徐かに答へて曰く。「主公彼の駝兒を購ひ給ふとも、之を育つること恐らくは難からん。憐むべし彼れは必定死亡を免かれざらん」と。

著者スミス曾て支那に於て禮拜式に出席せしことあり。時に辨士は、ナーマン(Naaman)叙利亞の將軍の治療と題する說教を爲し、（ナーマン癩病を患ひし時、イスラエルの預言者エリシヤ之を療したり。舊約全書列王紀略下(The Second Book of the Kings)第五章に詳なり。）叙利亞の大將ナーマンがエリシヤ(Elisha)の家の門戶に到りし時の狀を描き從者等が我が主公の爲めに案內を乞へる樣子を表はし、且つ可及的繪畫的に爲さんと欲して、從者等の言語を演劇的にし、「門番よ。門を開け、叙利亞の大將の御入りなるぞ」と絕叫しけるに、奚ぞ謀らん、聽客の一人此の一語を聽くや否や、恰かも己れに向て叫ばれしかの如く、卒然演場を退けり。辨士の驚きは如何ばかりそや。既にして其の理由を探りしに、彼の者は門番なれば、速了にも、門を開きてナーマンを入れんが爲めに歸り去れりとぞ。

或る傳道師、支那の中央部に於て說教を爲せし時、聽衆に深き感動を與へんと欲し

西洋人は自所想を直に述ぶ亞細亞人は之を反に

て幻燈を用ゐ、日常吾人の目に觸るゝ一寄生虫を數倍の大さに寫して之を示せしことあり。然るに其の狀頗る埃及の鰐魚に似たりしかば、聽衆の一人さも驚きたる如き聲して耳語きて曰く。「見よ、是れ外國の大虱なり」と。

第八章　暗示の才 (The Talent For Indirection)

(註)本章に記す所の如きも、同じ東洋人たる我が日本人の眼より見れば、別に珍しきことにあらず。左れど西洋人より見れば、頗る珍らしき事なるべし。吾人は、本章に由りて、支那人の氣質よりも、寧ろ西洋人の氣質を親ひ知るべきなり。

吾人アングロ、サクソン人がみづから誇るべき智力的常習の一つは、單刀直入、要領を得んと勉め、既に之を得たるうへは、其の思ふ所を直白に述ぶるに在り。勿論上等社會の交際及ひ外交上に於ては、頗る斟酌なきにあらず。然れども猶直線的天性其の主腦たり。(たとひ臨機應變なるにもせよ)然るに亞細亞人(何れの亞細亞人に限らず)に至りては則ち然らず。吾人が彼れ等と交を結ふや、日猶久しからざるに、忽ち其

の天性の吾人と全く反對なるを知るべし。

但し吾人は、(第一)凡て東洋語の特質たる名譽詞(オノリフヰック、ターム)は至仁至智なる聖文武皇帝陛下、又は掛けまくも綾にかしこき云々(いふの類)の冗長なるを咎むるにあらず。かゝる詞に於ては、他の東洋諸國の中に、支那よりも數層の沖を超えたるものあり。(第二)吾人は、又最も簡單なる思想を表出するに、故さらに迂曲(サーカムロキューション、ペリフレーズ)の語、冗長の語、若くは別稱(ユフィフェミズム)とも名くべきものを用ゆるを咎むるにあらず。是れ等は、直白に表出することを欲せざるに依りて用ゆるものなり(例へば、支那に於ては、人の死したることを表出するが爲めに、諸種の辭を用ゐ、崩去、薨去、遷逝、黄泉に赴く等の類一々枚擧に遑あらず。而して其の一語だも直言の失儀に陥らず。且つ此の主義は、上天子より、下勞働社會に至るまで、普ねく一般に及べり。只甲に用ゆる辭と、乙に用ゆる辭と甚だ異なるのみ)(第三)吾人は又本章に於ては、巨細に渉りて、辭の臧否なると否とを論するにあらず。夫れ人各、承知の上に反語を用ゐて、他の人各、其の反語なるを理會するときは、則ち臧實に害なし。只辭の用法の異なるのみ。

凡そ外人の支那人と交を結ぶものは、忽ちにして發見するならん、單に支那人の言ふ所を聽くときは、其の何の意味なるを察する能はざることを。而して之を察す

を解すること能はず

支那人が暗示の才に富めるボーイの例

る能はざるは、支那語に熟せざるが故にあらず。たとひ充分に同國の俗語に熟練するも、猶之を察する能はざるなり。辞を換へて言へば、支那人の言語は、一言半句悉く之を理會し、支那文字を以て隨聽隨記するを得べきの熟練に達するも、猶彼れが何事を思ひて此の言を發するかを詳悉すること能はざるなり。何故に然るか。何となれば、支那人は、心に思ふ所を述べずして、稍〻聯絡の關係ある他事を述べ、聽く者をして已れの意味、若くは已れの意味の一部を推度せしめんと望めばなり。

故に支那人と交際して、少しも差支おきに至らんには、啻に支那語を熟知するを以て足れりとせず、併せて推度の力に富まざるべからず。而して其の力は如何に富むも、猶往々推度を誤まることあり。何となれば、力には限りて、力を用ゆべき場合には限りなければなり。左に支那人一般に普及せる此の現象を説明せんが爲めに一例を擧げん。

茲に擧ぐるは、吾人が最も早く接そる支那人の一人、即ちボーイ(外人が支那に於て用ゆるボーイなる語は、從僕長の義なり。年齢の長幼に關せず)に就ての一例なり。ボーイは固より支那人の一標本なれば、由りて以て一般支那人を察するを得べし。

詳するは多きみ望むなり

一朝ボーイは、主人の前に出で、『伯母』大病の趣き申し來りたれば、願はくは數日の暇を賜はりたし。事務の御差支は、萬々承知し居れど、甥の身として打ち捨て置くは本意にあらず。此の儀御憐察ありて、偏に御許容を乞ふと述ぶ。今外人の此の語を聽くものは、只管に伯母病氣の爲めに數日の暇を與ふるの餘義なきを思ふのみにして、言外に意味の含まるゝを察せざるべし。然れども其の實は、言外大に意味あるなり。即ち此のボーイには伯母あし。故に勿論病むべきの理なく、病を訪ふべきの心も起らず。只彼れと庖丁との間に隙を生し、庖丁の威權漸く彼れを壓するを見て、陽に暇を乞ひ、暗に事情を主公に告げたるなり。

又一人支那人あり。外人の爲めに用を辨せり。外人は、即時に金錢を贈りて之を謝せず、只當座の答禮として、同じく物品を贈りしに、彼の支那人は、懇に之を謝絶し、且つ曰く、瑣末の事を爲して報酬を受くるは五常の許さゞる所なりと。其の言ふ所を聽くに、貴下若し強て僕に賜はゞ、僕の名譽を傷けんと論するものゝ如し。左れぞコハ只表面の言のみ。その裏面の意は決して茲に在らざるなり。然らば裏面に於ては、如何

眞率に言ふべき場合と、言ふべからざる場合とを識別するの才に富むもの

他人の陰事を暗示

なる意味を含むやといふに、謝物の少なきに失望して、オリヴァー、ツウヰスト(Oliver Twist)の如く、更に一層多きを望む[なり]。即ち言語の中には此の意味を含まざれども、暗々の中に現在、若くは未來に於て、更に一層望ましき物品を與へられんことを請求し、今與へられたる物品は、之が妨碍と爲るべきの恐あるを以て、斷然之を拒絶し、かくて他の贈與の爲めに路を開くなり。

支那人は、何故に斯の如く間接的に自己の利益を求むるや。直接に請求するときは、聽く者の感情を傷はんことを恐れ、且つ他人の事を眞率に述ぶるときは、其の人と葛藤を生せんことを恐るゝを以てなり。支那人元來空談を好み、所謂說面話兒(ざつぱのをいはひと)ならざるにあらず。然れども性來、眞率に言ふべき場合と、言ふべからざる場合とを識別するの才に富めるを以て、機に臨みて故さらに諷諭の語法を用ゐ、外人に關しては、殊に愼重を旨とするなり。左れば、支那人、容貌愚なりといへども、吾人をして自得する所あらしめ、他人に對する行爲を著しく變更せしむるの例少なからず。然れども徒に其の類に倣ひて運用の妙を悟らざるときは、沈默に失することあらん。

世に他人の陰事を訐くを以て無上の樂と爲す人あり。支那に於ては、此の場合といへども、明かに其の人を指し、眞率に其の事を述ぶるを危意と爲して之を避け、例の迂回の言辭を用ゐて、暗に之を示すが故に、其の狀甚だ奇なり。茲に一例を擧げん。彼れは、先づキョロ々々として周圍(あたり)を見廻はすこと宛ながら壁に耳あるを恐るゝが如く、聲を低くして怪しき耳語(ささやき)を爲し、三本の指を出して、該家第三の人に就て言ふと(否、寧ろ仕方話すること)を暗示し、漠然話端を開きて、漸く佳境に進みたるの後、暫ちく語を止め、眉を顰めて曰く、「足下それを見られしや否や」と。外人固より何事を見ず。只半信半疑の間に首肯するのみ。茲に至りて、彼の自稱密告者は、更に語を繼ぎて曰く、「足下今之を知らざるも、他日必らず思ひ當ることあらん」と。

支那人は凶事を暗示するに無用の斟酌に過ぐ

凶事は、之を明言せず、可及的包意的手段に由りて之を告げ知らさんと欲するは、何處も同じ人情にして、獨り支那人のみに限るにあらず。然れども支那人は、所謂『禮式』上より其の報する所、曖昧の極度に達し、吾人をして寧ろ無用の斟酌にあらざるかの感をなさしむ。今左に一二の例を擧げん。

其一例

愚痴なる祖母あり。卒然二友の潛語しつゝある處に到る。二友は、固より彼の女の孫兒の訃音を齎らし來りたるものなれども、彼の女に向て、我れ等は、只空談を爲

する時の狀況

其二例

支那人、暗示を好むより往々敷を避けて用ゐず

其三例

しつゝあるなりと繕ひ、而して僅々三十分の後に其の事實の明瞭と爲りたるにも拘はらず、一時は、両回までも繰り返へして他事なきを保証したり。

息子あり。家を出でゝより既に數月。將に歸らんとして、隣村なる一友の許を訪ふ。友人彼れを促がして曰く、『留まりて演劇を觀ること勿れ』と。此の一語に由りて彼れは、母の死したるを知れり。

一支那人あり。一日、吾人に一封の書簡を托し、當時遠隔の地に旅行中なる某の許へ送らんことを請ふ。此の書簡は某の不在中に、其の妻俄然死去し、隣人等其の家に何人も在らざるに乘じて家財を悉く奪ひ、有體に言へば、某を零落に陷らしめたるを告ぐるものにて、書中に委しく其の事を記せり。然れども表書には『平安家信』と大書せるぞ奇怪なる。

支那人は、暗示の才に長せるより、往々數字を用ゆべき處に之を避けて用ゐざるとあり。例へば、五冊の書籍に順序を附するに、彼れの所謂五常の順序に從ひて仁義禮智信を以てするが如き是れなり。康熙字典の如き四十冊以上の大部に渉れるものも亦吾人の推察するが如く、一二三の數字、又はa b cの如き字母を以て順序を附

女子嫁すれば名を稱せず

せずして、十二支を用ゆ。（子の上、子の中、子の下、丑の上、丑の中、丑の下といふの類を指す。但し原著者は、支那の字典は、西洋の如くa b c（アルファベット）なりとせり。）又試驗室には、千字文中に在る文字を以て順序を立て、學生をして此の順序に從ひて各自の座席を占めしむ。但し千字文は千種の文字より成りたる書にして、中に一字の同じきものなきなり。（本書最終、羽化生の評言參看）

（註）ヘーゲル（Hegel）（一七七〇年（我が明和七年庚寅）生れ、一八三〇年（天保元年壬寅）死す。獨逸の哲學者なり。）曰く、支那にては五つを以て根本の數と思考すること、猶獨逸國に於て三を根本の數と思考するに同じ。故に氣水土金木（水火木金土の事ならん）を以て五行と爲す。又天の四方と中央とを認めりと。因みに記す。

女子既に嫁して人の妻と爲れば、内外の人其の名を稱へずして、夫家の姓と母家の姓とを併せ稱ふるが如きも亦暗示の一例に加ふべし。既婚婦は『誰れ々々の母』と稱す例へば諸君は一支那人と懇親なりと假定せよ。然るとき若し彼れの母、病に臥すならば『小黒氏の母』病むと稱す。顧ふに諸君は、彼れの家に『小黒氏』なるものあるを聞きしことなく、其の何人なるを理會するに苦むならん。左れど彼れは、諸君が疾くに知るべき筈と信じて之を云ふなり。婦若し子なければ、彼の女の名は、更に一

支那人の隠語的請求

層理會し難きものと爲る。たとへば『小黒氏の伯母』と稱し、又は或る他の説明詞を用ゆるの類是れなり。老妻は、みづから『外戚』と稱す。外戚とは、外家の事に注意するの義なり。左れど妙齢の妻にして、未だ子あらざるものは、両姓を稱せずして、單に夫家の姓を稱す。妻は、往々良人を指して我が『先生』と稱するとあり。（羽化生按するに、妻より良人を指して『夫子』と呼ぶことあり。此の『夫子』と云は先生の意には、原著著誤りて、先生（教師）の意と信したるならん。又場合に依りては、妻は、便利上より良人を呼ぶに職業の名を以てすることあり。例へば『油磨』がかやう〳〵に言ひたり」と稱するの類是れなり。同上

支那有名の將軍曾て出師の途次、或る沼を過ぎりて蛙に膝を屈せしことあり。麾下に向て曰く。汝等蛙の勇氣の感すべきを記臆せざるべからざると。吾人西洋人の考察に據れば、此の將軍、麾下に向て「推度力の稍〻大ならんこと」を求めたるが如し。左れど支那人が吾人に向て求むる所の推度力は、更に一層大なり。例へば、支那に於て歳暮は、一年の總勘定を爲すべき季節なり。時に一知人、著者の許に訪ひ來りて、一語を交えず。只意味ありげなる身振を爲せり。即ち先つ天を指し、次に地を指し、次に其の相對する人を指し、最後に已れを指せり。吾人は赤面ながらも、其の何の意なるを解す

ること能はざ。然るに彼れは、吾人を以て、充分に此の貌（だんなりにやうげん）戲を理會し得るものとし、爲すが如く、其の意は、金を借らんと請求するに在りて、「願はくは、他くも秘密を旨とし、天、地、我れ、子の外、他人をして知らざらしめんと」望むに在るを充分に理會し得るものと爲すが如し。（楊震の四知に天知る、地知る、我れ知る、子知るといへり。此の意によりて隠語的請求を爲せしならん。）

（註）後漢書に云く。楊震、茂才に擧げられ、四たび荆州の刺史に遷る。東萊の太守として、郡に之くに當り、道に昌邑を經。故との擧ぐる所の荆州の茂才王密、昌邑の令となる。謁見す。夜に至りて、金十斤を懷にして以て震に遺る。震曰く。故人已れを君を知る。君、故人を知らざるは何ぞや。密曰く。暮夜知るものなし。震曰く。天知る、神知る、我れ知る、子知ると。密愧ぢて出づ。

支那に於ては、飲（飲酒）、食（飽食）、男女、賭博を以て四惡を爲し、輓近之に喫烏烟を加へて五惡と爲す。支那人往々五指を示して曰く。「彼れは悉く之を吸收せり」と。蓋し其の所謂彼れなるものが此の五惡を兼ぬるの意あり。

支那人は、暗示の才に長し、且つ禮儀を重んじて、完全なる禮儀の具はるあるが故に、或る禮式を變更して、他人を甚だしく輕蔑したるの意を示すとあり。吾人より見れ

『東西』

『南北』にあらず

は、敢て意に介するに足らざることの如し。例へば、人に書簡を送るに、其の褶み方に依りて輕蔑の意を含むことあり。或る一字を他の文字よりも上げざるは、不敬の大なるものにして、その領收者を憤らしむることは、英國に於て彼れの姓名に標題字を用ゐざるよりも甚し。社交上に於ても、亦一語を交ゆることなくして、侮辱の意を示すことあり。例へば來客を其の地位に從て相當の点にまで出で迎へず、相當の点にまで之を送らざるの類是れなり。又禮儀を組織する成分の其の一つを廢するは、聊か輕侮の意を表するものにして、支那人は、忽ち其の然るを認むるなり。左れど外人は、毫も侮辱せられたるを悟らざるぞ憫然なる。

凡て支那人は、怒れる時に、互に罵ることあり。然れども文學の才に富みたる人は、或る巧妙なる隱語を用ゐて、他を罵るが故に、罵られたるものも、一時は之を悟らず、久しきを經て後之を悟ること、宛ながら砂糖掛けの嘔吐劑に似たり。初めは却て之を甘しと爲し、漸く甜りて其の中心に至るに及びて、始めて嘔吐を催ふすべし。例へば『東西』なる語は、事物の義なり。他人を東西と呼ふは、彼れを事物視するものにして、即ち罵詈なり。小説などに、醜奴を罵りて『粗東養西』(みにくきなどと稱するの類是れなり。)

左れど彼れを『南北』にあらずと稱

最も無識の人も通辭を殺くるに巧なり。

官吏社會と北京ガゼット

するも、亦『東西』なりといふの義にして、即ち罵詈たるなり。

支那人、最も無識のものといへども、通辭を設くるに巧なるは眞に驚くべし。其の『てくだ』の縱横自在なるに至りては、吾人の遠く及ばざる所なり。而して外人の外、何人も眞面目に之を受くるものなく、『顏』を立つるが爲めの設計と思ふの外なし。其の言ふ所は、雲を攫むが如くあれば、如何に鑑定に富みたる外人も、之を推察するを難んず。適〻語窮して如何とも爲し難きに至れば、『知らざりき』『理會せざりき』の兩語を紋切形と爲して道路を開く。實に仕樣のなき人物なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

本章の類例を求めんと思はゞ北京ガゼットの日々の紙上に顯はるゝ所を見るに如くはなし。彼の古語に所謂「鹿を謂て馬と爲す」(史記秦始皇本紀云。趙高欲爲亂。恐群臣不聽。乃先設驗。持鹿獻於二世。曰。馬也。二世笑曰。丞相誤邪。謂鹿爲馬。問左右。左右或默。或言馬。以阿順趙高。或言鹿。高因陰中諸言鹿者。以法。後群臣皆畏高。云々。)は、支那人一般の風習なれど、同紙上に顯はるゝは、其の絶頂に達したるものなり。凡そ事物の外觀と眞相と相同じからざるは、支那の特質なれど、就中此の奇怪なる養大鏡(レンズ)を最とす。(養大鏡とは、北京ガゼットを指すなり)

此の養大鏡は、其の半透明なるにも拘はらず、支那政府の眞相を照らすことは支那

政府の眞相を穿つないふ自餘の諸窓自餘の刊行物ないふを合したるよりも優れり。支那人果して事物の眞正の理由を與ざるを常とし、而て外人充分の熟練を得るにあらざれば彼れの言語を推度し難しとするときは、北京ガゼットコッ實に禮儀と方便との極度に達せる支那官吏社會の眞相を穿つべき類例に立ちしものなるべし。例へば、北京ガゼットは、或る老官が陛下に向て切に骸骨を乞ふ時、頻りに其の疾病苦痛の狀を書き記すことを怠らず。是れッモ何の爲めに書を記すか。既にして陛下此の願を容れず、直ちに復職を命ずることあり。是れッモ何の意ぞや。彼の事實なりとして疾病苦痛の狀を書き記したるは、何の意ぞや。又若し大官或る重罪の告訴を受け、而してガゼットは、力を盡して其の無罪を辯護し、大官は、結局他の輕罪を犯したるものとせられたりとせよ。然るときは彼れが罪の輕減は、記者の勢力によるか、將た彼れは實に此の輕罪を犯せしか。何人も之を決定し能はざるなり。

今や本章を畢るに臨みて更に一言せんとす。吾人の信ずる所に據れば、凡そ北京ガゼットを閲讀し、其の內面の意味に就て稍〻正だしき意見を懷く人は、其の支那を知ること、從來の諸書を讀みて知るよりも遙かに深きものなり。然れども外人かく

充分に支那を知るの曉に及ばゞ、彼れの吾人に於けるは、猶支那人の吾人に於けるが如く、吾人をしてその言ふ所果して何の意なるかを知るに苦ましむるなきを得んや。

第九章　柔軟的强硬 (Flexible inflexibility)

(註)柔軟的强硬は、支那人の所謂『面從後背』と殆んど同義あり。

吾人は、我が從僕に就て始めて支那人を知るなり。從僕固より心ありて、吾人に支那人の氣質を紹介するにのらず、吾人亦彼れの紹介に由りて滿足を覺ゆるにあらず。然れども彼れは、實に支那人氣質に關する吾人の最も早き教師にして、吾人が彼れより習ひ得たる學科は、忘れんと欲するも忘るゝこと能はざるあり。既にして、吾人が支那人を知ることの愈〻廣きに及び、愈〻に從僕の甚だ狹き範圍と日々に相接するに依りて、不知不識の間に得たる斷定の正だしきを確むるを得べし。何となれば、或る意味に於ては、一個の支那人は則ち支那人全體の撮要あればなり。『今や吾人は、一

種特別なる氣質を叙述せんとす。此の氣質を柔軟的強硬と呼ばゝ、遽かに聞きて奇怪の念ひあるべしといへども、適語に最も近しと信するを以て、斯くは名けたるなり。若し夫れその氣質自身は、僅々少許の解釋によりて、忽ち明かにするを得べし。在支那異人館に傭使せらるゝ諸の從僕の中に於て、家内の平和を掌握するは、庖人の右に出づる者なかるべし。初め庖人が、其の家に傭はるゝや、細君は、彼れに向て、望む所と、望まざる所とを述ぶるに、彼れは始終天與の「習ひ得たるとはいはず」誠心誠意外觀上を以て謹聽す。例へば、細君より「前の庖人は、麵包の未だ沸騰せざるに、之を竈に入るゝの惡習あり。是れ彼れが妾の氣に入らずして、遂に暇を出されたる一因なり」と述ぶれば、新庖人は笑坪に入りて答へて曰く、「僕固より過失多きを免かれざるべし。左れど決して頑固にあらざることは、堅く保証する所なり。豈奶々の厭はるゝ所を強て爲すが如きことあるべけんや。」細君又「犬。懶惰漢。及ひ烟草の三者を庖厨に入るゝは妾の堪えざる所なり」と述ぶれば、答へて曰く、「僕性甚だ犬を嫌忌し、未だ喫烟を解せず。元來他國の人なるを以て、府内に於ては、只僅に一二の友あるのみ。而かも一人の懶惰漢あし」と。遂に其の家に傭はるゝことゝは爲りぬ。然るに未だ數日なら

ざるに、彼の麵包の拵へ方に於て、恰かも前庖人の『兄弟分』たるの實を現はし、友人の庖厨に出入そるもの無數、殊に犬を携ふるものも少なからず。喫烟の香は、絶ゆる間なし。之を詰問するに、答へて曰く、「麵包の不出來なることは、僕實に之を許す。左れど、決して、淺ね方の不充分なるが爲めにあらず。友人も亦庖厨に入り來りたるに相違なし。左れど彼れ等は、僕の友人にあらず。確かに日傭取（今此の家に傭はれ居る）の仲間なり。然れども一切犬を携へず。且つ既に歸り去りて一人も殘らず。蓋し再ひ來らざるべし。但し明日に至れば、復た來るならん。我れ等從僕は、一人も烟を喫するものなし。其家の從僕等は、非常の喫烟家揃なれば、願ふに其の烟の塀を超え來りて我が家に來れるならん。僕は眞に家法を守れり。左れど其の他の人々をして悉く之を守らしむること能はず」と。

日傭人足も亦殆んと庖人に同じ。此の日傭人足は、草苅の爲めに傭ひたるものにて、主家より外國製の研ぎすましたる利鎌を渡し、之を用ゐて苅るべしと命ずれば、莞爾として肯諾し、之を領收せしが、既にして其の苅る狀を見るに、彼の利鎌を用ゐずして、支那製の舊き鐵の剃鍬を用ゆ。此の剃鍬は、長さ凡そ四尹短かき柄を附けたる

洗濯男の例

ものなり。而して、彼れは、恰かも言ふが如し。曰く、「此の舊き剉鍬は、彼の鎌よりも優れりと。

洗衣夫も亦外國製の洗衣機を交附せらる。此の機は時間を省き、石鹸を節し、就中洗ふべき布帛を痛めざるの益あり。備主は、又彼れに專賣絞水機を交附す。此の機は、力を要せず。亦布帛を害せざるものなり。然るに彼れは、二機を高閣に束ねて用ゐず。依然として、在來の器具を用ゐ、衣類を磨擦し之を扭ること前日に異あらず。故に備主若し凡ての被備者をして改良の法に、據らしめんと思はば、間斷なく看守せざるべからず。其の煩亦極まれり。

園丁の例

園丁あり。外人之を備ひて、之に乾かし晒したる煉化石を交付し、用ゐて頽牆を修理せよと命ず。然るに園丁は、牆の頂上に、枝を一尺の深さに建つるを優れりと思考し、遂に此の法を用ゆ。備主怪みて之を詰問すれば、答へて曰く、「此の法遙かに優れり。故に之を用ゆ」と。

脚夫の例

脚夫あり。外人之を數日の旅路に使せしむ。而して前日の夕に行李を授け、命ずらく。「天明に出發せよ」と。然るに翌日の午後、彼れは猶近傍の陋巷に在るを發見せり。依りて

馭者の例

之を召喚し、その理由を詰問しけるに、答へて曰く、「履機を洗ふが爲めに一日を費さざるを得ず」と。

馭者あり。外人、一日の間之を備ふ。出るに臨みて、某の路を行けと命ず。馭者亦他の支那人の如く、唯々諾々として首肯す。既にして全く異なりたる路を取れり。是れ路上に於て面識なき或る人が其の路最も便なりといふを聞きたればなり。

讀者は、以上の諸例に由りて知れるならん。庖丁や、日備人足や、園丁や、脚夫や、馭者や、凡て同一轍に出づるを。同一轍とは何ぞや。吾人の判斷を信せずして、自己の判斷を信ずる、是れなり。

患者の例

柔軟的强硬の例は、又外國の藥局、若くは病院の存在せる場處に於て常に見ること。醫師は、細かに患者を診察して、之に藥を與へ、さて一回に若干量を服し、一日に若干量といふことを詳密に告げ知らせ、服用すべき時間、方法等も併せて之を示し、猶誤解を防ぐが爲めに、再三之を反復せり。患者も亦みづから誤解を恐るゝにや、一兩回立ち戻りて疑を質し、悉く納得して歸れり。然るに家に歸るに及びて、一と呑みに、二日分の藥を呑了せり。是れ快氣の遲速等は、服藥の多少に由ると思

柔軟的強硬は支那人の互相の關係にも存す

考するを以てなり。』又或る患者には、膏藥を貼り、誡めて曰く、謹で之を動かすこと勿れと、是れその不時に剝がし去らんことを恐れて之を防ぐが爲めに誡むるなり。然るに患者は、家に歸るの後、醫師の誡に背きて之を剝がし去れり。而してその理由を聞くに、『予は、皮膚の龜甲的と爲るを好まず。皮膚に甲殼の生するは、予の堪えざる所なり』と。

患者（支那人）を平均するに、藥局に於ける最も無學なる助手の意見を以て、主任醫師の意見と、同一の價値ありと爲すが如く。而して甲（助手）が一a字を讀まず、又藥劑の名、疾病の徵候を知らざること、乙（醫師）がその學に長し、一代の經驗を積みたることは、措て問はざるが如し。是れ甚だ苦々しき事なりといへども、事實なるを如何せん。彼れ等は、又門番、日傭人足の類の言を信じて醫師を疑ひ、笑ふべき療法を用ゆるを以て、往々治療を誤まることなきにあらず。

上來述ぶる所は、支那人が外人に對する柔軟的強硬の實例なり。是れ等の諸例は、第一に吾人の注意を惹く所にして、且つ吾人に實際上の大關係を有す。故に初めに擧げたり。然れども支那人互相の關係に於ても亦柔軟的強硬は、常に其の間に存する

を以て、吾人愈、此の關係を視察するときは、愈、彼の國人の所謂『面從後背』なる語の到る處に行はるゝを知らん。抑も支那の從僕が支那の主人に面從し、毫も其の命に抵抗せざることは、猶其の外國の主人に面從するが如し。左れど此の場合に於ても亦自己の流義を棄てゝ一に主人の命令を遵奉せんとの意見を有せず。左れど、主人も亦細大悉く命令に從はしむるの難きを知りて稍、寛恕する所あるが如し。夫れ外國の主人は、被傭者をして精密に我が命したる如く爲さしめんと望めるに、然かするの能はざるを以て、遂に主僕の間に葛藤を生するなり。著者の一知友あり。支那に在りて從僕を傭使す。從僕は、例の如く、至極の忠實と、至極の頑硬とを兼有せる人なれば、勢ひかのづから主人の用途に妨碍を與へざるを得ず。然れども幸にして心に二重（チレム）體を懷き、『我が『ボーイ』（第七十八頁參看）は、常に自殺すべきか、給金を增さるべきか、二者其の孰れを取るべきかに迷ひつゝある』と思考したるを以て、敢て風波を起すに至らざりき。支那の主人固より己れが命令の行はれざること多きを熟知す。左れど嘗へば負債償却の爲めに貯金を殺ぐが如く、又機械の摩擦を避くるが爲めに其の綠を減するが如く、必至の結果として之を不問に附するあり。

支那官吏社會にも亦柔軟の風強硬の風流行す

斯の如く多少命令を遵奉せざるの風は、支那上下の官吏社會が互相の關係に於ても亦一般に行はるゝが如し。蓋し支那官吏をして訓令に背かしむる所以の動機は、種々あり。例へば偷安の如き、勞を他人に讓るが如き是れなり。就中最も有力なるを黄白の引力と爲す。

水汲從僕の一例

一地方官あり。住地の水鹹くして飲むに堪えざるを以て、從僕に命し、撒水車を携へて、數里を距りたる河より水を汲み來らしむ。然るに從僕は、主命の如くせず。某村の水の甘きを知れるを以て、汲みて主人に供し、かくて三分の二距離を省きつゝ仲間一同の歡心を買へり。此の場合に於ては、たとひ主人は、我が命令の行はれざりしことを知るとも、苟くも水の惡しからざる限りは、毫も問ふ所なかるべし。又他の人々は之を知らざるにあらず。之を知るものは五百名の多きに及ぶといへども、猶支那人の天性として他人を怒らすことを恐れ、葛藤を生することを嫌忌するを以て、何人も之を主人に告ぐるものなきなり。茲に支那從僕の標本を示すべき一話あり。主人一日從僕に命して曰く、「水溜の水を汲み干して、之を或る場處に移し、他日の用途に備へよ」と。從僕は謹て命を奉じ、悉く井中に投じたりといふ。斯の如きは遵奉の形

又一例

厦門官吏の一例

を保ちて、毫も遵奉の實を存せざるなり。

レンニー博士(Dr. Rennie)は、厦門一官吏の實例を擧げて曰く、彼れは、勅令を、両分し、之を前後して解し易からしめたりと。外人に關する事に於ては、此の類例普通に行はれて怪むものなし。

法官と罪人の例

斯る詭計は、往々法官の宣告と衝突することあり。今一例を擧げん。法官一日罪人を二箇月の杻刑に處し、夜中の外、一切此の杻を取り去るべからずと宣告せしとあり。然るに支那國に於ても亦『地獄の沙汰も金次第』(原文は Where it will do the most good なり。今解し易きが爲めに意譯す)なれば、彼の罪人は、黄白を蒔き散らして殆んと全く此の刑を免かれたり。即ち法官が衙門出入の際に於てのみ言ひ譯けの爲めに杻を施し、其の他の時間は、常に之を脱せりといふ。法官豈金力の爲めに我が宣告の壓倒せらるゝを慮らざらんや。然るに再ひ立ち戻りて、宣告の果して遵奉せらるゝや否やを省せざる所以のものは何そや。顧ふに彼も亦一個の支那人なり。其の宣告を下すに當りて、既に其の遵奉せられざるべきを知れり。而して之を知りつゝ猶平素よりも二倍の長文を作りて宣告せり、噫、笑ゞその間に綾の存するあからんや。然れとも此の綾は獨り司法上にのみ存

支那人を最も執拗となすは非なり

するにあらず。諸課悉く然らざるはなし。是れ外人の日常視て知る所なり。ソモ支那官吏社會に於ては、上官、下官に向て。命令果して行はるゝや否やを視察せよと命すれば、下官は屢、其の行はれつゝあるを報ず。左れど其の實は決して行はれつゝあらず。而かも多くの場合に於ては、上官之を問はざるなり。然れども萬一上官或る部分より迫られて、下官を督促すると頗る急なるときは、下官は其の下官を督促して、咎を彼れ等に歸し、遂に壓力復た施す所なきに至りて止み、百事は前の如く依然たり。之を『改化(?)』と名く。彼の時々發表せる鴉片販賣の禁、罌粟培養の禁の如きは則ち其の類例にして、其の成蹟は、萬人の能く知る所なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

往々支那人を以て最も『執拗』なる人民と爲すものあり。此の類の人は、吾人が其の強硬の形容詞として『柔軟的』なる語を用ゆるを見て、不穩當の批評を下すならん。左れど吾人は他く迄も信ず。支那人は決して最も執拗なる人民にあらずして、之をアングロ、サクソン人に比すれば、遙かに柔軟なることを。吾人は、彼れ等を稱して『柔軟的』といふ。何となれば、彼れ等は、騾馬の如く強硬なると同時に、屈從の性を有すればな

從容として非難を甘受す

支那人は竹の如し

り。但し屈從の性は、アングロ、サクソン人の中には、往々之を欠く者ありと知るべし。『支那人が『柔軟』の才を具ふるを知らんと知せば、其の從容として非難を甘受するの度量に富むを見るに如くはなし。此の度量は、アングロ、サクソン人の既に全く失ひたる伎倆なり。否、寧ろ未た全く知らざる伎倆なり。左れど支那人は、他人之が短處を數へて面責するも、之を謹聽して其の間、毫も忍耐、注意、慇懃の三者を失はず。欣然として承認の意を表し、且つ曰く、「我れ過てり、我れ過てり」と。

(註)子路、人告之以有過則喜。禹聞善言則拜。大舜有大焉。善與人同。舍己從人。樂取於人。

以爲善。(孟子)柔軟の例、遠く古代に訪まる。

顧ふに彼れは、加之のみならず、其の人に向て、「足らはぬ我が身に斯く迄も深切を盡す」を謝し、其の指摘したる過失は、直ちに之れを改め、自今決して再びせざるべきを誓ふあらん。噫、此の誓の如きは、「鏡花水月」(Flowers in the mirror and the bright moon in the water)と美を爭ふことを得べし。而してその影ありて形なきにも拘はらず、其の人の心を和らぐるの効實に著し。注意せよ、此の効コソ則ち支那人の目的なることを。支那人は恰かも竹の如し。是れ比較の最も其の當を得たるものなり。夫れ竹は可憐

支那人は前髪の如し

にして實用に供すべく（茲に所謂可憐は、前の『從容として』と風語相同し。即ち甲はGracefulにして、乙はGracefully なり。原著者の意、之を對照するに在りと知るべし。）柔靭にして、中虛に、東風吹けは西に撓み、西風吹けば東に撓む。而かも風なきに當りては、森然として聊かも屈撓せず。竹は禾本科の一なり。然れども他の禾本は凡て節を結び易く、竹に至りては柔靭なるも、節を結ぶこと能はざるなり。

又彼の人類の頭髪を見よ。天下何物か之よりも撓み易からん。頭髪は之れを數倍の長さに引き延はすことを得べし。（外人の頭髪は捲縮す。一旦、手を離すや、直ちに縮れて殊に然りなる以て）故形に復す。頭髪は、自己の重量のみに由りて、何れの方向にも屈撓すべし。又一種若干の房を爲して、其の方向を改めず、之を變せんとするも變することを能はざるものあり。俗に之を『前髪』（額上に逆立つ毛）と名く。前髪既に撿束すること能はず。故に自餘の頭髪、其の數の多しといへども、前髪に准じて整理せざるべからず。今若し地球を以て仮りに人類の頭と定め、萬國の民を髪と定むるならば、支那人は猶貴重なる前髪の如きか。彼れ等は恰かも、梳るを得べし、斷つを得べし、剃るを得べし。然れども其の再び生ゆるや、復た必らず前の如く、その一般の方位は、決して變更することを能はざるべきなり。

支那人は全體より智力へば智力の點に於ては他の國民に讓らず

然れども無數教育の人甚多し

支那語の組織は智力的にして混濁と犯すしの多し

第十章　愚蒙〔直譯語、智力的混濁〕

(Intellectual Turbitude)

今や吾人は、支那人氣質の中に『智力的混濁』（愚蒙）を數ふ。然れども智力的混濁は、支那人の特性なりといふにあらず、將た支那人は悉く此の性を具ふといふにあらず。全體の上より言へば、支那人は、智力の点に於て、現存種族の孰れにも讓らざるが如く、確かに智力の薄弱を現はさず。且つ毫も薄弱の傾向を現はすことなし。左れど之と同時に又支那の教育は、其の及ぼす所の範圍甚だ狹きこと、而して總かに不完全なる教育を受けたる人、若くは全く教育を受けざる人は、支那語の組織に於ては、輙もすれば最も甚だしき智力的混濁を犯しつゝ、法律家の所謂『事實前の從犯』(Accessory before fact) たるを得ることを記憶せざるべからず。

支那の名詞は、讀者の既に知らるゝ如く、變化せしむること能はざるに似たり。（名詞の變化とは、格、數等の變化なりと。文典に詳なり。）而して全く『性』『格』の區別を有せず。支那の形容詞には比較の階級（定級、比較級、最上級）なく、動詞には『語法』（能動、受動）『法』（直接法、可能法）『時限』（過去、現在、未來等）『數』（單、複）『人稱』（第一人稱、

第二人稱、第三人稱、の撿束物なし。又名詞、形容詞、及ひ動詞の間に區別の認むべきなきが如し。何となれば、同一の文字を三詞に兼用し、而して何人も之を疑ふものなければなり。

吾人は、必らずしも支那語は、人間の思想を交通すること能はずと言ひて之を非難するにあらず、又人間の思想には、支那語を以て明白にし難きもの、若くは全く明白にし能はざるもの多しと言ひて之を非難するにあらず。(實際明白にし難きもの、明白にし能はざるもの多かるべけれども)單にかゝる組織の語は、『智力的混濁』に陷らしむること宛ながら夏日の炎熱が午睡を誘ふに似たりと主張するなり。

吾人が教育あき支那人と對話するに當りて、最も困難を感ずるは、概ね其の何事に就て談話するかの判然たらざるに在り、彼れの談話の中には主格の地位に立つべきものなく、錯綜綢繆の間に、只賓位(ブレヴァート)のみを認め得べきを以て、全話恰かもマホメット(Mahomet)五七〇年(我か欽明天皇の第三十一年庚寅)生れ、六三二年(我か舒明天皇の第四年壬辰)死す。回教の教祖なり。の棺の如く、空中に懸りて、何物にも附着せず。主格の名詞(又は代名詞なきを以て、何物の話を爲すかを了解し難きなり。換言すれば、賓位の名詞(代名詞)又は助詞等は、如何なる主格にも附着せずして、恰かも中天に懸るが如きをいふ。)而かも言ふ者は、何事を話すかを獨り心に承知するを以て、聽く者にも亦おのづから了解し得べきことゝ合点し、主格を省畧するの影響か

くの如く大なるを悟らず。左れば、世に久しく支那語中の主格、又は賓位の欠けたる場處に之を補充するのみを以て其の意味を變更するを業とするものあり。豈一奇事に非ずや。支那の文章には、往々全文中の最も緊要なる語を隱して、其の影すらも現はさゞるものあり。甚だ屢、文章の形式に、言ふ者の態度に、音聲の調子に、伴隨の境遇に、毫も題目の變更したるを示さず、而かも聽者は、卒然言者が瞬時前の如く、自己の事を話さずして、道光帝(宣宗なり。道光元年辛巳(我か文政四年。西暦一八二一年)即位。同三十三年辛亥(我か嘉永四年。西暦一八五一年)崩す。)の御宇に世に在りし祖父の事を話しつゝあるを發見することあり。此の場合に於ては、言者何時の間に祖父の話に遷りしか、何時の間に再ひ自己の話に復するかは到底之を判知すること能はず。然れども斯の如きは、日常の出來事なるを如何せん。支那人は、かく言者が寸毫の豫告を與へずして、卒然話を甲の題目、甲の人、甲の國より、乙の題目、乙の人、乙の國に遷すを見るも、深く之を異とせず。恰かも窓障子に居る虫を注視しつゝ、同時に、脇目もふらずして、遠き丘山の同し視線内に群がれる家畜を注視するが如き念ひあるのみ。

支那の動詞は、固より時限を有せず、而して時間の經過、即ち實に場處の轉移を示す

べきものなし。左るが故に、人の知覺の久しく混沌したるを清むること能はず。事情斯の如きを以て、外人苟くも既に消滅したる思想の連絡を追はんと思はゞ、(少なくとも外觀上だけにても)恰かも邊境に住する獵夫が斧を以て草莽を披くが如く、陸續疑問を發せざるべからず。其の法左の如し。

(一)足下が今話さるゝ人は誰か

既に其の何人なるを糺し得たるならば、次に

(二)それは何處にありし事か

(三)それは何時ありし事か

(四)其の人は、何事を爲せしか

(五)彼れ等が爲せしは何事か

(六)その結果は如何ありしか

かゝる質疑を起す、毎に、彼の支那人は、呆然として吾人の顏を凝視し、且つ不平の顏色を呈はすこと、宛ながら吾人を以て五官の感觸を失ひしにあらざるかと疑ふが如し。左れど吾人は、此の質疑に由りて、始めて能く其の大體を明かにすることを得

るなり。

教育なき支那人は、其の心に人語を聞き分くべき準備なきが如く、何事を話し掛けらるゝも、不意を擊たれたるの念ひありて、直ちに之を理會すること能はず。彼れの心は、譬へて言はゞ、銹びたる古大砲を敗車に載せたるが如し、狙擊に先ちて、豫め方位を定むることに勉めざるべからず。而かも必らず狙らひを誤らざるを得ざらん。

例へば、彼れに向て簡單なる問を起し、「足下は何歳なりや」と問はんに、彼れは茫然として質問者を凝視し、而して「予か」と反問するならん。質問者「然り、足下なり」と答ふれば、彼れは熟考の末、一生の智恵を振ひ出したるが如き顏附を爲して「何歳なりや」と問ふかといふ。「然り、何歳なりやと問ふなり」といへば、又「予は何歳なりやと問ふか」といふ。「然り、足下は何歳なりやと問ふなり」といへば、是に於て始めて「五十八歳なり」と答ふること、宛ながら古大砲の漸くにして狙らひ定められたるが如し。

智力的混濁の著しき一例は、事實を道理の如くに述ぶる風習の一般に行はるゝに在り。試に支那の庖丁に向て「何故に菓子麵包の中に食鹽を混和せざるや」と問へば、「我れ等は菓子麵包に食鹽を混和せず」と說明す。「足下の都に於ては、何故にかゝる多

他人の意思を見て之を第三の人に傳ふることは能はず

量の美しき氷を冬日の間に貯へ置かざるや」と問へば「否、我れ等は、我か都に於て、冬日の間に毫も氷を貯へ置かず」と答ふ。今若し彼の「事理を悟るに適する人は幸なり」(Happy is he who is able to know the reasons of things)と唱へたる羅甸詩人をして支那に棲息せしむるならば、或は其の句を變して言はん「事理を發見するが爲めに論する人は不幸なり」(Unhappy is the man essays to find out the reasons of things)と。

智力的魯鈍(インテレクチュアル・トルポル)の他の徴候は、常人に在りては、他人の説話を腦底に藏めて、之を第三の人に傳ふることの能はざる是れなり。例へば甲あり、乙に或る事を語り、丙に傳へしめ、頼りて以て丁の擧動を指揮せんとす。西洋に於ては、固より容易の事業なれども、支那に於ては、殆んと行はれ難きの計畫といはざるべからず。此の場合に於ては、或は、乙丙共に之を緊要ならずと爲して全く丁に傳へざるか、若くは丁の理會し能はざるべき形狀と爲りて之に達するか、否らざれば、全く本來の意味を失ひて之を傳ふべし。同國に於て、他人の語を其の儘に傳達することは、稍、才智ある人といへども甚だ難んずる所なり。

今此の類例の外人の注意に觸れたるものを擧げん。例へば外人、支那人が或る不條

理なる動作を爲したるを見て「何故に足下は斯く爲るか」と問へば、簡單に「然り」と答ふ。是れ曖昧の一なり。又日常、數量上に用ゆる両意の語『幾』の字を指すならん ありて、更に一層答詞を曖昧ならしむ。即ち『幾何』(How many ?)なる疑問上と、『種々』(Several)なる肯定上とに兼用する語 即ち『幾』の字 是れなり。例へば「足下は此の處に幾日(How many days)ありしや」と問へば「然り。予は幾日(Several days)ありたり」と答ふるが如し。是れ曖昧の二なり。然れども支那語の曖昧なるが中に、取り分け最も曖昧なるは、區別なく He 彼の男 She 彼の女 及ひ It 其れ の三義に流用する人代名詞(又は不人稱代名詞)即ち『那』の字是れなり。話者(はなすひと)時としては話中の主人公を示すが爲めに、拇指を以て漠然其の人の家を指し、又は或る点を指すことあれども、多くは、『那』の字を用ゐて、關係代名詞、或は指示代名詞、若くは指示形容詞とし、かくて充分に意味の通するものと爲す。是れ曖昧の三なり。事情かくの如きを以て、支那人の談話は、英國の法廷に出でたる証據人が左の如く爭鬪の狀を述ぶるに類するなり。

He'd a stick, and he'd a stick and he w'acked he; and he w'acked he, and if he'd a, w'acked he as hard as he w'acked he, he'd a killed he and he he.

怠慢なる一從僕(支那人)あり、主人(外人)之を責めて「汝は何故に予が呼ふ時に來らざりしや」と詰れば、「別に理由あるにあらず」と答ふ。遽かに聽くときは天眞爛熳たるに似たり。然れども又心意錯雜の致す所といはざるべからず。かゝる錯雜また往々擧動の上に及ぼし、吾人西洋人の如き心意の整然たるものをして煩はしきを感し、憤怒せしむることあり。例へば庖丁は、我が委托されたる食品を用ゐ盡すも猶新調を請はず。次回の食時に、主人其の品の膳に上らざるを怪みて之を問へば、「もはや有らず」と答ふ。「然らば何故に新調を請はざりしや」と問へば、「予は新調を請はざりし」と答へ、以て滿足なる説明を與へたりと爲すが如し。』外人より金錢を受取るべきものあり。外人、金庫を開きて之に支拂を爲すに、彼の支那人は、之を受取りたる後、凡そ『舊半日』間も雜話に時を移したる後、更に言へらく、「他に受取るべき勘定あり」と。外人聊か不平の顏色を爲して、「然らば何故に予が金庫を開きし時に之を要求せざりしや。何故に予に再度の手數を掛くるや」といへば、「否、彼の勘定と、此の勘定とは全く別物なれば なり」といへり。』又之に類似したる話あり。一患者(支那人)病院に到りて診を乞ふ。醫師細かに之を診して藥を定めたり。然るに患者は一旦扣所に退きしが、再び診察所の戸

治療半ばにして休藥す

の間くるや、復た入り來りければ、醫師怪みて、「足下の診察は既に畢りたるにあらずや」といひしに、彼れ謹で答へて曰く、「然り。然れども予はまた他の病あり」と。

治療を受けずして偏盲となりし實例

支那人は、病で藥を服する際といへども、或は繁忙の爲めに、又は藥價を惜むが爲めに、往々半途に休藥することあり。吾人より觀れば、愚の至りと思はるれども、支那人は、習慣と爲りて、敢て怪まざるが如し。彼れ等が間歇熱に罹れる時の如きは、其の適藥たる幾那鹽の爲めに錢十箇(セント)——凡そ我が合衆國一仙——を費すを痛みて寧ろ反復、病に窘めらるゝの廉價なるに若かずと爲せり。支那人が醫療を怠りて、爲めに病を重からしめ、難治の症と爲るに及ひて、始て醫診を乞ふの例は吾人の屢見る所なり。』

一支那人あり。外人の設立に係れる病院より凡そ半哩の處に住す。一日外出の際、眼病を受く。家に歸りて後、直ちに醫診を受くることを爲さず。苦痛堪え難かりしといへども、おのづから治すべしと思ひて、二週餘日の間猶豫せり。既にして病院に到りて診察を受けしが、もはや手遲れと爲りて如何ともすること能はず。終に角膜瘍の爲めに一眼を失へり。

又一患者あり。重き頸癰(くびきりちやう)に罹りて、日々に病院の治療を受く。第十八

遠くれさなりし實例

日に至りて言へらく「足痛の爲めに眠ること能はず」と。依りて之を檢するに、足部にも亦數日前より瘍を生し、早既に茶碗大と爲れり。何故に早く之を告げて治療を受けざりしやと問ひけるに、「頸部の全癒を待ちて、然後之を告げんと思ひてなり」と答へしとぞ。

予は、支那人が斯の如きを見聞する毎に、チャールス、リード(Charles Reade)一八一四年(我が文化十一年甲戌)生れ、同八四年(我が明治十七年甲申)死す。英國の小說家なり の一小說を想起せざるを得ず。其の中に云く「人間は智惠に不足なけれども、只一つの欠点あり。愚昧是れなり」と。

歌を述べて題旨に及ばず

支那の教育は、之を受くる者をして、其の大體を攫みて之れを實際に應用すべからしむるものにあらず。西洋の俗間に流布する所に據るに、支那の說教家は、天然痘と題する說教を述べつゝ、毫も天然痘の事に及ばさずと。又聞く、支那の犬は、概ね狼を追はず。偶〻二者共に走ることあるも、反對の方向に走るにあらざれば、互に直角を爲して走るなりと。支那の辨士は恰かも此の犬の如く、徹頭徹尾演題外の事のみを論じて更に肝腎の主旨に及ばず。只往々題目の香臭を帶び、又往々之を追はんとする の傾向なきにあらざれども、喃々說くも敢て之に追及せずして引き返へし、遂に演壇

支那は智愚貧富隔の甚しき國なり＝貧愚者の情況

を退くなり

支那は、智愚貧富の懸隔の甚しき國にして、富豪、極貧、櫛を並べて生活し、大學者、無學の徒、肩を並べて雜居す。而して其の最も貧しく、且つ最も無學なるもの(人民大半は是れなり)に至りては、愚蒙の爲めに天地甚だ狹くして、恰かも井蛙的生活を爲し、已れが、頭上の天といへども、一片の暗黑界と察するのみ。此の類の人、多くは已れが住處より十哩の外を見しことなく、其の腦底に存する所は、近所かいわいの境遇を出でず。甚だしきに至りては、あらゆる人類の奇とし喜ぶ所、更に奇にあらず、更に喜ばしからざるものあり。彼れ等の多くは、我か一哩の內に外人の住するを知るも、その外人は何者にして、何處より來り、何の爲めに留まれるかを質さんとも思はざるあり。彼れ等は、只生存の爲めに競爭そることのみを知りて、其の他に何事をも知らず。彼れ等は、常人の推考するが如く、已れの靈魂を三種ありとも思はず、一種ありとも思はず、又全くなしとも思はず。其の耳を傾くる所は、只穀物の價に關係する事のみ。其の他の事に至りては、聽くべき價値ありと思ふことなし。彼れ等は、惡人の死後に必

ちず犬又は六脚虫と爲りて此の世に生れ出づべきを信し、純潔平易なる寂滅に於ては、體は塵に歸し、魂若しあらば、は空に歸すべきを信す。彼れ等が俗氣紛々たる處は、恰かも、西洋人の所謂『實際家』即ち胃と財嚢との二者のみの爲めに生活する人々と其の趣きを同ふす。此の類の人は、眞正の實驗家なり。何となれば、耳目の聞見する能はざる所は、一も理會するを得ず、隨て之が概念を有つを得ざればなり。彼れより見れば、人生は、事實(詳に言へば最も不愉快なる事實)の連續なり。而して事實以外のものに就ては、彼れは無神論者(アテイスト)、兼多神教信者(ポリテイスト)、兼不可思議論者(アグノスチック)なり。彼れは、往々未知のものに俯伏し、未知のものに食物を供べて、以て依頼の天性を滿足す。然れども此の天性亦おのづから斯く顯はれたるにあらず。周圍の風習に誘はれて顯はれたるなり。彼れは、人生の有形的元素のみを養成して、心理的精神的元素を全く養成せず。今若し此の類の人を長夜の眠より寤さんと思はゝ、新しき生活を注入するの外あるべからず。然るときは、昔の族長の口に發せし高尚なる眞理即ち「人には靈魂あり」といへる眞理を悟らしむることを得べし。

『神經的』なる語に古今の相違あり

今人の神經は古人に異なり

第十一章　無神經 (The Absence of Nerves)

言葉の意味の時世に連れて變遷するは、各國ともに珍らしからぬことにして、英語にも其の例最と多し。就中神經的(Nervous)といへる語は、其の意味に於て古今霄壤の差あり。古は神經的といへば神經を有するの義にて、筋骨の逞ましく、膂力の優ぐれて、强壯なるをいへりしに、今は、神經衰弱し、又は病に罹れるの義に變し、神經過敏、若くは過敏の爲めに惱み、又は物に感し易きこと、其の薄弱なること等を總稱して神經的と名ぐるに至りぬ。さて何故に言葉の意味にかゝる變化を生せしや。畢竟文化の進むに從て、おのづから神經を過勞するもの多く、神經病は、百年以前よりも更に一層普通の病となりたるを以て、不知不識神經的なる語の意味も甲より乙に變せしならん。

然れども吾人が左に述ぶる所は、特に神經病者のみに關するにあらず。一般西洋人、即ちその神經は別に病めるにあらざるも、諸種の事情に依りて他の身體諸機よりも、目立ちたる人々に關するなり。簡言すれば、所謂神經的なる人民に關するあり。而

神經過勞の實況

して我が讀者諸君も恐く此の神經的人民の中に包含せらるゝことゝ信ず。げに十九世紀文明の空氣を吸收し、蒸氣電氣の時世に棲息するものゝ神經は、彼の帆前船や、乘合馬車に乘りて悠々たりし舊時の人の神經と必らず逕庭なくんばあらず。吾人の時代は、活動の時代なり。急進の時代なり。飲食の暇だになきほどの多忙なる時代なり。吾人の神經は、瞬間の休息をも爲さゝるなり。其の結果の如何は、問はずして明かならん。

現今の事務家は、少なくとも西洋の事務家は、常に汲々として、惟れ日も足らざるの容貌を呈し、恰かも鶴首して電報の到來を待つが如し。—否、電に待つが如きのみならず、往々實際に之を待つとあり。—而して電文の如何によりて其人の運命に大關係を有すること多し。心かくの如く切しければ、おのづから擧動の上に影響し、常に安閑たること能はずして、何事にか手足を働かせ、或は談話の最中に鉛筆を手にして、スワといはゞ、直ちに筆記して、事に遲くれざらんと心懸くるかの如く、又は手に唾して、何時にても重大の事務に當らんと覺悟するかの如し。又俗に所謂『きよろ〳〵眼』を爲して、如何なる事變の起らんかと氣遣ふものに似たり。吾人は、常に或る事業

に着手すべき地位に立つが如く、今現に身邊に迫り來れる更に一層緊急なる五六箇の事件を畢ふるや否や、直ちに之に着手すべきの感あり。神經過勞の結果は、彼の記者、彈琴師、電信技手の如く神經の痙攣を患ふるにあらずして、神經の一般に張るに在り。吾人は、復た古人の如く長く眠むること能はず、又熟く眠むること能はず。鳥の梢に囀り、日光の暗室に射入み、窓戸の微風に動き、人語の微かに耳朶に觸るゝ等の如き、瑣小の事にも忽ち眼を覺まし、一たび夢を破らるゝや、決して復た眠に就くこと能はず。尊中に入るも猶世間の事務を忘れざるを以て、一年三百六十日間、一夜だも眞に眠りたることなし。噫、頭取が銀行を抱て寢ねざる間（就眠の間も銀行の事を忘れざるの意なり）は、其の銀行は決して榮えず」といへる諺の流行する今日、株主は利益を獲るも頭取は神經を勞するを知るべし。

吾人が斯の如く讀者の熟知せる西洋日常生活の事實を詳叙する所以は、支那人の全く其の趣きを異にすると對照せんが爲めなり。勿論支那人の神經を解剖して之を檢査する共、外觀上に於ては、西洋人の神經と著しく異なりたるところなかるべ

支那人は二六時中常に單調なるを厭はず

し。然れども、たとひ幾何學者は「彼此同一にして同一の位置を占む」といふべきにもせよ、二者甚だその種類を異にすることは、歴然として火を睹るが如し。

支那人は、長く一箇處に在るも、別に倦むことを知らず。二六時中、自動機の如く筆記に從事するも、左のみ苦しきを感せず。彼れ若し手細工師あらんには、鷄鳴より黄昏まで、一箇處に在りて、或は織物をなし、又は黄金を打ち、其の他此の類の事を爲して、終日齷齪たるも、更に職業の單調なるを厭はず。且つ單調なるを感せざるが如し。之と同事にて、支那の兒童は、學校に在りて、恰かも一室に監禁せられ、聊かも放課の時なく、又趣味の異なりたる學科によりて精神を慰藉せらるゝ等のことなし。仮りに若し西洋の學童をして、かゝる待遇を受けしめしならば、恐らくは、久しからずして狂疾に罹るに至んとするならん。支那の赤子は、我か西洋の赤子が生まるゝや、否や、忽ち手足を動かして、蹴くに似るやらで、其の靜かなる狀は、宛ながら土細工の偶像に似たり。稍、成長するに及べば、西洋の兒童ならば、猿も三舍を避くるばかりに騷ぎ廻はれども、支那の兒童は、長く一處に起坐すること少なからず。

又生理上より觀察するに、支那人は、運動の必要を感せざるが如し。彼れ等は西洋人

運動を必要と爲さず

支那人は如何なる境遇の下にも安眠するを得

が貴賤貧富おしなへて散歩を好むを見て、殆んと其の意味を解すること能はず。況んや、一命を賭して國中を競走するをや。彼れ等は、身分ある西洋紳士が戸外に午後を費して、ベースボールに餘念なきを見て、疑訝に堪えざるべし。廣東の一教師曾て外國の貴婦人が打毬戯に熱心するを目擊して、一從者に「彼の女は、若干金を得んと」て、那の如く跳ね廻はるや」と問ひしことあり。時に從者は「否、一錢をも得ずと答へ」ければ、教師は猶疑ひて之を信せざりしといふ。吾人は反復す、支那人は、決して運動の眞意を知ること能はず、之が説明を聽くも猶之を解せざるなり。

睡眠の一事に於ても、亦支那人と西洋人とは頗る逕庭あり。概して言へば、支那人は如何なる場合に在るも安眠するを得。彼れ等は、之を煩はすものあるも、睡眠を妨げらるゝことなく、煉瓦を枕にし、莖、又は瓦若くは籐の類を蓐にするも、雜沓の間に安然として眠を貪るを得るなり。彼れ等は、室内を暗くするを要せず。他人の靜粛を要せず。幼兒の終夜號泣することあるも、爲めに安眠を妨げらるゝことなし。地方に依りては、夏日の午後二時の間、千門萬戸悉く白河夜舟に乘するところあり。土人何處に在るに論なく、悠々として華胥の國に遊ぶ。故に夏日の午後二時間は、天地の寂然

支那人は空氣の流通に意を注かす

たる宛ながら深夜の二時間に異ならず。』要するに勞働社會は、勿論、其他支那人の多數は、眠むるに處を擇ばず。今若し三輛の土車の上に横臥し、蜘蛛の如く頭を低れ、口を開きて、傍らに蠅の止まりたるまゝに安眠し得るといふことを資格に定めて、兵士を募るならば、支那に於て、直ちに百萬一否、加之のならず千萬一の軍隊を組織するは、甚だ容易なるべし。

支那人が空氣の流通に意を注がざることも、亦茲に叙述せざるべからず。支那の家屋は、凡て空氣の流通甚だ悪しきを以て、大風の爲めに屋根を吹き去られたる時、又は家屋の持主、口腹の爲めに迫られて、賣却せんが爲めに家屋を取り壊したる時の外、流通と稱すべきほどの流通あることなし。聞く所に據れば、多人數群集するは、支那人が住宅の常態なりと。左ればにや、此の群集の中に在りて、毫も不快を感せざるなり。假りに若し彼れ等にアングロ、サクソン人の神經を附したらんには、其の不快を感する、夫れ幾何ぞや。

支那人は能く體苦を忍ぶ

支那人の神經の鈍きことは、身體の苦痛を能く忍ぶの一事によりても亦明かなり。苟くも支那の病院に行はるゝ外科手術を目擊せし人は知るあらん、支那人の大半

支那人は面あたり視察せらるゝも平然として業務に執る

は、西洋人の最も膽力あるものも、畏避するほどの劇烈なる手術をも泰然自若として受くることを。さて此の趣旨に就ては、論叙すべき事項頗る多く、悉く之を掲げたらんには、一大冊子と爲るべしといへども、本書紙數限りあるを以て姑らく之を省き、ジョージ、エリオット女史(George Eliot)が其の一手簡に載せたる所を掲ぐるのみに留めん。

ジョージ、エリオット女史曰く。支那人は、激烈なる外科手術を受くるに、一切痲藥を服せず。眼を開きて、神色自若たり。實に西洋人の驚嘆に堪えざる所あり。女史の説若し信すべくんば、支那人の剛氣や眞に感すべきなり。

ブラウニング夫人(Mrs Browning)[一八〇九年(我か文化六年己巳)生れ、同六一年(我か文久元年辛酉)死す。英國の婦人詩家なり。]曰く。「同情なき觀察を受くるは拷問を受くるなり」と。げに夫人の如き多感の詩人に在りては、左る感情も起るあらん。否、アングロ、サクソン人は、概ね左る感情を懷くなり。ソモ西洋人は、職業、就中精緻又は困難なる職業に從事するに當りて、他人の爲めに視察せらるゝを好まず。然るに支那人は、如何に精細に視察せらるゝも、平然として職業に從事するが如し。又西洋人が支那の内地を旅行するに當り、外人の滅多に行きたる

ことなき場所に到る毎に、物見高き支那人の爲めに周圍に蝟集せられ、凝視せらるゝときは、一種言ふべからざる不快の感を起し、たとひ彼れ等支那人は、只同情なき觀察を爲すことの外、他に害を我れに加へざるも、我れは怒りて彼れ等に去れと命し、「去らずんば、腕力に訴へん」と叱することなきにあらず。然るに支那人は、全く之に反し、幾何の外人が其の周圍に群集して、久しく已れに注目するも毫も意に介せず。寧ろ以爲らく、「他人の只已れに注目するを憤るは、已れに不正あればなり」と。

西洋人は、啻に睡眠の際に、靜穩を要するのみならず、疾病の際には、殊に最も靜穩を要す。左れば平素無用の音響を意に介せざる人といへども、一旦病に罹れば、甚だ之を嫌忌し、朋友、看病婦、醫師みな靜穩を以て、病を治するの要件と爲す。患者若し恢復の望みなきときは、殊に喧騒を禁し、事情の許す限りは、患者をして平和を保つことを得せしめんと勉む。然るに支那人は、全く其の趣きを異にし、病室に在るも更に靜穩を謀らず、病報一たび各處に達するや、東西南北より來會するもの踵を接し、病の重きに從て、訪問者の數また多く、毫も喧騒を禁せず。而して患者自身も亦之を厭はざるが如し。奇といはざるべけんや。訪問者の出入毎に、又は彼れ等に飲食を饗する

毎に、其の喧騒頗る甚だしく、患者危篤の場合には、幾多の會衆みな聲を揚げて號哭し、僧侶等また惡魔退散の祈禱を行ふなどの混雜あり。仮りに患者をして西洋人たらしむるならば、一刻も早く瞑目して、此の煩累を免かれんと望むならん。有名なる佛國の一貴婦人、病篤き時、來訪者を謝絶して曰く、「妾今死期目前に迫れり。願はくは拜眉の煩を免されよ」と。凡て西洋人たるものは、彼の女と同感を懷かざるを得ざるなり。然るに支那に於ては、かゝる謝絶を爲すものなく、良しや之ありとするも、決して承諾せられざるべし。

今や本章を終はるに臨み、此の浮世に免かれざる人類の厄難掛慮に就て一言を述べんとす。支那人は獨り他の人民と同じく、かゝる災厄を免かれ難きのみならず、之を被むるの度遙かに他の人民よりも多し。彼れ等の社會的狀態は、如何なる地方にても多數の窮民を生ずるを免れず。降雨の量聊か少なければ、旱魃の爲めに數十萬人をして、飢餓に苦ましめ、聊か多ければ、洪水汎濫して田圃を流し、農家を傷ひ、而して施すべきの術を知らず。身體財産の權利は頗る安全を欠き、何時冤罪を被むりて

支那人の無神經なるは始めて然後知るべしや

西洋人は支那人に比して何れか亡ぶべきか

法廷の爲めに煩はされ、零落の淵に沈むなきを期し難し。若し西洋人をして斯る境遇に在らしむるならば、恐らくは一日も枕を高ふすること能はざらん。然るに支那人は、此の類の災厄に遭ふも、免かれ難き運命と諦らめて毫も神色を動かさず。是れ彼れ等が最も著しき特性の一とす。數百萬の人民が飢饉の災に逢ひつゝ、悠々として坐ながら死を待つは此の特性あるに由りてなり。蓋し西洋人が此の特性の異意を解そること能はざるは、猶支那人がアングロ、サクソン人祖先傳來(且つ益〻發達したる)の身體的、社會的自由の眞意を解すること能はざるが如し。畢竟風土を異にし、人種を異にするの致す所なれば、別に怪むべきにあらざるなり。

吾人は、何れの点より觀察を下すも、支那人を解すること能はず。然れども其の吾人に比して『無神經』(Absence of nerves)なるを發見するに及ひて、始めて彼等を解することを得べし。

今や國民の競爭は、日〻に益〻激しきを加へ、將來に至らば、其の激しさは如何なる高度に、達するやを知るべからず。是の時に當りて、吾人と支那人と、何れか競爭場裏に勝を制すべきやや。將た吾人は優存劣滅の眞理を確信するものなり。二十世紀の競爭に

支那人は歐洲人と呼べり

生存するものは誰そ。『神經的』なる歐羅巴人か。抑も不疲不倦にして魯鈍なる支那人か。請ふ刮目して他日を待たん。

第十二章　外人を輕蔑すること

凡そ歐洲より始めて廣東に到るものは、此の府が三百六十餘年間、常に歐洲と交通したるの事實を認むるに苦むなり。蓋し西洋各國は、支那と交通の當初より輓近に至る迄、多年の間彼れに一歩を讓りたるが如し。而して外人(外人とは西洋人を指すなり。)の支那國内に入り來るものあれば、其の入り來れる目的は何たるにもせよ、支那人は之を蠻人と呼び、蠻人として之を待遇そる狀(さま)は、宛ながら昔の希臘人が他國の人に對するに似たり。

(註)昔の希臘人は、外人を目するに『蠻人』(Barbarian)を以てし、蠻人として之を待遇したり。委しくは羽化生の編纂せる『希臘波斯戰史』『歷山大王一統戰史』等を看るべし。

支那人が此の稱呼を廢し待遇の法を改めたるは、纔かに一千八百六十年(我が萬延元年庚申)の

交はる所の西人皆下等の人なり

北京の陥落支那人の迷夢を破す

猶心中に外人輕侮の念を懷く

條約以後の事なり。(支那人は從來蠻人なる語は、英語の Barbarian 即ち蠻人 の義にあらず、Foreigner 即ち外人 の義なりとの口實を設けて之を用ゐたるものなり。)

(註)茲に所謂條約は、英佛同盟して支那を伐ちたる後の媾和條約をいふ。其の第五十一條に「自今一般の公用文中に、英國又は佛國の政府人民に關する事項あらば、決して『蠻夷』などゝ掲げ書することを許さず。但し北京に於ける公用文と、各地方に於ける公用文たるとに論なし」とあり。

支那人が輓近まで歐洲人を蔑視したると同時に、其の歐洲人といへるは、諂諛一方の下等人なりしことを記憶せざるべからず。支那人はかくの如く交はる所の外人交、已れに媚び、已れを喜ばせんと競ふを見て、おのづから已れ等の優れるを信し、自尊卑他の習慣を養成せり。英佛同盟軍、北京を陥れ、(一八六〇年(我が萬延元年庚申)) 城下の盟を爲さしめてより、支那人始めて外人待遇の法を改め、爾來纔かに三十餘年。(こゝ明治二十九年に至る迄三十七年) 國内到る處大變革を生し、今日に至りては、歐米文明の何者たるを明かにし、外人の價値を認めたるが如し。然れども猶朝野の人々の心裏に、依然外人輕侮の念の存することは、苟くも觀察力を具ふるものゝ一目して看破するを得べき所なり。

支那人、西洋の服裝を嫌ふ

良しや一歩を譲りて、支那人は、吾人に向て判然たる輕侮の念を懷かずとするも、吾人に對等の交際を許すは、特別の寛典なりといふが如きの念は、常に心裏に縈れるに似たり。而して知らず識らず之を言動に顯はせり。吾人が今叙述せんと欲するは則ち此の現象なり。

支那人が外人に對して第一に異樣の感を起すは、其の服裝なり。而して吾人は、我が洋服に誇るべき理由なしと思考す。或は曰く、東洋の服裝は、吾人の眼より見れば、廣く、『だぶ〳〵』として『身體の自由』を妨げ、洋服の輕快なるに如かずと。夫れ或は然らん。左れど、コハ西洋人が活潑の動作を要し、東洋人と全く其の趣を異にするに依りて然るのみ。仮りに身を東洋人の地位に置くときは、其の服裝の能く適好するを事實上より認めざるを得ざるなり。之に反して、東洋人、殊に支那人若し吾人の服裝を視察するならば、聊かも利便とすべき点を發見せず、而してたとひ笑ふに堪えたりといはざるも、非難すべき点は確かに多からん。蓋し支那人のみづから信する所に據れば、東洋の服裝は、寛くして外形を掩へども、西洋の服裝は、狹くして外形を暴露し、甚だ醜陋に堪えずと。今若し支那の紳士をして短上衣を着せしむるならば、其の

醜陋を厭ひて公衆の前に顯はれ肯んせざらん。(西洋人は、所謂『モンキー、ヂャケット』(猿上衣)の裝を着し、得々として居留地(在支那)を濶歩すれども、)西洋男子の服裝にして既に笑ふべく、厭ふべしと爲すときは、女子の服裝は益、然らざるを得ず。蓋し支那人の目に、たとひ非禮と見えざるも、不相應と見ゆべければなり。ソモ歐米諸國に於ては、文明の日々に上進するに從ひ、男女の間の交際も益、自由と爲りければ、只舊慣のみに依りて適不適を判斷する支那人が全く西洋婦人を誤解し、その服裝を非難するに加へて、其の人物を疑察するも敢て怪むべきにあらず。

外人が支那語に通せざるの一事は、支那人をして、みづから優れりと思考せしむるの第二因なり。今若し外人、無學なる支那擔夫の言ふ所を理會し能はざるときは、たとひその外人は近世歐洲各國の語に熟練するとも、擔夫は、彼れを輕蔑すべし。或は言はん。コハ只擔夫の無識を表明するに過ぎずと。然り。然れども擔夫は猶意氣揚々として、己れを優れりと感するなり。外人若し汲々として支那語を研究し、頗る之に通曉するも、其の從僕(支那人)は、猶故さらに常に身邊に冷笑すらく。呵々、彼れは理會せ

ず」と。かゝる場合に於て、外人の理會し能はざるは支那人の言語の曖昧なるに由るといへ共、支那人は聊かも此の事實を認めずして、一向に外人を劣等視し、心竊かに輕侮の念を懷けり。夫れ支那語は、その範圍極めて廣く、西人の之を研究するや、歳月に限りあり。如何に孜々汲々として之に勉むるも、到底その奥を極め難し。故に言語に未熟なりとして支那人に輕蔑せらるゝの一事は、永く免かるゝ能はざらん。從來の經驗に據るに、外人先つ支那事情の初階に通じて後も、その通ずる所に就ては、殆んど信用を得ること能はず、その通せざる所に就て、益、不信用の度を加ふるが如し。支那人が西人の支那語、支那文學に通するを見て、之を頌讃するは、宛ながらジョンソン博士(Dr. Jonson)(一七〇九年(我が寶永六年己丑)生れ、同八四年(我が天明四年甲辰)に死す。英國の文學者なり。羽化生著『英國文學史』に傳あり。)が女子の說教に關する評言に似たり。即ち犬の後足に於て立つが如し。拙は則ち拙なり。然れども之を爲し得るは、實に感服の至なりと。

外人が支那の風俗を知らざることは、支那人をしてみづから優れりと思考せしむるの第三因なり。蓋し支那人は、何人も已れ等の熟知する所を知れりと思考せるが

如く、之を知らざるものありとは信せざるが如し。故に外人の之を知らざるを見れば輕侮の念を起さゞらんと欲するも能はざるなり。

外人往々支那人の爲めに間接の手段（第八章參看）に由りて侮辱せられ、而して之を悟らざるときは、支那人益〻彼れを蔑視し、益〻之を言動に顯はす。左れど外人は、固より之を心頭に介せざるなり。

外人が通常支那人の最も容易に爲し得る所の事を爲し能はざるは、支那人をして輕侮の念を生せしむる第四因なり。吾人西洋人は、支那人の食物を食すること能はず、炎天に堪ゆること能はず、雜沓の中に眠ること能はず、喧騒の處に眠ること能はず、呼吸なきが如くに眠ること能はず。吾人は、彼れ等の船の一艘をだも漕ぐこと能はず、群騾の其の一つに『ツィ々々』と指揮して、我が意の如くならしむること能はず。

曩きに一千八百六十年（我が萬延元年庚申）英佛同盟して支那を伐つや、同盟軍連戰連勝、破竹の勢ひを以て、將に北京に迫らんとす。時に英國の砲兵隊、京城に至るの路に於て、支那馭者悉く逃亡しければ、英軍彼の騾馬を叱咤するも、騾馬は平然として一歩をも進

まず、英軍をして困却せしめたりといふ。此の話は、何人も能く知る所なれど、因みに一よりて附記せ。

吾人は、緊要の事に費すべき時間と心身とを有すれども、支那禮式の爲めに費すべき時間と心身とを有せず。隨て此の禮式に於ては、支那人の觀念、理想に適從し能はざるが故に、支那人は、吾人を以て、『作法（プロプライエテー）』を理會せず、且つ理會し能はざるものと爲して、暗に輕侮の色を顯はす。ソモ外人といへども、亦決して頭を下げ能はざるにあらず。然れども支那流に頭を下ぐることは、獨り身體上に於て困難なるのみならず、精神上に於ても亦困難なり。外人は虛禮を輕んじ、たとひ之に熟するも、かゝる無用の事を競ひて、爲めに二十分時の多きを費すに堪えず空談の爲めに『舊半日』を過すを快とせず。其の故は、時間の金錢たるを思へばなり。（第五章參看）然れども支那人は、時間餘りありて、金錢足らざるに依り、毫も之を徒費するを厭はず。而して時間の我か貴重なる財産たることを未だ知らざるなり。

西洋人は、（第一）虛禮そのものを厭ひ、（第二）虛禮の爲めに貴重なる光陰を空しふする

の儀式、西洋高官の簡素

グラント將軍來航の時の實例

を忌みて可及的之を省略す。故に之を彼の支那人の儀式を旨とするに比すれば、已れの眼にも、おのづから『みすぼらしく』映ずべし。例へば支那官人の服裝、容貌、態度。即ちその長く『たつぷり』したる公服、その温雅ある動作を外客の粗野なるに對照せよ。支那人苟くも思慮深きものにあらざるよりは、此の霄壤の相違を見て、抱腹絶倒せざるを得ざらん。

支那人は、大官の堂々として儀從を具ふるを視て、之に感動するに、西洋人は、簡易を旨とし、外觀の如きは、之を度外に置けり。支那人をして輕侮の念を起さしめたる、蓋しこれに優るものなきあり。往年グラント將軍(General Grant)一八二二年(我か文政五年壬午)生れ、同八五年(我か明治十八年乙酉)死す。合衆國第十八世大統領。南北戰の英雄なり。往年世界を漫遊し、我か邦へも來りしことあり。當時支那へも行きたりしなり。の支那に到るや、支那人は、『大米國皇帝』(シレート、アメリカン、エムペラー)來ると聞き、爭ふて之を縱觀せしに、奚ぞ謀らん彼れは只市民の服を服し、卷烟草(シガー)を口にしつゝ市街を歩行せんとは、支那人たるもの豈心裏に輕侮の念を懷かざるべけんや。仮りに外國の領事即ち支那の道臺と同等の官人が太守に會して國際上の紛爭を決せんが爲めに省城に到ると想像せよ。數千の人民は、外國大官の行列を觀んと欲して、爭ふて城壁の下に群集するならん。然るに其の

四人の長所は支那人之を尊重せす

行列は、譯官一名の外、先驅及ひ庖人として支那人二名、合せて三名にして、總かに馬車二輛より成るが故に、來觀者のその意外に驚き、輕侮の念を起すや、固より當然といふべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾人は、或る特別の事に長し、みづから支那人に優れりと確信すれども、支那人は、吾人の豫期に反して、此の長所を感賞せず、又之を希望せず。但し支那人また機械的發明に於て、西人の己れ等よりも優れるを認めざるにあらず。然れども彼れ等が此の發明を見ることは、宛ながら吾人の手訣(てづま)を見るに似たり。之を奇とし、之を巧とするも、之を有用視せず。且つ其成蹟を一種不可思議の力に歸し、孔子、魔術を語るを厭ひたるの古事を想ひ起すが如し(論語述而篇云。子不レ語二怪力亂神一。)彼の蒸氣電氣を實際に應用するがごときは、實に世人の驚嘆する所なりといへども、支那人が冷々淡々として聊かも心を動かさゞることは、支那に於て失望したる包管(うけあ)人の實驗する所なり。支那人は、僅々小數の例外を除くの外、一切萬事、摸範を外國に取るを好まず。(たとひ取らざるを得ざるの場合に立ち至れども彼れ等は、衒生に注意せず、空氣の流通に注意せず、

生理に注意せず。彼等は、摸範を西洋に取らずして、西洋文明の或る成蹟、決して凡ての成蹟にあらずを收得せんと望めり。然れども、その摸範を取らんよりは、寧ろ成蹟を捨てゝ顧みざらんと決せり。支那の國威を顯揚すべき直接明瞭の傾向ある事項は、之を要すれども、其の他の事項は、之を他日に讓るが故に、假りに若し時勢の彼れ等に迫るなかりせば、限りなく之を萬年の後に讓りしならん。支那の學者、政治家輩、陽に自國の歐米諸國よりも劣れるを認むるものといへども、猶主張すらく。我か邦上古より既に數學、博物學を攻究し、その蘊奥を極めたり。不幸にして輓近西人の爲めに凌駕せられたりといへども、西人の如きは、畢竟我か古人を祖述したるのみと。實際上の事に於て、外國の人々が支那人に優れることは、疑ふべからざるの事實なり。支那人固より此の事實を認めざるにあらず。然れども冷然として毫も痛痒の感おきが如し。ソモ撒遜人(英人等)は、『出來る』(Can)人を感賞す。而してカーライル(Carlyle)(一七九五年(我か寛政七年乙卯)生れ、一八八一年(我か明治十四年辛巳)死す。英國有名なる史家、論文家なり。羽化生著『英國文學史』の中に傳あり)が欣々として論したる如く、彼れ等は、此の人『出來る』人を『王』(King)と爲し、之を『王』と呼ぶ。『王』と爲し、『王』と呼ぶとは、尊崇して之に則るの義なり。カーライル著『英雄崇拜』(Hero worship)の中に詳なり。支那人は則ち然らず。外人の精巧を喜び、之を奇と

教育ある支那人亦西人を已れ等より優れりとせず

して、他日再ひ之を需めんと思はざるにあらず。然れども此の關係に於て外人を摸範として之に倣はんと欲するものは、萬人に一人もあらざるべし。彼れ等の腦裏に畫ける理想的學者は、依然として、博聞强記なる蠹魚のみ。此の類の人は孜々屹々、辛ふして飢餓の憂を免かれ、徒に數尹の長さある爪を蓄ふるも、(學生を教授するの外)一事を爲すこと能はず。何となれば、『偉人は器具にあらざればなり。』(Superior Man is not a Utensil.)

教育ある支那人といへども、西洋各國民を以て我か國民よりも優れりとせず。茲に一例を擧げて之を証せん。曩きに恭親王殿下が遣英全權大使たるや、レグ博士(Dr. Legge)彼れに向て英國の道德は、支那の道德よりも高しといへる問題を提出しければ殿下は艴然として答へて曰く。予は、足下の意見の顚倒せるに一驚を喫す。と。噫、自尊卑他も亦甚しからずや。ソモ此の類の對照の如きは輕々に之を決すべきに非らず。況んや外交の職に在りて、彼我の好意を旨とするものに於てをや。蓋し此の問題を決せんと欲せば、詳かに兩國人民の心術を察し、此の數果を生したる所以の數因を明かにせざるべからず。吾人は今一切此の類の對照を爲さんと欲せず。左れど支那

支那は到底歐化せず

の儒者が外人の讐敵たり、外人を以て機械的奥秘に達するも、支那人の高德を全く鑒識し能はざるものと爲すことは、世人の能く熟知する所たり。是れ彼の朱朝を尊ひ、現朝を卑む所の標本的支那學者の常態なり。彼の輓近擴夷的文學を續々刊行して、支那中部に充滿せしめたるは、則ち此の輩のみ。

曾て一たび支那は、西洋發明の爲めに占領せらるべしと思考せられたることあり。當時洋刀、肉叉、履襪、ピアノ等は、頻りに英國より支那に舶載し、支那帝國の『歐化』せらるゝは、遠きにあらざるの觀ありき。然れども遂に然らざりき。支那は、決して他國と智力上の戰爭に於て攻略せらるべき國にあらず。支那の人民は、決して他國の爲めに風化せらるべき人民にあらず。西人の爲めに謀るに、支那人の爲めに、確かに且つ永久に尊崇せらるゝ法は、只實物課に由りて彼れ等を說破し、西洋の文明は、細大共に支那文明の能く競ひ得べきにあらざるを示すに在るのみ。若し此の法に由りて彼れ等を說破し能はずんば、彼れ等が依然西人を輕侮し、永く之を劣等視するも、またいはれなきにあらざるなり。

雨我公田遂及我私

先つ公田に雨ふれかしと願ふものなし

第十三章　公共心の缺乏

支那古經の一なる詩經の中に掲げられたる農夫の作と仮定せる詩に云く「我か公田に雨ふりて、終に我か私に及ぶ」と。

（註）小雅大田の篇に「雨我公田遂及我私」とあり。本書之を引用するなり。

周朝の當時、及ひ其の以前の古に於ては、一般人民の間に、或はかゝる公共心もありしならん。然れども現今に至りては、農夫たり、その他の私人たるに論なく、先つ公共の田に雨ふれかしと祈るものは、確かに甚だ稀なるべし。ソモ支那政府は、前屢述べし如く、族長政府の性質を帶びたる政府にして、父母を以てみづから任し、人民に望むに、子の如く從順なるを以てす。曾て殖民地の一黑人あり、「人各己れの爲めにし、神は萬人の爲めにす」(Every man for himself, and God for us all)といへる金言を聽きしかど、心に銘することを能はざりき。是れその心裏に「人各己れの爲めにし、神はその人の爲めにす」(Every man for himself, and God for him)といへる觀念を懷けばなり。一般支那人が其の政府に對する意見は、宛ながら此の新式古言の中に含める精神に似

政府が公務を忘り人民に公共心なき

たり。蓋し支那人の腦裏には、政府の觀念なしといへども、仮りに若し之ありとするときは、必らず思考するならん。予は、己れの爲めに盡さゝるを得ず。政府は、組織の日既に久しく、且つ鞏固なれば、復た予の助を要せず」と。又一方に於ては、政府は、固より族長的なりといへども、族長自身の爲めに盡すに汲々として、族長の家族人民を顧みるに暇あらず。概言すれば、政府は、爲さゝるも終に大に爲さゝるべからざるの恐れなき限りは、殆んど爲さゝるなり。但し人民は、唯々諾々として納税の義務を盡すといへども、畢竟政府が此の租税を以て河水汎濫の害を防ぐを確知し、一は以て自衛の爲めに、又一は以て此の義務を盡すに由りて他の虐取の憂を免かれんと欲して之を甘諾するなり。

支那政府が公務を怠り、支那人民に公共心の乏しきを知らんと思はゝ、道路の現況を視るに如くはなし。抑も歐洲各地に於ては、曾て一たび大官道を築きて要都の間を聯絡し、石を敷き、木を聯ねたるの明証あり。支那に於ても亦かゝる道路の遺址は、獨り北京に存するのみならず、河南、浙江の如き遠隔の地にも存せり。而して其の創設に莫大の費用を要したることゝ、修繕費の比較上少額なるべきことゝは、一目瞭

私を知りて公を知らず

然たり。然るに支那人は、到る處瑣少の費用を惜みて、その修繕を怠り、交通上に非常の妨碍を加ふるも、冷然として越人秦人の肥瘠を見るが如し。此の道路の頽壞は、明朝の末路より、滿洲朝の初へ掛けて、兵乱の久しく結ばれたるに依れり。爾來今日に至るまで、二百五十年の星霜を經過したれば、如何に政治上の紛爭ありしと許すも、修繕の暇は必らず充分に之れ有りしならん。然るに支那人は、毫も修繕を加へず、將た毫も之を企てず、その結果として、支那の現況は、吾人の解く熟知する所の如し。人民が公事を等閑視する狀況も、亦政府の然か爲すに異ならず。政府が如何に公共の財産を處理するとも、苟も各自の頭上に直接の損失を被むらざる限りは、之を對岸火視して、聊かも痛痒の感なし。辞を換へて言へば、道路、其他の諸物は『公共』に屬すと云る概念は、支那人の腦裏に絶えてなき所なり。支那人は『山川』即ち國土を以て皇帝の私産（フヰー・ジムプル）と爲し、帝の所有し得る限りは、永く之を所有し得べきものと仮定し、道路も亦皇帝の私産なれば、若し何事をか之に爲さんと思はゝ、皇帝みづから爲すべしと思考す。然れども道路の大半は、只農夫の田圃が農夫に屬するといへると同じ意味に於て帝に屬するのみ。其他の意味に於ては、決して帝に屬せず。何を以て之を言

公共の害と爲るも意に介せず

ふや、彼の畠道の如きは、何人も隨意に之を通行して、更に持主の承諾を待たず、持主は、徒にその畠道の爲めに租稅を納めつゝ之を用ゆるの一事に至りては、その他の人々と少しも異ならざればなり。此の場合に於て、持主たるものは、可及的畠道を少なくするを利益と爲す。即ち溝を穿ち、堤を築き、他人をして、彼此の往復に必要なる部分の外、通行し難からしめんと企つるを利益と爲す。夏月一朝大雨、盆を覆へして畠地の一部を道路の方に洗ひ去るときは、農夫は、道路に行きて、復たその土を掘り、而して此の處置と、天然の排水と、大風間斷なく砂を飛すと、此の三つの者相合して遂に道路を溝渠たらしむ。吾人の所謂『路權』(Right of way)なるものは、支那人の夢にだも視ざる所なり。

天津、北京間を流るゝ白河を渡るものは、往々數艘の小艇の河中に翻飜たるを見るならん。怪みて之を問ふに、此の艇は、水雷火を仕掛けし場處を示すものにして、通航船舶の之を避くるが爲めに樹つるなりといふ。曾て支那砲兵の一隊、帝國の一官道に大砲を横たへ、爲めに商業上に大なる妨碍を與へたるのみならず、『馬車馬』驚きて奔逸し、意外の負傷者を生したりとぞ。

村落地方の例

都會の地の例

車に荷を積み、又は之を卸す人は、恬然道路の中央に於て之を行ひて毫も顧慮する所なく、通行の人は、其の終はるを待たざるを得ず。農夫が木を伐る時の如きも亦之を道路に伐り落して更らに憚らざるが故に、旅人亦其の伐り畢はりて、之を取り除くまで待たざるを得ず。

斯の如き無遠慮の擧動を行ふは、獨り地方のみに止まらず。都會の地に於ても亦恣に市街を押領して憚る所なきなり。例へば北京市街中の廣き部分には、露店、及び小舍は、道路の両傍に櫛比す。（我が床見世、葭張り等の類ならん）此露店、及び小舍は、元來存立の權を有せず。萬一行幸の通路に當れば、直ちに排除せざるを得ざるものなり。然れども行幸終れば、復た之を建設して、故の如く業務を營むなり。又孰れの都會に論なく、市街の最も狹き部分には、各種の商工、群を爲して、人をして殆んど窒息せしむ。例へば、屠兒、理髮師、烹賣商、食物商、大工、桶匠、及び其の他無數の商工かゝる陋巷に相並びて大都會の餘澤に潤ひ、所謂肩摩轂擊往來の人をして往々進退に苦ましむ。又婦女子の如きも、庭前、臥被を乾すべき場處なきより、之を道路に擴げて行人を妨ぐ、左れば支那市街にして春夏秋冬、往來の妨碍物なきは殆んどあらざるなり。

此の種類の妨碍を與ふるは、獨り露店的のものゝみに止まらず、一定の住宅店舗を有する者も亦妨碍を與ふることあり。例へば大工は、我が宅前に材木、丸太の類を積み累ね、染匠は、長き染物を掲げ、粉商は、通路を横ぎりて長き索麵を曝らすの類是れなり。何故に彼れ等は、かゝる妨碍を通路に加へて顧みざるか。何となれば、各自店前の通路は、想像的『公共』に屬せずして、其の店の持主に屬すればなり。彼れ等は、通路を以て己れ等に屬すと爲せども、其の修繕の義務を負擔するが如きは、毫も心に念ふことなし。(支那の文明の程度にては、元來之を心に念ふべき筈なるに)仮りに若し道路修繕の義務を負擔せんと思ふ人ありとするも、(實際かく思ふ人は決してあるべからず)之を盡すべき時間なく、材料なし。其の故如何と尋ぬるに、何人も他人より多く働きて、得る所の少なからんことを恐れて、同心戮力するものなければなり。ソモ官道線路の諸村、若くは若干里程内の諸村に向て、四時共に道路を通行すべからしめよと命するは、各地方官たるものゝ容易く行ふべき所なり。然れども此の思考が支那官吏の胸裏に浮ぶや否やは、吾人の判定し能はざる所なり。

公共の財産は之を蔑視す

支那人は、啻に『公共』所屬の事物に對して利害を感せざるのみならず、凡てかゝる財

産若し何人も保管するものなく、且つ取りて利益と爲るべきものなれば、盗奪するを常とす。例へは敗石の如きは、運び去りて私用に供し、城壁の表面に在る煉化石の如きは、漸く紛失するの類是れなり。往年支那の或る港に、外國の墓地を環繞せる石壁あり。初めは何人も之に害を加ふるものなかりしが、其の場處は、一個人の保管する所にあらずと知らるゝや否や、忽ち運び去りて、遂に一箇の煉化石だも遺さゞりき。又晩近の事なりき。北京皇城の禁苑内なる或る宮殿の銅屋を何者か悉く奪ひ去りたることあり。滿廷爲めに騒然たりき。蓋し支那十八省の内に於て、最も多く盗奪の害を被むるは皇帝陛下なるが如し。

支那人には愛國心ありや否やは、屢〻起る所の問題なり。而して一言の下に答へ得べきにあらず。但し支那人、殊に學者社會の人に強き國粋的感情(ナショナル、フヰーリング)(譯語穩當ならざれど、愛國心、即ちパツリオチズムと區別する爲めに姑らく斯く譯す)あるは、疑ふべからざるの事實にして、彼の攘夷的精神の如きも、畢竟此の感情に基くなり。晩近罵詈讒謗を極めし攘夷的文學盛んに河南省に流行し遂に干戈を起して外魔(フオーレン、デビル外人を指す)を帝國より驅逐せんと企てたりき。仮りに身を支那人の地位に置きて觀察を下すときは、暴動は固より與みすべからざるも、攘夷的

文學を夥多しく發刊するの精神に至りては、嘉みすべきことゝいはざるべからず。只非難すべきは、彼れ等の誤解と、人種的憎惡（レース、ヘーター）とに在り。左れど人種的憎惡の如きは西人も決して免かるゝ能はざる所なり。顧ふに支那人の中には、西人攻擊を以て純乎たる愛國心の作用と思考するものも多からん。然れども支那大半の人民が全く利益の考を離れ、我が國として國に盡すの念に刺衝せらるゝや否やは、幾多の証據を集めたる後にあらざれば確答することゝ能はず。勿論今の韃靼朝に忠實ならざればとて、之を愛國心に乏しとは言ふべからず。左れど韃靼朝にもせよ、將た他の新朝にもせよ、國民多數の感情は、依然として斯の如くならんと思考すべき理由あるなり。支那人が公事に對してかゝる意見を有せることは、孔子其の人の自白に由りても明かなり。論語に云く。He who is not in an office has no concern with plans for the administration of its duties と。

（註）論語泰伯篇に云く。子曰、不在其位不謀其政と。茲に引用したるは蓋し此の語ならん。左れど、茲に引用するは少しく當らざるに似たり。此の語の意味は、羽化生所著『漁村先生論語講義』に詳なり。

吾人の思考する所に據るに、此の金言は、支那人が自己の責任なき事を對岸火視するの結果にして、殊に其の原因ならん。

ユーク氏 Huc は支那人が國事に冷淡なるの證として一の適例を吾人に與へたり。今左に拔萃せん。

一千五百五十一年（我が嘉永四年辛亥）道光帝（宣宗皇帝）の崩するや、當時吾人は、偶〻北京を出でゝ旅行なりき。一日二三の支那紳士と共に或る旅店に茶を喫しつゝありしことあり。吾人は、聊か政治問題を起して、先つ近日皇帝の崩御は、天下の一大事件にして、勿論萬人の頭上に利害の影響を及すべきを述べ、いまだ何人も皇太子と定めあらざれば、甚だ心配に堪えざる由を陳じ、さて「三皇子の中、何れが天位を繼がるべきや。長皇子果して繼がるゝならば其の執る所の方針は、從來に同じかるべきや否や。若し季皇子繼がるゝならば、實算尙少きに過ぐるにあらずや。聞く、清廷には、兩黨對立し、反對の主義を執て、互に相軋轢すと。新帝には何れの主義に傾き給ふべきや」との問を起し、諸種の推測を簡說して彼の紳士等の注意を喚起せんと勉めり。左れど彼れ等は殆んど耳を傾けず、吾人は猶反復此の大問題を擔ぎ出して、

支那人が愛國心に乏しきの實例

彼れ等の意見を叩きしかど、彼れ等は、煙草を吸ひ、茶を喫しつゝ、只首を左右に掉るのみ。吾人は、餘りの事に勃然とせしが、支那紳士の一人は、此の樣子を見て、急に座を立ち、其双手を吾人の肩に置きて親愛の意を示し、且つ微笑しつゝ言へらく。

「吾子等姑らく予が言ふ所を聞け、かゝる無益の問題の爲めに心を勞し、頭を痛むること勿れ。世に官人なるものありて、國事に衣食す。我れ等之を妨ぐることなく、彼れ等をして俸給を得せしむれば足れり。我れ等何ぞ吾人に關係なきことに心を勞するを須ゐん。一文にもならぬ政治に干渉するは愚の至りにあらずや」と。他の紳士之に雷同すらく、「然り眞に然り。」是に於て彼れ等は吾人に茶を薦め、烟草を進めて厚意を表し、遂に暇を告げて東西に別かれたり。

一千八百六十年（我が萬延元年庚申）英佛同盟軍の北京に迫るや、英軍は、山東省の支那人より騾馬を購ひて負擔の用に供したり。天津及び登州は、自己の利益上より同盟軍に降り、同盟軍若し兩府を蹂躪せざるあらば、其の需要に應じて諸物を供給すべしと約したり。香港より傭ひ來れる支那の日傭人足は、諸の必要なる勞働に從事したり。此の日傭人足が支那軍に擒にせらるゝや、豚尾を切られて、英軍に送り還へされたり。

只少數の偉人のみ愛國心に富む

支那人は義人の下に奮起氣を奮ひ人民なべり

今是れ等の諸事に由りて考察するときは、吾人は、支那人に愛國心、公共心ありと斷言することを能はず。たとひ一歩を讓りて之ありと許すも、其の所謂愛國心、公共心なるものは、アングロ、サクソン人の所謂愛國心、公共心とは遥庭ありといはざるべからず。

人民起りて、施治者の壓制重斂に抵敵せざるを得ざるの時に當りては、かゝる事は屢〻あり。數名の儁傑の士が牛耳を執るあるを要す。此の儁傑の下に激動を起して、往々政府をして、實際上に歩を讓らしむることあり。左れど此の場合に於ては、必らず少許の人傑ありて多數『愚民』（スチューピット、ピープル）の主腦と爲るが故に、能く正義の需要を滿足することを得るなり。左れば此の偉人こそ、身を以て國に殉するものにして、愛國の衷情に富みたるものなりといへども、其の他の人に至りては、只五里霧中に運動するのみ。別に愛國心、公共心なるものありて運動するにあらざるなり。

支那歴史の危機に際し、殊に革命の期將に來らんとするに當りては、赤心を懷き、果斷に富む人、往々率先して國事に盡し、後人をして奮起せしむ。此の類の人は、眞に愛國の士たるのみならず、支那人は、義人の下に義氣を奮興すべき人民たるの証なり。

第十四章　保守主義 (Conservatism)

黄金時代を既往の昔に在りと爲すは、凡て舊國の常なれど、支那人は、殊に甚しきが如し。左れば支那古代の聖人は、更に一層古代の聖人を尊崇して之を祖述し、孔子も述べて作らずと公言せり。(論語述而篇。子曰。述而不作。) 孔子の天職は、古人の既に熟知し、而かも今人の等閑に附するか、若くは誤解せる事項を纂輯するに在り。(詩、書を纂輯したる等の事をいふ。) 孔子が支那の人心を維持し、萬世の師と仰がるゝは、此天職の爲めに盡したる刻苦と、之を全ふしたる高才とに在り。支那に於て聖人を擧ぐれば、必らず先づ指を孔子に屈するも、畢竟其の敎へたりしものゝ性質と、既往に對する關係とに由りてなり。孔子の敎に依れば、良主、良民を作るといひ、(「一家、仁なれば一國、仁を作す。」「君、仁なれば仁ならざるはなく、君、義なれば義ならざるはなし」の類をいふ。) 「君は器の如く、民は水の如し。水は方圓の器に從ふ」といふ。其の敎ふる所、既に斯の如し。其の敎を奉する者が、明王、上に在りたる古代を以て、道德最盛の世と信するも、毫も怪むべきにあらざるなり。是を以て無智の擔夫といへども、往々吾人に向て堯舜の世を談じて言へらく、當時盜賊の憂なきを以て、夜も戸を鎖すを要せず、路に遺ちた

る物あれば、第一に看出したるもの、之を看守して他人の來るを待つ。第二の人來れば、また代りて看守し、斯くて第三、第四と幾多の交代を經て、遂に所有主の手に達す。故に何物を遺すとも、聊かも他人の爲めに手を觸れらるゝことなくして再び我が有に歸するなりと。支那人は、概ね今の仁(ベネヴォレンス、ブンド、ウナスチス)義を以て古に及ばずと稱し、良心に背くの所業に於ては、今遙かに古よりも長せりと稱するあり。

古を尊び、今を卑むの風は、獨り支那、又は支那人のみに存するにあらず。地球到る處皆此の風あり。然れども支那人が此の風を固守するの眞面目なるに至りては、他に比類なし。而して古代事物の萃は文學に存すと信ずるが故に、古文學を尊崇すること偶像に異ならず。熱心なる支那の學者が支那の古典に於けるは恰かも熱心なる基督敎信徒のヘブリユー聖書に於けるが如し。支那人は、此の古典を以て、古の至高至良の智を網羅したるものと爲し、苟くも古今を通じて實際に應用し得べき事項は、悉く其の中に存せりと爲す。善良なる儒者が古典を增補するを要せざるとは、善良なる基督敎信徒が聖書を增補するを望まず、期せざるに同じ。要するに茲に「一の事物あり、て善美を盡すとせば、此の上に改良を加ふること能はず」といへる普通命題

近世政治、學術の本源を古經に求む

古文學は政府の組織を作る

に於ては、儒者と基督教徒と相一致するなり。

左れば善良なる多くの基督教徒が聖書中の或る『經句(テクスト)』を執へ來りて、其の編者の思ひも寄らざる事物の託言と爲すと同じく、孔門の徒(儒者)は、『古聖賢』の書に就て、近世爲政の憑據并に古代の數學、近世の科學の本源を求むるなり。

古文學は、支那國民の模型と爲りて、其の政府の組織を作れり。此の組織たるや、自餘の性質は姑らく置き、永存の性質を有することは、從來の經驗に由りて明かなり。抑も個人たり、國民たるものは、自保(セルフ、プリザヴエーション)を以て第一の緊要と爲す。左れば、一の政體あり、數千百年連綿たるの事實に由りて、能く自保の趣旨を貫くに適することを証する時は、則ち人民の此政體を尊崇、そる、恰かも古典の如きは、固より當然の事と謂ふべし。支那歴史を攻究する人若し支那政府が今日の如きものと爲りたる閲歴を確知し、之れを説明し得たらんには、實に面白き發見といはざるべからず。果して能く此の閲歴を發見し得たらんには、支那に於ては、他國の如く革命的内乱(路易十六世の政府を顚覆して、共和政府を建設し、壓制なるジエームス二世(James II)を逐ひて、自由なるウエリアム、及びメリー、William and Mary)を迎へたるの類)の多からざりし所以を明かにするを得べし。是れ吾人の固く信して疑はざる所なり。曾て一人あり、石壁

を築く、廣さ六呎にして、高さは纔かに四呎に過ぎず、或る人其の奇を怪みて問ひしに、答へて曰く、他日倒るゝことあるとも、今より高からしめんが爲めなりと。コハ只一場の笑柄に過ぎざれども、支那政府の組織も稍、之に似たり。蓋し支那政府は猶立方體の如し、決して顚覆せざるにあらず、左れど、たとひ顚覆するとも、只他面の上に立つに過ぎずして、其の外觀、内質共に常に同一なり。支那人反復此の經驗に由りて、政府幾回顚覆するとも、其の組織上に何等の變動をも生せざること、恰かも猫の如何に高處より墜つるも顚沛せざるに同じきを信認せり。夫れ既に此の信認あり、隨て此の組織を創立したる古聖人の事業を偉とし、改革を蛇蝎視するの習慣を生し、遂に古を優れりとして之を貴び、今を劣れりとして之を賤むに至れり。

以上の理由を明かにせば、支那人が既往に泥む所以を理會するを得べし。支那人は、古の羅馬人と同じく、風俗と道德とを混同し、二者共に根基精神を一にすと爲す。人若し支那の習慣を侵したらんには、支那人は宛ながら最も神聖なる土地を侵されたるの感を懷くならん。支那人が是非得失を問はずして、只管習慣を保護するは、畢竟其の天性に出でたるものにして、譬へて言はゞ、牝熊が天性より其の子を保護す

習慣に泥む

然れども習慣必らずしも不朽なるにあらず

（其一例）理髮の一變

ると一般なり。但し是非得失を問はずして習慣に拘泥するは、人類固有の天性にして、獨り支那人のみの特有にあらず。見よ彼の數百萬の人類が未だ教旨の何たるを明かにせず、教説に由りて日常の行爲を規正せざりつゝ、其の宗教の爲めに、生命を抛たんとの覺悟を極むるを。

支那人の習慣は、支那人の言語と同じく、吾人が未知の或る方法に由りて定まりたり。蓋し習慣は、言語と同じく、一たび定まれる以上は、變化を厭ふものなり。然れども支那人の習慣、言語の生したる境遇は、各處必らずしも同一なるにあらず。諺に云く。習慣は十哩毎に異なりと。以て其の一樣ならざるを徵すべし。又言語の同じからざるは、土音の相通せざるに由りて明かなり。蓋し習慣、言語は、猶石膏粉の如し、一たび形成（かたちづく）らるゝときは、之を毀つことを得べきも、之を變ずることを得べからずと。理論上より言へば、實に然り。然れども理論なるものは、事實に適應すべきものあり。左れば習慣は必らずしも不朽なるに非ず。或る境遇の下に變ずるを得べきものなり。』此の理を説き明かさんには、清朝が明を亡ぼしたる後、普ねく一般の人民をして理髮の風を一變せしめたるの例より善きはなし。此の制度は、屈從の意を萬目の前に

（其二例）佛教の侵入

只行ひ來れる教儀として其の教儀を行ふ

表するものなれば、支那人固より之を奉するを屑とせず。其の大半は、死を以て之に抵抗したりき。左れど滿州政府は、今や雄きの創業の才に加へて、守成の才をあらはし、支那國民を服從するには、此の新制度を棄てゝ他に良策なきを信するより、豚尾を垂るゝは、則ち朝廷に忠なるの証として之を奬勵したりしかば、遂に今日のありさまとは爲りたり。今の支那人は概ね豚尾を以て無上の裝飾と爲し、之に誇り、曾て新制度發布の當時、豚尾を蔽はんが爲めに用ゐたる頭巾は、全く踪跡を失ひ、只廣東、福建地方の住民の依然之を用ゐて敵意を表するあるのみ。

支那に佛教の入りたる當時は、反對の百難を排して侵入したる苦心は一と方ならざりき。然れども一たび根底を固ふするや、その人心に銘するの深き、恰かも道教と一般にして容易に拔くべくもあらず。

（淳退之の佛骨を論ずるなど其の一例なり）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

支那人は、現在に存するものを以て完全と爲す。故に因襲は、宛ながら獨裁政治の如く、無數の人民は、唯々諾々として之に遵ふのみ。萬人に一人も之に疑を容るゝものなく、之が理由を索むるものなし。但し國内、處によりて信教の度の著しく異なるこ

鼻烟の舊習

とは、疑ふべからざるの事實なれども、苟くも信教の名を下すべき信教を有せざる數百萬の人民が『三教』(基督教、佛教、回教)のあらゆる儀式を行ふことも亦最も確乎たる事實なり。人あり、彼れ等が行ひ來れる儀式の或る一つを指して、何故に之を行ふやと問へば、その答ふる所、概ね二項に外ならず。(第一)此の儀式は凡て古人より傳來せり。故に之より確實なるものはあるべからず。(第二)『人々』の行ふ所なれば、予も亦かく行はざるべからずと。支那に於ては、今も猶機械、輪齒を動かし、輪齒、機械を動かさず。此の狀態の到る處に存續する間は、百事只盲從を善しとし、之を求むるのみ。

苟くも鼻烟を用ゐ得る人々は、みづからも之を用ゐ、友人にも之を差むるは蒙古人の風俗なり。左れば何人も、小さき鼻烟箱の備へありて、朋友に逢ふ毎に之を差め、たとひ其箱には鼻烟既に空しきも、殆んど意に介せざるが如し。是れ鼻烟を客人に差むるは、舊來の慣習に從ふものにして、其の有無は問ふ所にあらざればなり。主人、空箱を毎客に差むれば、毎客また平然之を撮む爲ねして箱を主人に返戻す。何となれば鼻烟の有無を察するの狀を爲すときは、啻に各自の『人體』を損ずるのみならず、併せて主人の『面』を失はしむるを以てなり。其の他萬般の事皆かくの如し。左れば支

『一風流』は支那に限るにあらず印度擔夫の例

伯西擔夫の例

支那人の例

那人の舊習を墨守するや、宛ながら舟人の珊瑚暗礁に注意するに似たり。生物は既に數年の昔に於て死沒したり。然れども破船を避けんが爲めに、勉めて其の遺屍珊瑚暗礁に至るの路に留意せざるべからず。

斯くの如の方法に由りて斯くの如の事を爲すべし、其の他の方法に由りては、一切之を爲す可らずとの決斷を形づくるは、獨り支那人のみに限るにあらず。他の國民にも往々此の風あり。例へば印度の擔夫は常に荷物を頭上に運び、その鐵道工事に備はれて土を運ぶにも亦然かなせり。工事受負人は、土車を與へて頭に代へしめんとせしに、笑を圖らん、擔夫は、土を車上に載せたるまゝ依然頭に置きしぞ。』伯西の擔夫も亦印度の擔夫と同じく、荷物を頭上に運ぶなり。伯西に滯留せる外國の一紳士曾て從僕(伯西人)に手簡を授けて郵便に托せしめけるに、思ひきや從僕は、之を頭上に載せ、石を其上に置きて飛び去るの憂を防ぎけるとぞ。』凡そ甲の場合と乙の場合と、心意的經過(メンタルプロセス)精察に相均しければ、其原因も亦均しき者なり。支那に於ては、此原因甚だ有力あり。例へば、危人始めて布頓(ブッダン)麥粉又は黍粉に鷄卵、牛乳等を和して製したる食物の製法を傳習せし時、偶〻腐敗の雞卵一顆ありて之を棄てたるより、爾來布頓を製する毎に、雞卵一顆を毀

支那人慣習を神明視す

ちて之を棄つるが如き、又は、裁縫師始めて見本として與へられたる舊衣に、一片の布を裝飾として用ゐありしより、爾來新衣を製する毎に必らず此の裝飾を附そるが如き、みな是れなり。顧ふに此の話を爲さば、世人往々支那氣質を過大にせんが爲の作話と爲すものあるべし。左れど決して作話にあらず。ありのまゝに眞實を話すものなり。

支那人が事々物々『うそらしさ』迄に熱心以て先例に率由することは、苟くも其の習慣を熟知するものゝ容易く例証し得べき所あり。ソモ支那は、三十五(二十五)緯度に連亘する大國にして、其の版圖、熱中寒の三帶に跨り、南北、寒暖の懸隔せることは言ふを待たず。然るに國内到る處、成規に從て、冬日も毛皮の帽を用ゐず。麥藁帽を被むること、恰かも畫一の如し。彼れ等が慣習を以て種一の神明視することは、此の一事に由りて推知すべきなり。地方に依りては、嚴冬も猶一箇の床(瓦の高臺を床とし、通火路に由りて熱を通ずるなり。)に少許の火を『おこして』全家悉く暖しと感する所あり。かゝる場處に於ては、此の火を『おこす』べき季節に至らざれば、旅客たとひ寒氣に堪えずして、百方此の火を『れこさん』ことを要求するも、旅店の主人は、季節未だ到來せず

支那瓦師の例

今や支那人漸く新事物を採用す

といひて、一切之を承諾せざるもの少なからず。

支那の工匠が新法を嫌忌することは、世人の熟知する所なれど、就中瓦師の長は、保守の最も保守なるものなり。此の瓦を燒く窯と、その附屬品とは、一切外人の所有なれど、彼の瓦師長は、頑然舊習を墨守して、その外人の命令に從はず。一日其の地方に於ける通常の瓦よりも稍大なるものを要することありて、外人は之が製造を命したりき。さて此の製造に必要の手數は唯模型に用ゆべき、相當の木筐を作るの一事のみにして、他に何の手數もなきに、遲々として、瓦は更に出來せず。依りて長を呼びて之を督責したりしに、長は斷然かゝる改革に加はることを拒絶し、且つその充分なる理由として答ふらく。普天の下、豈かゝる模型あらんやと！

支那、及ひ支那國と外人との關係上に保守主義の行はるゝは、可なりや否や。此の問題は、支那に利害を有するものゝ須臾も忘るゝこと能はざる所なり。蓋し十九世紀の下四半期は、支那歴史の危機たるが如し。今や多量の新酒は支那人に與へらるれども、支那人は、數種の舊き酒器の外、之を受容するに物なし。左れどたとひ少量なりとも、新酒を受容したるは、保守的支那人にしては感するに餘りあり。況んや、少量の

新を用ゐるを好みつゝ舊を捨つるを快とせざるなり

始めて電線を架設したる時の事實

鉄道を敷

新酒を容るゝが爲めに、漸く玻璃壜を準備しつゝあるをや。

方今支那が西土に對する態度は、恰かも狐疑躊躇の態度なり。一方に於ては、聊か新事物を望みつゝ、又一方に於ては、一切舊事物を捨つるを欲せず。譬へば拙劣なる泥柱を以て支へ、纔かに顚覆の期を延べたる舊き泥小屋の、數年前に毀つべきに、今猶依然として存立せるが如く、既に陳腐に屬せし舊き習慣、舊き迷信舊き信仰の現に存立して、新しきものと相對峙するものあり。支那の狀況は則ち是れなり。吾人之を聞く「舊去らざれば新來らず」(If the old does not go, the new does not come)と。此語蓋し幾分の眞理を含まざるにあらず。夫れ舊より新に改まらんとするや、往々久しく抵抗を覺え、而して卒然改まり得ることあり。

例へば、支那に於て始めて電線を架設するや、沿海の地の一總督は、帝に奏すらく「改革に敵對する人民、屢〻線を切りて工事に妨碍を與ふ」と、然れども佛國と將に干戈を接えんとするや(一八八四年(我が明治十七年)甲申の安南事件より起りたる佛清戰爭をいふ)架設の法を改め、速に電信柱を建てければ、人民始めて之を重んじ、毫も妨碍を加へざりき。

輓近支那に於て始めて鐵道を敷設するや、支那人は、平素『風水』(フェンスー)の說を迷信せるを以

支那人は保守の天性と破格の才とを兼有す

父母の喪の例

父に對し臣に對す

設したる時の事實

て、殆んど制すべからざるの妨碍を此の敷設に加へたり。其の始めてカイピン炭坑の出路として短線を敷設するや、一大葬地を横斷せしめざるを得ず。爲めに數箇の墳墓を他に移したりき。但し英佛に於ては、屢〻先例あることにて、何人も別に怪まざりしが、支那に於ては則ち然らず。一たび墓地の兩分せられたるを見るや、『風水』は、決して機關の前に存立すること能はずと謬り信ずるより、忽ち激昂し、容易に服すべくもあらず。止むを得ずして、『風水』と蒸氣と力度の如何を試み、此の試驗に由りて、辛くも民心を安んじ、爾來線路を延長するの說に同意せしむるを得たり。但し財政上の都合より、姑らく敷設を延期したりといへども、此の事に就ては、彼の畫地占上の迷信は、全く勢力を失ひたるなり。

支那人が保守の天性と破格の才とを兼ね有することは、之を同國重要の事件に於て徵するを得べし。支那に於ては、官人たるもの、其の父母死すれば、必らず官職を退かざるを得ず。是れ最も確定したる例規なり。然れども威權最も高き大官の遽きに此の否運(母の死)に遭遇するや、帝室は、彼れが屢〻哀求するにも拘はらず、强て彼れに留任を命し、三年の喪中といへども、細大の事務に鞅掌せしめたり。『又支那に於て、主義

支那人の保守主義は外人之を利用するを得べしる

の最も確定せるは、(第一)父は子の上に位し、子は常に父に敬禮を盡さゞるべからずといへること、(第二)帝は萬民の上に位し、萬民は常に帝に敬禮を盡さゞるべからずといへること、是れなり。往年(清帝同治十四年甲戌(我が明治七年)即ち西暦一八七四年)先帝(穆宗)の崩ずるや、系統に由りて幼帝(今帝載淳)位を嗣げり。時に其の父猶世に在り。ソモかゝる場合に於ては、理當さに父は自殺を行ふか、否らざれば遁世せざるを得ざるべし。左れば世人は、光緒帝(今帝の父)は世に無きものと推測したりき。然るに親王の病むや、その子、即ち帝は、屢、此の目下(めした)の目上(めうへ)、即ち父の病を訪ひて、子たるの禮を盡せり。而して之と同時に又父は、薨去に至るまで、子(今帝)の部下に屬する大臣の一人たりき。(サブオーディネート、スーピリアー)

支那人が保守の天性より先例を過重することは、上文既に叙述したるが如し。然れども外人若し正だしく彼れ等の天性を理會し、愼で之を利用するときは、却て護身の便に供するを得ん。外人にして支那人に敵視せられざらんと思はゞ、只支那風に擬擬し、支那に行はるゝ百事を是認し、權利の公然否拒せられざる者を存立する者と仮定し、彼れ等の攻擊せらるゝに當りて、勉めて之を保護し、百方力を盡して是れ等の諸事を持續すれば足れり。例へば外人が北京及び内地に在住し、その他の諸事

東西全く安樂、利便の標準を異にす

明朝の理髮風に復するを厭ふ

に於て、巧に保守主義を行へば、我か身の安全を保つことを得べし。夫の危險なる暗礁を見よ、航海の勁敵たるは言ふを待たざれど、一たびその内部に入る以上は、平和安全の沼澤ありて、能く船舶を保護し、暴風、その他百般の危害を免かれしむるなり。

第十五章　安樂、利便を度外視すること

(Indifference to Comfort and Convenience)

茲に所謂支那人が安樂、利便を度外視するとは、東洋の標準より之をいふにあらず。西洋の標準より之をいふ。而して本章の主眼は、東西両標準の全く異なれるを示すに在るなり。

吾人は先つ支那の服裝に就て數言を述べん。既に支那人が外人を輕蔑することを論したるの章(第十二章)に記せし如く、西洋の服裝は、支那人の心を誘ふべき所甚だ少なしといへども、又一方より考察するに、支那の如き大國の人民が頭の前部を悉く剃

夏日も猶頭部を炎天に曝らす

扇

り落して、天然より保護の爲めに賦與せられたる毛髮を除き、而かも此の背理の風俗に甘んするに至りては、西人の奇怪に堪えざる所なり。然れども此の風俗は、もと死を以て迫られたるより、止むを得ずして之に從ひ、殊に前章（第十四章保守主義）既に叙述せし如く、尊王の徵証として奬勵せられたるより之を採用せしものなれば、茲に其の奇を喋々するを止め、只人民の之が爲めに不快の感を起さず、却て明朝の理髮風に復するを願ふといふを以て足れりとせん。

支那人は、四時共に頭部を覆はず、之を炎天に曝らしつゝ、殆んと平然たり。酷暑の候には、萬民みな扇を蓋して日光を掩へども、日傘を用ゆるものに至りては、眞に雨夜の星の如し。男子は、他人の刺衝を受けて往々帽を被むることあれども、女子に至りては、局外者たる西人の眼に奇と映するの外なき飾頭巾を被むるのみ。他に如何なる帽をも用ゐず。『支那人が安樂の爲めに緊要と思考する僅々數種の物品の一つを扇と爲す。扇は、夏日之を用ゐて快を取るなり。勞働社會の如きは、夏日、半裸體又は全裸體にて、頻りに扇を使ひつゝ、酒店に往復するもの少なからず。乞兒といへども、往々破れ扇を使用するものあるなり。

毛布の用を知らず

究屈なる衣服を強ふるも亦不平を唱へず

支那人は、もと牧畜を業としたる人民と仮定せられ、而かも天然の賜を利用するの点に於ては、高度の才を顯はせり。然るに此の人民が毫も毛布の製造を知らざりしは、實に支那文明の一奇事といはざるべからず。但し西部地方の人民は、幾分か毛布の製造の法を知りたりといへども、元來羊の多き國（山地に於ては殊に然り）にして、此の法の一般に普及せさりしは、吾人の了解に苦む所なり。

往時、木綿の未だ此の國に輸入せざりし以前には、莞の如き他の植物を用ゐて衣服を製したりといふ。是れ世人の信する所なり。然れども現時に至りては、國民一般に專ら木綿を衣服とす。而して地方に依り、冬季寒威酷烈の場處にては、殆んと身體二倍の綿を衣服に入るゝを以て、小兒の如きは、一たび顚沛すれば、みづから起つこと能はず。其のさま宛ながら狹き箱の中に陷りたるに似たり。支那人とても、かゝる究屈なる衣服を着すれば、固より不愉快なるに相違なし。然れども吾人は、決して支那人が不平を唱へたるを聽きしことなく、寧ろ此の衣服の乏しきに不平を唱ふるを聽けり。今若しアングロ、サクソン人をして此の衣服を身に經はしめたらば如何。必らずや究屈に堪えずして之を脫せんことを熱望するならん。支那人が安樂利便に

冷淡なるは、此の一事にても知るべし。

既に冬服の重く不便なるを述べたれば、之と同時に又如何なる種類の襯衣をも全く用ゐざることを述べざるべからず。ソモ吾人西洋人の心より考ふれば、毛布製の襯衣を着して、屢、之れを交換せざれば、其の日を送り難きが如し。左れども支那人は、毫も此の感覺を有せず。彼の厄介なるドテラ的衣服は、袋の上にも又袋を累ねたるが如くに身體を纏へども、此の衣服と皮膚との間は、空氣の流通自在にして、寒氣恣に皮膚を襲ふなり。然れども彼れ等は、聊かも頓着せず。唯理論上に於て理想的衣服にあらざるを許すのみ。六十六歲の老翁曾て血液循環の惡しきを嘆きしことあり。或る人之に西洋の襯衣を贈り、日々之を着して寒氣を防ぐべしと忠告す。老翁初めは之を用ゐしが、一兩日を經て忽ち之を脫し、「かゝるものを着すれば、暑くして死すべし」といへりとぞ。

支那の履は、布帛を以て之を製し、氣孔多きを以て、輙もすれば濕氣を受け易く、寒冷の候には、常に多少足を冷すの憂ひあり。實用上甚だ不便のものあり。勿論支那にも、油を引きたる一種の長履なきにあらず。此の長履は、濕氣豫防の爲めに製したるも

襯衣を着せず

支那の履は濕氣を含み足を冷す

のあり、然れども他の便利なる物品と同じく、價の高きを恐れて、之を用ゆるもの甚だ少なし。『雨傘の如きも亦然り。支那人は、雨傘を以て貴澤品の內に算へ、決して必要品の內に算へず。』雨天に外出すべき必要ありて、衣服を全く濡はすとも、之を交換するを以て緊要と爲さず。況んや必要と爲さゞるをや。此の場合に於ては、濡衣を纏ふも不便を感せざるなり。『支那人は、外國の手套を感賞す。然れども之を用ゐず。且つ國產として拙き手套なきにあらざるも、極北地方の外、殆んど之を用ゐざるなり。外人の眼に支那服の最欠点の一つと見ゆるは、衣囊のなきに在り。ソモ西洋の衣服には、必要の上より幾多の衣囊あり。即ち手帳を入るゝが爲めに胸衣囊あり、手巾を入るゝが爲めに下衣囊あり、時計、鉛筆、小楊枝等を入るゝが爲めに胸着の衣囊あり、懷中小刀、鍵類、金囊を入るゝが爲めに、亦便利の處に衣囊あり。其の他、懷中櫛、摺尺、塞子拔、長靴拔、釘器、鑷子、小羅針盤、剪刀、針玉、懷中鏡、常關筆を携ふるものも亦決して少なからず。是れ等諸種の物品を常に携帶するに慣れたるものは、之なければ不便に堪え難し。然るに支那人は、之に反して、殆んど此の類の物品を携帶せず。若し人より手巾を贈らるゝときは、之を胸中に挿入す。『我が日本人の俗に所謂懷中するが如きをいふ』小兒を携帶す

雨傘を以て必要品と爲さず

衣服常ふし交換せず

手套を感賞するも之を用ゐず

衣服に『衣囊』なし

支那人は赤條々にて床に入る

るときも亦然り。若し緊要の書類を携帶するときは、之を股衣の中に投じ、紐を以て股衣を踝に緊着け、可及的遺失の患を防ぎて然る後道を行く。左れども上袴を着するときは、只その襞積の中に挿入するのみにして、別に之を緊着くることを爲さず。孰れの場合に於ても、全く遺失を防ぐこと能はず。その屢〻遺失することは、吾人の實際に見る所なり。又長き筒袖を裏返へして其の襞積の中に物品を携帶することあり、若くは上方に反りたる帽の中、帽と頭との間等に携帶することあり。貨幣の如きは、一方の耳の中に入れて携ふることあり。左れども携帶に最も便利なるは帶とす。小財布、烟草入、烟管などみな之に緊着けて之を携ふ。萬一その帶解くるときは、物品を失ふの恐れあり。鍵類、櫛等は短表衣の凸出せる扣鈕に緊着く。故に此の表衣を脱するに當りて、意を注がざるときは、輙もすれば携帶品を失ふことあるなり。

通常支那人の褻服は、吾人の目に甚だ感服すべからざるに似たり。被は、少なくとも複雜の非難は被むるべきやうなし。何となれば赤條々と爲りて衾の中にくるまり、かくて熟睡すればなり。辞を換へて言へば、支那人は、男女共に寢衣を着せざるなり。或はは言ん。記錄に載する所に據れば、孔子は「必らず寢衣あり、長け一身有半」とあり

赤子さいへども全く裸體のまゝ床の中に置く

と。（論語鄉黨篇云。必有二寢衣一。長一身有半。此の解は、他日世に公にすべき『羽化生筆記』增補、海保漁村先生論語講義に詳なり。）實に然り。然れども仮定に據るに、コヽ孔子が齋せし時に用ゐたる寢衣にして、平常の寢衣にあらずといふ。ソヽ兎も角も、近代の支那人が此の点に於て、決して孔子に倣はず、且つ可及的齋せざることは明白の事實なり。加之のみならず、初生の赤子、皮膚の感覺猶非常に鋭敏にして、聊か氣候に變化あれば忽ち之に感するものといへども、全裸體のまゝ床中に置きて、毫も意に介せず、來訪者ある毎に、母は其の衾を剝ぎて裸體の赤子を示すを以て、爲めに往々感冒を患ふるものあり。完全なる鑑定家の説に據るに、支那赤子の大半が生れて未だ一月を經過せざるに、痙攣症に罹りて死するは畢竟之が爲めありといへり。小兒の漸く成長するや、西洋の如く臀當（ディエパー）を以て之を包まず、地方に依りては、二叉の袋に砂又は土を一部入れて之を纏はしむる處あり。噫、西洋の慈母をして之を聞かしめば、恐らくは全身粟起せざるを得ざらん。左れば此の奇服を着せし小兒は、恰かも獸獵彈（獸獵に用ゐる大なる彈丸）を着けられたる蛙の能く、衣服の重きが爲めに其の場に蹲居りて一歩も進退すること能はず。此の風の流行する地方に於ては、猶實際の智識に乏しき人を稱して、未だ『土股衣』（アースツローサーズ）を脱せざる人といふ。（口猶乳臭といふが如き意味

支那人の安樂に冷淡なること、其の家屋の上にも顯はる

南北に通りたる家少なし

支那人が吾人の所謂安樂なるものに冷淡なることは、獨り衣服の上に現はるゝのみならず、家屋の上にも亦均しく現はるゝなり。今之を說き明かさんが爲めに、貧民の住宅を措き、富民の住宅に就て述べん。何となれば貧民は、意中の家屋に住ふことを得ればなり。さて支那人は、住宅の周圍に樹木を植ゑて炎熱を遮ることを爲さず、席を竿に着けて之を遮るものの多し。又かゝる贅澤席を以て日を掩ふを爲すに適せず、寧ろ植物に由りて日を掩ふを容易なりとするものも、喬木を植ゑずして、纔かに石榴、及ひ其の他の裝飾的灌木に甘んず。暑熱烈しくして庭に居るに堪えざれば、出でゝ市街に座を搆へ、市街も亦暑熱に堪え難きに至れば、再ひ家に歸るなり。『家屋は、元來南向きを善しと爲し、南北に明きたるものは、空氣の流通もつとも宜しく、三伏の炎暑も稍〻凌ぎ易し。然るに支那に於ては、此の類の家屋甚だ稀なり。外人怪で其の故を問ふに、彼れ等は異口同音に答へて曰く、『吾人は北口を忌む』と。

寢室の不快

蠅、蚊の害

北緯三十七度の地方といへども、支那人の寢室は概ね『カン』より成る。『カン』とは、乾し晒らせし煉化石を以て組み立てたる高き臺にして、料理に用ゆる火を以て之を熱し、寢室をして温暖ならしむるなり。然れども此の法たるや、常に適度を得ること能はず。若し火のあらざるときは、却て寒冷の媒と爲り、外人をして至極の不快を感せしめ、火の烈しきに過ぐる時は、曉に及びて酷熱に堪え難し。而して火の强弱に論なく、終夜温度をして同一ならしむる能はざるを以て、不便いふべからず。』家族は悉く此の臺上に集りて終宵の暖を取るが故に、支那人に取りては、必要の器具なれども、無血虫(セクト)夥多しく茲に群集するを以て、不愉快限りなし。流石の支那人も、これには閉口して種々の方法を設け、往々年々に煉化石を交換するものあれども、到底無血虫を驅除すること能はず。何となれば、無血虫は、各室の壁間に常住すればなり。

蠅、蚊の類も亦到る處夥多しく出づれども、支那人は、其の害を認めつゝ、豫防の策を行ふもの甚だ少なし。但し香草の類を焚きて、我が那の蚊ぶしの煙纔かに之を防ぐものなきにあらざれど、固より充分の効を奏すべきやうなし。畢竟支那人が其の煩を感するの度は、吾人西洋人の千分の一にも當らざるなり。

安樂の度如何を測定するの標準とすべき一例は、何物を枕に用ゆるやに在り。讀者の知らるゝ如く、我が西洋に於ては、羽を入れたる袋を以て枕と爲し、頭を支ふるに供すれども、支那に於ては、竹製の小さき臺若くは木片、又は煉化石を以て枕と爲し、頸を支ふるなり、而して煉化石を普通と爲す。今若し西洋人をして支那の枕を用ゐしめしならば、必らず苦痛を感し、永く之を用ゆるに堪えざらん。左れど又一方より言ふに、支那人をして西洋の枕を用ゐしめしならば、恐らくは十分時の間も之を用ゆるに堪えざるべし。

(第一六一頁參看)

支那人、羽を利用せず

支那人が毛布を織らざるの一奇事は、上文既に叙述したり。然れども彼れ等が鳥羽を利用せざるに至りては、更に一層の奇事といはざるべからず。換言すれば、支那人は、平素莫大の鳥肉を食するより、多量の羽を得つゝ、此羽を徒しく廢物と爲して之を利用せざるは、吾人の了解に苦む所なり。支那人若し此羽を利用するならば、臥床に入れて温暖を取るを得べく、而かも其の價は極めて低廉なるを以て、支那人如何に非常の節儉家なるも、之を用ゆるを難しとせざるべし。然るに吾人の知る所にては、外人に販賣するこの外は、唯挑塵(はたき)に用ゆるのみにして、他に之を用ゐざるが如し。但し西部地方に於ては、往々麥豆の莖葉へ一圓に羽を振り掛けて、動物の爲めに飼に供せらるゝを防ぐことあるなり。

支那人、羽床を嫌忌す

西洋人より言へば、理想的臥床は、てごたへありて彈力に富みたるものとす。此の目的に最も能く適ひたるは顧ふに近來一般に用ゐらるゝ所の織線(ウヰーブン、ロイア)なる者ならん。左れど支那人の嗜好は全く西洋人に異なるが如し。甚きに支那最も華麗なる一病院の建設せらるゝや、深切なる國手は費用を惜まずして專ら患者の便利を謀り、彼の織線を臥床に供せしが、患者は、更に之を喜ばず、國手の後ろを見るや否や、忽ち床下に跋ひ降りしかば、流石の國手も頗る感情を傷けられたりといふ。

支那人、石油を用ゐず

支那の家々は、夜中殆んと暗黑の境涯あり。ソモ同國に於て用ゆる植物性の油は、暗くして惡臭を帶び、纔かに四周を朦朧たらしむるに過ぎず。晩近漸く石腦油の大利を認めたりといへども、然れども猶四百餘州の廣き、四億人の多き、概ね蠶豆、綿種、落花生より絞りたる油に甘んじて其の他を顧みず。而して其の原因を尋ぬるに單に保守的習慣性の妨ぐる所と爲りて、利便を採用するの明を失へるのみ。

支那の家具の拙く、不愉快なることは、西洋人をして一慨を喫せしむ。支那人は、我か

支那の家屋は濕氣と寒氣とを防ぐに

アングロ、サクソン人の祖先と同しく腰架を用ゆれども、我が祖先の用ゐたるものゝ幅廣きに反して其の幅至て狹く、殊に其の脚は往々弛みて取れ易く、其の側邊は往々椪衝を失ひて頓覆し易きが故に、體量の重き人は、輙もすれば腰架を架け潰して尻餅を巻き、そゝつかしき人は、輙もすれば、一方の端に何人も腰を架けざるに、他の一方に腰を架けて頓覆の禍を招くことあり。夫れ亞細亞洲は、固より廣大ならざるにあらず。而かも椅子を用ゆるは、唯一の支那人あるのみ。然れども支那人の椅子たるや、吾人の思考より言へば、不愉快の標本たるが如し。而して其の或るものは、英國に於て、エリザベス女皇(Queen Elizabeth)時代(エリザベスは、一五五八年(我か永祿元年戊午)位に即き、一六〇三年(我か慶長八年癸卯)崩す。)又はアン女皇(Queen Anne)時代(アンは、一七〇二年(我か元祿十五年壬午)位に即き、同一七一四年(我か正德四年甲午)崩す。)に流行したる模型に似て、長け高く、背部直立し、非常に角張れども、普通に用ゆるは、凡そ二百五十封の體量(數人の體量なり)を載するに適すべき形狀に爲したるもの是れなり。左れども其の堅牢の度は、其の大さに比例せざるを以て、忽ち壞敗を免かれず。

支那の住宅に就て、西洋人の最も不服なるは、濕りて寒きに在り。其の家屋を建つるや、其の基礎に關して節儉を旨とするより、既に其の根本を誤り、必至の結果として

窓障子は風雨等を防ぐに適せず

竈の烟、外人に不快の感を起さしむ

恒久の濕氣を招けり。其の床には、土、又は燒き方の不充分なる煉化石を用ゆるを常とし、外人をして至極の不愉快を感し、非常に健康を傷はしむ。戸は、樞軸によりて開閉すれども、寛くして亦甚だ快からず。殊に「二葉より成るを以て、寒氣は上下より自在に侵入す。適厚紙を以て虧隙を塞ぐも、常に戸を開放するの弊あるを以て、決して寒氣を防ぐに足らず。事務家の如きは、之を愛ひて、その事務所の入口に「此の戸を開放するは唯汝のみ」と記せども、此の掲示すら單に虚言を述ぶるに過ぎず。何となれば、之を開放するは、所謂『汝』のみに止まらずして、人毎に開放すればなり。又家の出入口も、庭の出入口も甚だ低きが故に、體を屈めざれば、頭を打つの憂あるあり。

支那の窓障子(明かり障子、即ち紙を張りたる障子をいふ)は、風、雨、光、熱、塵を防ぐに適せず。窓戸は、之ある家少なし。偶、之あるも、多くは之を用ゐず。

支那の家には、概ね唯一箇の大鍋、一箇の大釜あり。數ガルロン(一ガルロンは、凡そ我か二升八勺餘に當る)を容るべし。然れども概ね一時に一種の食物を烹るが故に、その烹え上がりたる瞬時には、温き湯を得ること能はず。是れ不便の一なり。薪材には、唯莖と雜草とを用ゆるが故に、一人附き切りと爲りて、間斷なく小火管の前に手足を駭け、若くは蹲居せざ

人工の温を身體に取らず

炭酸瓦斯室内に充滿す

るべからず。蒸(たき)は、概ね此の法に依るを以て、煙と蒸氣とは、室内に充滿して、往々外人の目を眩まし、之を窒息せしむ。左れど支那人は、聊かも煩を感せざるが如く、その眼疾の原因と爲るを顧みざるが如し。

吾人西洋人の思考より言へば、支那冬季の生活は、人工の温暖を取らざるが爲めに、無限の不快を覺ゆるが如し。たとひ寒威酷烈の地方といへども、人民の大多數は、只彼の調理の爲めに燃し、而して『カン』に傳へたる瑣少の温暖を取るのみ。支那人は『カン』の愉快を買過し、女子の如きは、往々之を『我か母』と稱ふれども、西洋人に至りては、更に數層の高度に位せる積極的温暖を要するを以て、『カン』の如きは、決してその慊(ものたり)る所にあらず。支那の『カン』を以て、之を西洋の暖爐に比するに、固より同日の論にあらざるなり。

勿論支那にても、石炭の容易く得らるゝ地方にては、用ゐて以て薪材に供ふ。左れど全國に對すれば、縱かに一地方に過ぎず。其の烟は、西洋の如く、烟突より屋外に脱するにあらずして、悉く室内に留まるが故に、室内は漸く炭酸瓦斯の充滿する所と爲りて、不快言語に盡し難し。否、危險の慎なき能はず。木炭は、富裕の人といへども、甚た

合衆國の牢獄は道路の官宅よりも愉快なり

支那人は雜沓喧騒を服はず

之を節用す。然れども稀に之を用ゆるときは、亦石炭と同じく、不快と危險の之に伴ふあり。

氣候寒冷なれば、室内非常に寒くして不快言ふべからず。左れば支那人といへども、往々ありたけの衣服を悉く着ずることあり。是を以て外出の時も、此の上に着すべき衣服を有せず。吾人若し彼れ等に向て「足下は寒きや」と問へば「勿論」と答ふ。支那人は、一生の間、西洋人の所謂人工的温暖を身に取らず。冬日に於ては、血液恰かも河水の如く、其の表面は凝結して、只その下底を緩流するのみ。一道臺(支那第三等の官吏。即ち縣知事なり)曾て海外に在りて言へらく「合衆國の牢獄は、我か官宅よりは愉快なり」と。前陳の事情を參照するときは、蓋し過言にあらざるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

支那人が雜沓喧騒を服はざることは、上文既に之を叙述したり。(第一一七頁參看)氣候漸く寒冷に向ふや、多衆相群がりて温暖を取るは茲に再説するを要せず。(第一六七頁參看)三伏酷暑の候といへども、乘客常に船中に充滿して立錐の地なし。かくの如きは、西洋人の堪ゆる能はざる所なれども、支那人は、毫も意に介せざるが如し。西洋人は、一は空

支那の旅客は旅舍の喧騒を惡しとせず

氣の流通を望み、又一は靜閑を愛するより、少しく人家を離れたる處に住宅を構ふれども、支那人は、空氣の流通、若くは靜閑なるものゝ味を解せず。偶〻二者兼備の家に住するも、更に愉快を感せざるが如し。支那の各小村は、都會の地と同一の設計を以て建設せられ、(換言すれば、人家の相密接すること、宛ながら地價非常に不廉にして庭園を設け能はざるに似たり。)而して必至の結果として、地價の騰貴を招けり。唯都會に於ける地價の騰貴と、村落に於ける其の騰貴と、理由を異にするのみ。彼の近隣に廉價なる廣き地面のあるにも拘はらず、狹き家屋に家族の雜沓するは、畢竟之が爲めなり。

支那の旅舍は、黃昏に數十輛の列車(馬車なり)の到着するや否や、忽ち喧騒を極むれども、旅客は、平然として其の間に心身を休息し、遽だしく食事を終はるや否や、熟睡して復た前後を辨せず。之に反して西洋の旅客は、六十餘頭の騾馬が互に蹴りつ蹴られつ噛みつ噛まれつする其の物音の耳に附きて、半夜眠ること能はず。搗てゝ加へて擊柝の音、狗群の噛み合ふ叫び聲の煩はす所と爲りて、唯輾轉反側するのみ。支那に於ては、旅店の庭内に五十頭以上の驢馬の群を爲して夜中に一場の惡鬼會堂(パンデモニアム)を生

支那に狗害多し

するは珍らしき事にあらず。ユーク氏(M. Huc)の一八一三年(我が文化十年)生れ、同六年(我が天保元年庚申)死す。支那に滯留せられたる佛國の宣教師なり。が吾人に告げし如く、支那人は、驢馬の尾に燈瓦石を吊して其の叫聲を止むるの法を知らざるにあらず。然れども實際に就て屢〻之を驗するに、未だ一回も此の法を行ひたるを見ず。何故に之を行はざるか。何となれば支那人は、五十餘頭の驢馬が各自單獨に叫ぶか、同時に叫ぶか、將た毫も叫ばざるかを注意せざればなり。西洋人がかゝる問題を等閑に附する能はざるに反して、全く冷淡なればなり。支那人は、啻に下等社會のみ、かゝる問題に冷淡なるにあらず。上下おしなへて冷淡なるあり。論より證據は、支那一大政治家の夫人が、或る時、邸内に凡そ百頭の猫を飼ひたるを見て知るべし。

＊　＊　＊

支那に主なき犬の多きは、佛教の感化力與かりて力あるが如し。勿論かゝる犬の多くして市人を煩はすは、獨り支那に限れるにあらず。ジエー、ロッス、ブラウン氏(Mr. J. Ross Browne)は曾て清國駐劄合衆國公使たり、而白き東洋紀行を公にし、自雄の書を挿みて之を飾りしが、中に、瘦狗疥癬狗の共進會とも稱すべきやうなる圖あり。附

記して曰く、「是れ君士但丁堡(コンスタンチノープル)の概況なり」と。今此の圖を見るに、正さしく支那の各都會の地に應用するを得べし。支那に於ては、數百頭の惡狗、群を爲して咆哮し、制すべからざるに至れども、支那人は、毫も之が爲めに不快を感せざるが如く、偶〻狂犬の爲めに害を被むるも、危難の大なるを悟らざるが如し。若し狂犬の爲めに害を被むるときは、其の傷を負はしめたる犬の毛を取りて其の創處に附すべし。然るときは傷忽ちに癒ゆるといふ。西洋の諺に云く「咬みたる犬の毛は其の傷を療すべし」(The hair of the same dog will cure)と。東西一致亦一奇事といふべし。「犬屍路傍に横はるも、支那人は毫も意に介せず。

支那人は便利に冷淡なり

筆、硯、墨、紙

上來叙述したる所は、概ね支那人が安樂に冷淡なるの例なり。今や更に進て便利を顧みざるを說かんとす。之を說くにも亦引くべきの例數多あれども、煩はしきを以て、茲に二三の例を擧げん。支那人は、みづから文學國と稱して誇れり。然れども、實に世界の文學國なり。筆、硯、墨、紙、之を四貴品と稱し、文房は此の四品より成る。左れど此の四箇の必須品の其の一つをも携帶せざるは奇といふの外なし。四者必要の場合に、多

支那人は勞力を省くべき手段を知らず

くは手近かになきのみか、偶〻之れあるも、第五品、即ち水なければ、毫も用を爲さず。水を硯に注ぎ、墨を磨りて然る後始めて必要に應ずるを得るなり。筆は、豫め其の尖を和らげたる後にあらざれば、之を用ゆること能はず。之を用ゆるに、熟練なければ忽ち之を傷ひ、たとひ熟練あるも、久しく之を用ゆること能はず。又我か西洋の如く、筆の代用物、即ち鉛筆やうのものを有せず。仮りに之ありとするも、一旦損傷するときは、再ひ之を修理することを得ず。何とあれば筆刀(ペンナイフ)(ふでけずりこがたな)なるものあることなく、且つ之を携帶すべき衣嚢(かくし)なければなり。

吾人は、曩きに支那人の節儉を叙するに當りて(第二章參看)言へりき。支那人は、不足の材料より良好の成蹟を擧ぐるに妙を得たりと。然れども之と同時に、支那人は、西洋に行はるゝ勞力を省くべき手段を知らざるなり。輓近西洋の旅館に於ては、旅客、何物にても(例へば湯、水、燈火、火、人物)之を要する毎に、唯或る物を推し、又は引くのみにして、忽ち用を辨すべし。然るに支那(十八省)の旅館、一も此の種の設置なく、上等、下等の旅館にしなへて、客人、事物を要する毎に、室の外戸の邊に至りて、聲を限りに叫ばざるべからず。而かも其の言ふ所は、概ね聽き取られざるなり。